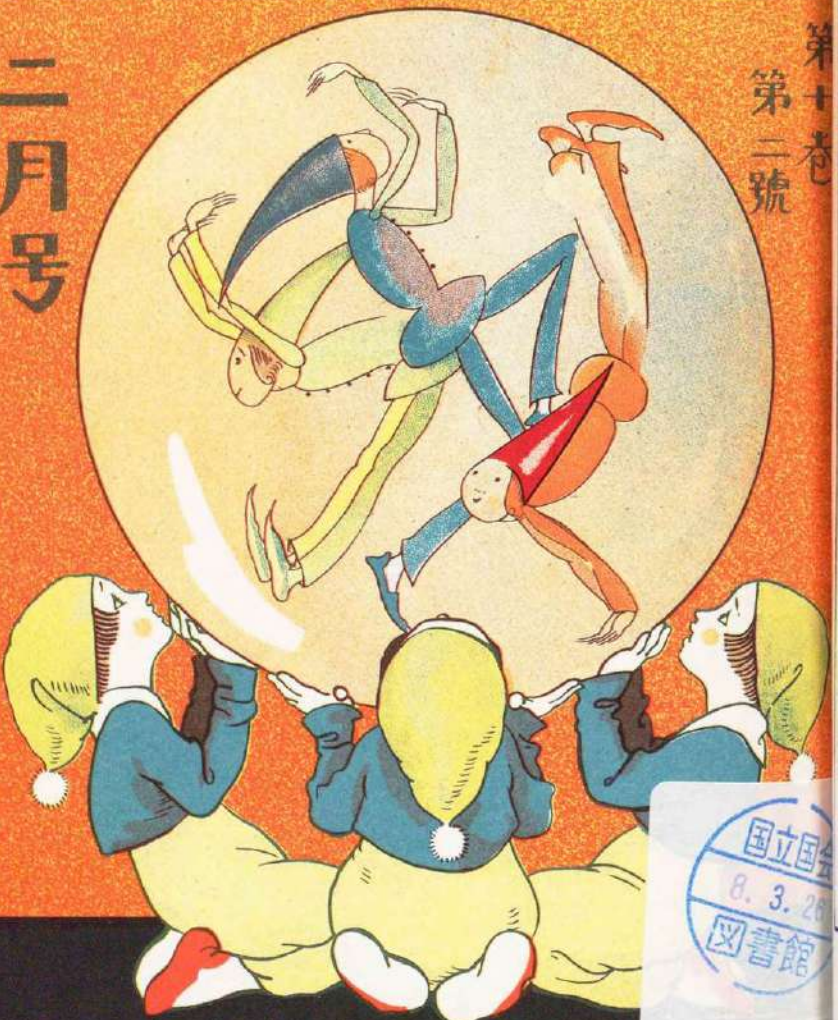


金の星

Z32-B88

第十卷
第二號

二月号



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak 2007 TM: Kodak

大	神	京	名
阪	戸	都	古
			屋



目次

シヤボン玉 (表紙・石版).....	岡本 歸一
雪を蹴つて (口絵・三色版).....	寺内 萬治郎
天神さまのお通り (童話).....	(一) 野口 雨情
同作 作曲.....	(二) 藤井 清水
一の藏二の藏三の藏 (童話).....	(六) 立石 美和
秘密の路 (童話).....	(元) 小島 政二郎
お芋ころく (童話).....	(三) 佐藤 金太郎
世界一周物語 (童話).....	(六) 久米 元一
正太の幽霊 (童話).....	(五) 樺山 千代
とうとの鳥と (挿絵童話).....	(四) 野口 雨情選
舜天丸王子 (童話).....	(四) 三島 霜川
雪の夜ばなし (童話).....	(五) 霜田 史光
狼の恩返し (挿絵童話).....	(六) 佐藤 平一

孤兒物語 (童話).....	(七) 大戸 喜一郎
新ぼら博士 (童話).....	(九) 三井 信衛
世界各国、人のために働く動物.....	(六)
お日様にならうとした林檎 (童話).....	(八) 藤浦 洸
世界各国、あいさつの仕方.....	(五) 寺田 良作
白鳥姫物語 (童話).....	(四) 高橋 里江
やるぞ、やらぬぞ (童話).....	(三) 西川 喜平
頼光の四天王 (童話).....	(二) 川崎 春二
沖の白帆 (童話).....	(二八) 三木 露風
水たまり (童話).....	(二五) 野口 雨情選
ふもとの道 (大人篇).....	(二六) 野口 雨情選
お月さ (子供篇).....	(二七) 野口 雨情選
世界童話欄.....	(二〇)
黄金の魚 (ロシア) 魔法のステッキ (エジプト) 謎を解く王子 (長篇).....	



てつ 蹴を 雪



畫 郎 治 萬 内 寺

((書 版 出 社 星 の 金))



入 繪 世界童話集 (ロシアの卷)

第一卷の「印度の卷」は大層な評判でした。こゝに、第二卷「ロシアの卷」が立石先生の名譯によつて發行になりました。いよく大評判です。書店にて是非一度御覧下さい。
立石美和先生譯・寺田良作先生畫

菊判箱入美本 定價 金貳圓五十錢
内容三〇〇頁 送料 十二錢

- 目次
- 一、黄金島と灰色狼
 - 二、大蛇退治
 - 三、笑はぬ姫
 - 四、美しのパツシリサ
 - 五、ゼメリアの馬鹿
 - 六、霧
 - 七、生命の水
 - 八、海の魔
 - 九、魔法の馬
 - 十、金もちコズマ
 - 十一、駒になつたお姫様
 - 十二、魔法鏡
 - 十三、黄金の都
 - 十四、山の上の國

入 繪 世界童話集 (印度の卷) △定價 二圓五十錢
△送料 十二錢
(忽ち再版)

成田爲三先生著

新撰一部輪唱曲

菊判美装
定價金壹圓
郵稅六錢

新撰二部輪唱曲

菊判美装
定價金壹圓
郵稅六錢

唱歌の面白さは合唱にあります。而して眞味は輪唱によつて初めて味はれる、これは調和の美や、音の賑かさや、變化から来る愉快さであります。然るにこれまであまり輪唱が口にならなかつたのは、これを研究する人が少く、或はあまりに高學年向に偏し、初等音樂教育教材として難に過ぎ親になつた爲であります。本書の著者成田先生はこの間にあつて我國現代唯一の輪唱研究者として詩人北原白秋をして「私の詩や、童謡に生命を吹きこんでくれるのは、成田君の輪唱曲があるからだ」といはしめた位で、今や初等音樂教育界に異常な歡迎と好評をうけ「これこそ現代兒童の最も美しい心の糧」との定評と推獎を博してゐます。その平易なること輕快なること、しかも氣品あることは誠に著者獨特の境地で、容易に他の追從を許さぬところでありました。歌謡はいづれも現詩壇に選ばれて著者が最も信ある楽曲を精選し二部輪唱曲並に三部輪唱曲を編められました。歌詞はいづれも現詩壇一流の大家で、歌曲としての精神がびつたり合致し、兒童の心を捉へずにおかないものであります。今度大エボツクを劃すべきものであることを信じて止みません。本書の出現は必ずや唱歌教授にある一

成田爲三先生著 小學唱歌名曲集 附 童謡輪唱曲 奏

菊判上・下二冊 續新裝美
定價金壹圓 郵稅六錢

東京高等師範編 小學唱歌教授細目

菊判上 裝全一冊
定價金九拾錢 郵稅六錢

東京市神田區 錦町一丁目 培風館 電話 三三三六 三三三七 三三三六 三三三七

((書版出社星の金))

日本歴史實傳物語叢書

著 生先川霜島三

畫 生先山古島羽

武人のかゝる新田義貞の旗上げから討死まで、繪巻物のやうな此の物語り。



南朝哀史

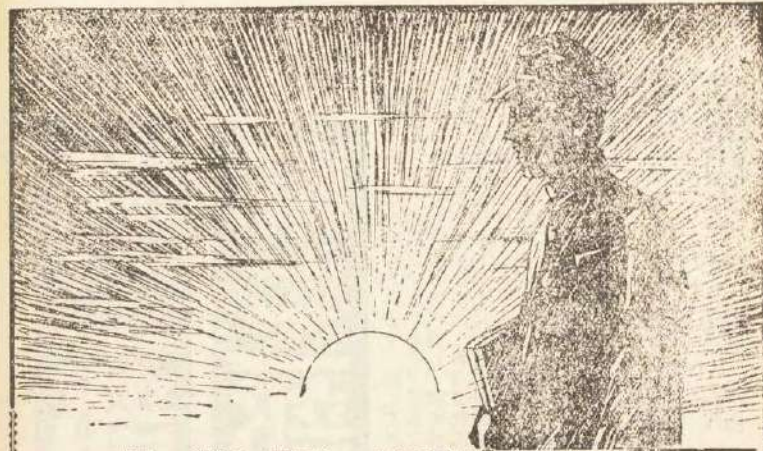
新田義貞

定價金 一圓

送料 十錢

此の南朝の爲めに奮戦した新田義貞の一生を知りたい方はこの本をお読み下さい。

皆さんこの本をお読み下さい。皆さんは此の本によつて昔の武人達がどんなに一生を終つたかといふこともわかり、ことに禁い御身分の宮様までが命をお捨てになつて會戦なすつた事もわかつて、皆さんに深い教訓を與へます。



創立廿六週年
五十回新學期
會員大募集!!

滿天下の
青少年諸君に檄す
●講義録見本つき規則
ハガキで申込み次第無代進呈す。

いつ入會しても講義録は毎月二冊づつ順序よく送る。

▼ヤミ郵便で
▼既い書簡に
▼留學で中學卒業が出来る
▼今すぐ入會せよ
▼無學費は此社會の福利と
となすであらう

新しい陽が上る
君よ新しい希望に燃えて
だにほんくみんがくわいにくわい
大日本國民中學會へ入會せすや
ねんけいぐわんたん
一年の計は元且にあり
君の一生の幸不幸が今定まるのである。
學問の大切なことは君も亦よく知つてゐてあらう
さうして獨學でも立派に成功出来ることや
獨學者の爲には大日本國民中學會の中學講義録が
一番理想的であることも亦よく君は知つてゐる筈だ。
昭和三年の新春だ。特に君の決心を促す。

日本第一の立身成功の基礎を
中學講義録でつくれ!!

に者會入下目
供提典特大五

會學中民國本日本大 京東 臺河駿

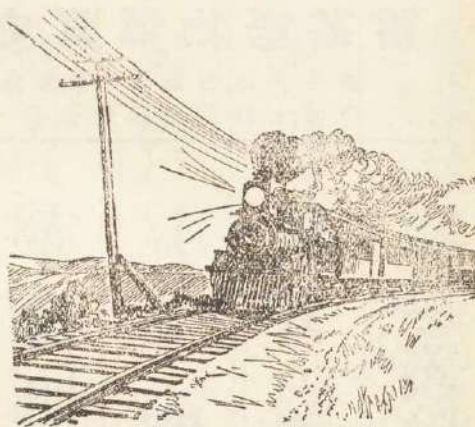
田神路電
三〇二四 京東電話

少英 年雄 偉叢 人書

錢十二圓一價定
錢十料送

少年探險家物語
少年英雄物語

3 少年發明家物語
4 少年大飛行家物語



少年偉人英雄叢書(3)

少年發明家物語

久米元一著・平澤文吉畫・定價一圓二十錢・送料十錢

發明界の王といはれるエヂソン、汽車の發明家として名高いスチブンソン、飛行船の發明家ツエツペリンなど、有名な發明家の一生を、面白く物語風に書いたものです。殊に、えらい發明家の少年時代のお話は、どんなに皆さんを喜ばし、力づけ、慰めるかわりません。發明家を志す人は勿論の事、何人も一讀すべき名著であります。

金の星社發行

系大話童作名界世

錢十料送・錢十六價定・本美入箱判六四

無類の安價

世界の面白い童話に、繪物語に近い程澤山の挿繪が入つた美しい一冊です。きれいで内容が面白く、そして定價の安いといふ點で、粗末な全集本などの到底及ばない金の星社獨特の出版だといはれ、大層な評判を受け、重版又重版の右様です。

1 魔法のバラ

是は世界に有名な話
です。王子が女神から
バラをいたゞいて災
を免れる面白い話。

2
ほ
ら
博にか
士せ

9 魔法の小人

活動家としておなじみの「ピーター・パン」でも、世界的な童話としても感心するでせう。

3 盗ぬすまれた王女おうむすめ

魔法使に盗み出された
 王女が、すでに危い命
 を王子に救ひ出される
 奇々怪々の物語です。

4 親おや
指ゆび
ト
ム

親指ほどしかない、親指トムがエライ冒険をして皆んなを驚かす、イギリスで有名な物語

5 アラビヤン航海の巻

シンドバツドの七度の航海は、アラビヤンナイトの中でも、最も面白いお話であります。

6
利口な驢馬

利口な鬚馬の一生はド
ンナに奇抜で面白いか
一度読み出したなら止め
られぬ評判の本です。

7
大
勇
士

ビヨールと云ふ世
 界にならびなき英雄の
 一生を書いた、血湧き
 肉躍る一大武勇傳です

10
人 買 物 語

日本の人買物話として
最も有名な關子王と安
壽姫の涙と愛でつゞ
られたお話です。

11 荒野の勇士

大膽人ロシヤの歌を面
白く曲いけるのです。
悲しくも又勇しいお話

12
幽

靈

船

お話であります。奇々怪々

13 魔女の島

少年が、魔法の鳥に乗
つて、さまじく、冒険
を行ふ不思議な物語。

14 沙漠の魔女

打つものがあひます。
内容の面白さ勿論のこと

金の星家庭文庫 (5) 平古竹事取物語語 定價金貳圓 送料十二錢	金の星家庭文庫 (4) 奴小母を尋ねて三千里 隷公子物語語 定價金貳圓 送料十二錢	金の星家庭文庫 (3) グドン・キホーテ グ・ム童話 定價金貳圓 送料十二錢	金の星家庭文庫 (2) 青アンデルセン童話 イソップ物語語 定價金貳圓 送料十二錢	金の星家庭文庫 (1) ロビンソン漂流記 アラビヤン・ナイト ガリバー旅行記 定價金貳圓 送料十二錢
---	--	---	--	---

世界の有名作を三種づつ一冊に收め、目もさめるばかり美しい本です。定價の安いものにもびつくりされてゐます。皆さんが待ち兼ねて買ふのもその譯です。

書叢語物傳實史歷本日

書生先山古鳥羽・著生先川霧島三

◇錢十料送◇圓壹金冊一各價定◇

6 維新 哀史 彰義隊と白虎隊 徳川幕府が倒れ王政復古となつた明治維新の物語の中で、有名な彰義隊と、白虎隊のお話を面白く書いたのが本書です。少年諸君はこの本によつてどんなに深い喜びを見出されるでせうか。	5 信玄と謙信 (川中島戦) 信玄と謙信の幼い頃のお話からはじまつて、この二人の偉い大將が川中島で大合戦をする有様までくわしく書いてあります。一々史蹟をさぐつて書いてあるこんな面白い本は外にありません。	4 小楠公 楠正行のお話で本になつてゐるものが少い中に、この本だけは勇壯な正行の一生を傳へてゐる得難い著述です。父正成の死後、正行はどんなに勇壯な一生を送つたか本書を御覽下さい。	3 赤穂四十七士 三島先生が最もお得意の研究だけに、でたらめな談話などさへ逸ひ、眞に迫つてゐます。大石頑之助をはじめ四十七士が、血の涙を流して主君の仇を討つたその當時の有様が手に取るやうに分ります。	2 曾我兄弟 あはれにして勇ましい曾我兄弟の物語は、日本の物語として永く傳へられるべきお話です。三島先生の苦心の結晶になつたこの「曾我兄弟」はこの物語と共に永遠に傳へられるべき名著です。	1 源義經 源義經のお話は誰が讀んでもたまらなく面白いお話です。この本は、でたらめの義經の物語とは違つて、歴史によつて義經の生ひ立ちから最後までを書いたものでありますから實に立派な本です。
---	---	---	---	---	--

(通卷第九拾九號)

第三編 川名芳郎編 池上浩装幀 黒船の襲来 (ペリー来朝と生麥事件) 第九編 池上浩装幀 尊王攘夷 定價各金一圓 送料十二錢	世界名篇物語叢書第十六編 小島政二郎編 池上浩装幀 ナポレオンを捕へる (附録 ナポレオンを救ひに) 定價金九十錢 送料十二錢	少年少女科學大系第八編 松平道夫著 池上浩装幀 兒童鑛物學 定價金一圓 送料十二錢	世界童話叢書第十一編 豊島次郎編 高坂元三装幀 スペイン童話集 定價金一圓半錢 送料十二錢
三百年といふ長い太平の夢を食つてゐた徳川幕府も、嘉永六年に米國の水師提督ペリーが四隻の軍艦を率ゐて浦賀の港に現はれた時、その驚きやうはどんなでしたせうか。さうでなくては、やうやくその時のあやうくなつて來た幕府の屋臺骨は、それをきつかけに一層揺りうなつて來ました。折も折、京都を中心として起つた尊王派の人々は、時こそ至れりと、尊王攘夷の大旗を押したてゝ、その勢は日一日と盛んになつて行きました。かうして明治維新の大業へ一歩は一步と近づいて行つたのです。(本書内 容見本御入用の方は御一報下さいまし)(次刊——新撰編)	一代の英雄ナポレオンも敗軍の將となつては眞にみじめなものですよ。ナポレオンを捕へろと獨逸軍の精銳の中から特に擧げられた九人の騎士の爲に、あはれ袋の鼠とならうとした時降下の身代りに立つたジェナール大佐の活躍こそ誠に目覺しきものでした。(次刊——前世界物語)	日常生活に必要欠く事のできない金・銀・銅・鐵を始めとして金・銅・石・紅玉等の寶石類に至るまで、その形や性質は無論の事、どうして地中から掘り出されどうして實用化されるか、例によつて興味深く記した本書こそ、必ずや多大の御満足を與へる事と信じます。(次刊——兒童電氣學)	ドンキホーテを読んでもお分りになるやうに、スペインの童話には軽い滑稽の内にちがなながら騎士道的な仁侠と正義に對する、燃ゆるやうな熱情とが到る所に現はれてゐます。そして又此の國の童話位明るい氣持で、讀む事のできるものは他にないでせう。(次刊——日本童話集)

東 京 市 外 金 蘭 社 振替 東京 一〇七 番 番 五六五 六川石小 話電

天神さまのお通まり

作 詞 野口雨情

作 曲 藤井清水

M.M. ♩ = 120

(速く陽気に)

First system of the musical score. It features a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line starts with a whole rest followed by a half note G4, then a quarter note A4, and a half note B4. The piano accompaniment consists of a steady eighth-note pattern in the right hand and a simple bass line in the left hand. Dynamics include *f* (forte) and *p* (piano).

Second system of the musical score. The vocal line continues with the lyrics 'はーし かけな はしかけ な 天神' and 'ちーに つきな ちーつきな 天神'. The piano accompaniment continues with the same rhythmic pattern. Dynamics include *mp* (mezzo-piano) and *f* (forte).

Third system of the musical score. The vocal line has the lyrics 'さまの おとほり ちゃ' and 'こまの おとほり ちゃ'. The piano accompaniment features a more complex texture with chords and moving lines. Dynamics include *poco a poco rit.* (rhythmically decreasing) and *f* (forte).

M.M. ♩ = 76

(ゆるく典雅に)

Fourth system of the musical score. The tempo changes to a slower, more elegant pace. The vocal line has the lyrics 'ごもんは うめばち うめに うぐいす'. The piano accompaniment is more spacious, with longer note values. Dynamics include *mp* (mezzo-piano) and *mf* (mezzo-forte).

Fifth system of the musical score. The vocal line has the lyrics 'ホーヤ ホケキは はるの さきがけ'. The piano accompaniment continues with a steady eighth-note pattern. Dynamics include *mp* (mezzo-piano), *mf* (mezzo-forte), *rit.* (rhythmically decreasing), and *D.C.* (Da Capo).



ホーヤ ホケキヨは
春のさきがけ
お伴につきな
さア つきな
天神さまの
お通りぢや



天神さまのお通り
そり橋かけな
橋かけな
天神さまの
お通りぢや
御紋は梅鉢
梅に鶯
野口 雨情

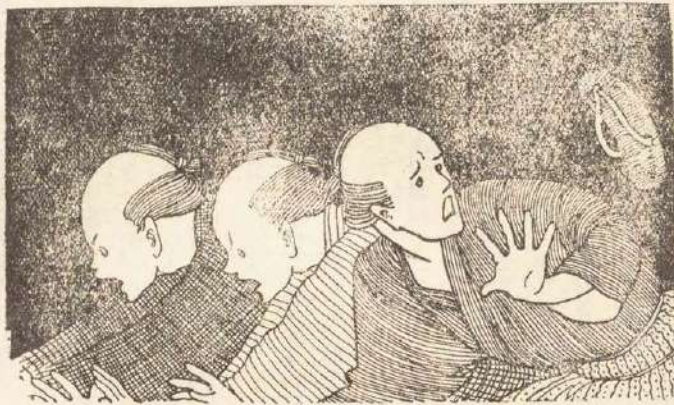
一の藏二の藏三の藏

立石 美和

岩岡とも枝 畫



遠くの方へ、あそびに行つた若者たちは、夜あそくなつてかへつてきました。
さびしい、さびしい山路を、若者たちは元氣をだして、わざと大きなこゑで、歌をうたつたり、話をしたりして歩いてきました。
古いお宮のところまでくると、なんだか、向ふの方で、チラ／＼と、火がもえて居ます。
そして、その小さな火が、だん／＼大きくなつて、みんなの方へ近づいて來ました。
やみをすかして、よくみると、それは眞白な着物をきた女の人でした。



ながい髪の毛を、バラ／＼と頭からかぶつて、頭に立てたろうそくの火が、チラ／＼と光つてゐるのです。
そして、胸にはビカ／＼する鏡をぶらさげ、口には大きな櫛をくわへて、高い足駄をはいて、音もさせずに、スタ／＼、スタ／＼と歩いて來ます。
そのおそろしさと云つたらありませんでした。
これは、「丑の刻まわり」といふものださうです。女の人といふものは、弱いものですから、したいと思ふ事でも、自分の力では、どうしても出来ない事があります。そこで、昔の女の方は、こんな風をして、眞夜中に、誰にも知れないやうに、神様にお詣りして、神様に、力をかして下さるやうに、お祈りをしたのださうです。
むかしでも、こんな事をするのは、よく／＼の事です。それで、『もしも神さまが、むりな願ひをかなへて下されば、わたしの命をさしあげます』と云つて、一心においのりをするのださうです。
ですが、その姿を、ちよつとでも人に見られたら、もうどんなに願ひしても、何も彼もだめになつて終ふのださうです。
そんなわけですから、「丑の刻まわり」を見た爲に、その女の人に

殺されて終つたといふ、恐ろしい話を、若者達はみな聞いて、知つて居ました。
若者たちは、後も見ずに、先を争つてにげだしました。

「ホーイ、ホーイ！」
後の方からは、丑の刻まゐりが、聲をかけてあつかけて來ました。

一生けんめいに、にげて、足の早い、はしつこい人達は、川や田畑をとび越えて、影も形も見えなくなつて終ひましたが、たつた一人、にげあくれた若者の三郎は、木の根につまづいて、そこへころんで終ひました。

その間に、あつかけて來た丑の刻詣りは、ぐつと三郎の背中を、あさへつけて終ひました。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

三郎は、ふるへながら、あやまりました。

女の人、眞青な顔をして、ちつと三郎を見つめ

て居ましたが、それは、山姥のやうな、恐ろしい力を出して、ぐんぐん、ぐんぐんと、三郎を引っぱつて行つて終ひました。

どのくらゐ來たのか、どの路を、どう來たのかもちつとも分りませんでした。

見ると、眼の前には、この邊で、見た事もない、立派な館が立つてゐます。

丑の刻詣りの女は、黙つて三郎を、その御殿の中へ連れて行きました。

いくつも、立派な座敷を通つて、いちばん奥の一ばん立派なお座敷へくると、女の方は、黙つてそのざぶとんの上へ、三郎をすわらせました。そして、自分は、すつと、出て行つて終ひました。

さみがわるいし、あつかないし、三郎は、ガタガタ震へ乍ら、すぎがあつたら逃げださうと思つて、キョロ／＼そこいらを見廻して居ます。と、すうつと襖が開いて、美しいお姫様が一人出て來ました。



そして、

「さき程は、しつれいをいたしました」

と、ていねいにおじぎをします。

三郎は驚いて、

「あなたは、どなたですか」

と、たづねると、そのお姫様が笑つて、

「いま、あなたと一緒に來たものです」

と云ひました。

ほんとうか知らず



それは、繪でも夢でも見た事もない、うつくし、やさしさうなお姫さまでした。

三郎は、心のうちで、こんな人なら、ちつともわくなくないと思つて、初めてニコ／＼と笑ひました。

すると、お姫様も微笑んで、

『もうあなたは、何處へも行つてはなりません。けふから、あなたが、この家の御主人です。神様が、わたしに下さつた旦那さまですから、一生こゝで暮して下さう』

と、手をついて頼みます。

『何うしてです？ わたしには、少しも理がわかりません』

『でも、わたしは、二十一日の間、神様にお祈りをして、どうか、いゝおむこ様をお探し下さいとお願ひしました。けふは、ちやうど二十一日目の歸り路だつたのです。ですから、あなたは、神様がわたしに下さつたおむこ様にちがひありません』

そこで、若者は、いろ／＼考へて見ましたが、こんなやさしいお姫様と一緒にこんな立派な御殿に住めたら、幸せにちがひないと思ひましたので、いつまでも、御殿で暮す決心をしました。

お姫さまは、大さうよろこんで、さつそく結婚式のしたくにとりかゝりました。

一日、二日、三日の間、二人は仲よく、ゆめのやうに仕合せに暮しました。

三日目の事でした。

お姫さまがいふ事には、

『わたしはこれから、ちよつと外へ行つてまゐります。どうしても、行かなければならない用事がありますから、しばらくの間、あるすむをしてゐて下さい』

そして、大きな鍵を、三郎に渡して、

『この鍵は、裏にある、一の蔵、二の蔵、三の蔵の

鍵です。そのお蔵にあるものは、みんな、あなたとわたしのです。留守の間に、たいくつでしから、

開けて御覧なさい。けれど、一生のお願ひですから三の蔵だけは、決して開けて下さるな』

『分りました。三の蔵は決して開けません』

若者は、さう云つて、姫から鍵をうけとりました。

お姫さまが出て行くと、三郎は、すぐたいくつで堪らなくなつたので、鍵を持つて、裏の方へ行つて見ました。

見ると、なる程、一の蔵、二の蔵、三の蔵、大きなお蔵が、行儀よく立ち並んでゐます。

三郎は、最初に、ギーンと、一の蔵の扉を開けて見ました。そして、

『あつ！』

といつて、驚きました。

といふのは、それが、思ひもよらない程、たくさんの寶物が、ぎつしり詰つてゐて、キラ／＼、キラ

キラと、眼がくらむ程、輝いて見えたからでした。

大判小判、金銀さんご、ありとあらゆる寶物！

『これが、みんな自分と姫と、二人のものか知ら！』

三郎は、暫らく、ぼー／＼として、見惚れてゐましたが、われに返ると、そこを閉めて、ギーン！と、

二の蔵の扉をあけてみました。

『いやーッ！ 大變なお米だなあ！』

三郎は、二の蔵の中に、ぎつしり積みあげてある米俵の山を見あげたり、見下したりして、感心して終ひました。

二の蔵には、そんなに澤山のお米が入れてあつたのです。

二の蔵を閉めた三郎は、そのまゝ座敷へ歸らうと思ひましたが、急に三の蔵が見たくて、見たくて、堪らなくなつて終ひました。

『ちよつと、あけて見ようか知らッ！』

『いや／＼、あんなに約束したのだから、よさう、

よさう」

三郎は、何れもく、そんな獨りごとを云ひまし
た。

「ちよつとならいいだらう。ちよつと見るだけだか
ら。お姫さまは、みんな自分達のものだと云つた。
けれど、自分は、取るわけではなし、手で觸る事も
しないのだから、後であやまつても大丈夫だらう」
とうく、そんな事を云つて、がまんのできなく
なつた若者は、ギョッ！と、三の藏の扉を開けて
終ひました。

「あーッ!!」

今度こそ、三郎は、たまげて終つたにちがひあり
ません。

一體、三の藏の中には、何があつたと思ひにな
りますか？

海です！ 海です！

廣いく、あをいく、青海原です！

そして、静かなく海原の、はるかなく、沖の方
では、真白な鷗が、百も二百も、千も二千も、ぐる
ぐる、ぐるく、大きな輪のやうに、飛び廻つてゐ
ます。

よく見ると、その鷗の群は、大きい一匹の鷗をと
りまいて、

「ちろりん！ ちろりん！」

と、悲しうに、なつかしうに鳴きながら、飛
び廻つてゐるのでした。

「夢か？」

三郎は、思はず叫んで、眼をみはりました。

けれど、夢ではありません、三の藏の海には、あ
日様が一杯に照り輝いて、静かな波の音さへ、聞え
てきます。

その時、突然、何處からともなく、

「三郎さま！ 三郎さま！」

と、自分を呼ぶ姫の聲がきこえました。

「しまった

！」

さう思つ

て、三郎は

大いそぎで

三の藏の扉

を閉めて、

座敷へ、か

けあがつて

來ました。

誰も居ま

せん！

それから

暫らくたつ

て、

「たいてい！」

と云つて、

姫が外から歸つて來ました。



けれど、姫は、いつもと異つて、大さう悲しさう
な顔をしてゐます。

そして、三郎の顔を見ると、ホロ／＼と涙をこぼして、

『あれ程お願ひして行つたのに、あなたは三の藏を御覧になつたでせう！』

と、いふのでした。

姫のなき顔を見ると、若者も、急にかなしくなつて、後悔しながら、

『いゝえ、みません！ みません！』

と、いふと、姫は手を振つて、

『もう仕方がございません！ わたしは、あの藏の中から、見てゐたのですから！』

といつて、また泣きました。

『あれ！ 變だなあ！ だつて、藏の中には、誰もゐなかつたよ。海と、鷗だけだよ！』

『それ御覧なさい！ 矢張り見たのでせう。ほんとうは、わたしがその鷗でございます』

『えい?!』

姫は、忽ち鷗の姿になつて、バツと、飛び立つて終ひました。

『三郎さま！ さようなら！』

姫は一度云ひました。

三郎は、あい／＼と、聲を出して泣きました。

鷗になつた姫が、大空へまひ上つて、見えなくなつてからも、

『ちろりん！ ちろりん！』

と、悲しさうな、聲が、いつまでも聞えてゐました。

三郎は、さみしくて、さみしくて、ちつとの間もちつとして居る事が出来ませんでした。

裏へ行つて見ると、いつの間にか、三の藏が、ぐづ／＼に崩れて終つてゐました。

こわ／＼、一の藏と二の藏を開けて見ると、お米俵も、寶物も、ぎつしり元のまゝにつまつてゐます。

『わたしは、ながい／＼の間、海に飛んでゐました。人になりたいといふ願ひが、千年目にかなつて、あなたと、暮せるやうになつたのです。それで、けふは、古いお友達のお鷗たちに、お別れに行つてまゐりました』

若者は、さつきの、三の藏の中の景色を思ひ出しました。そして、あの、大きい鷗が、姫だつたのかと思ひました。

『けれど、わたしには、悲しいの東があつて、もしも鷗の姿を、人に見られたら、またもの、鷗にかへらねばなりません！ 三郎さま！ さようなら！ わたしは海へかへります。』

姫は、さう云つてまた泣き伏しました。

三郎は、悲しくて、悲しくて、がまんが出来ませんでした。

『いやだ、いやだ！ 行つちやいやだ！』

さう叫んで、しつかり姫をつかまへようとする、と、

『さみしくて、とても一人ではゐられない！』

三郎は、さう思つて、家の人達を、みんな御殿へつれて来るつもりで、急いで、自分の村へかけつけました。

不思議！

たしかに、三日前の自分の村なのに、たいへんやうすが變つてゐて、誰一人、知つてゐる者がありません。

くわしい話をしてきかすと、その村で一番年よりの方が、

『うん／＼、さう云へば、昔そんな事があつて、何處かへ行つて終つた若者があるといふことを、わしが子供の時分に、お爺さんから、聞いた様な氣がするよ』と、云ひました。

三日！ 三日！

たつたその三日の間に、わたし達人間の世界ではもう、三百年も経つてゐたのでした。(をばり)

兒童地理

世界一周物語

久米 元一

柳田 謙吉 畫

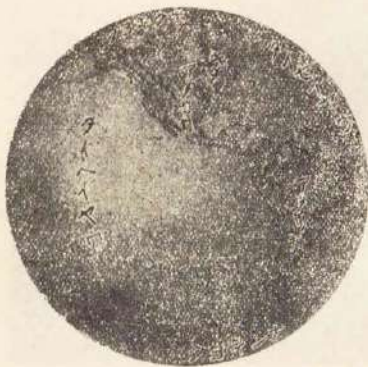


雪と氷のエスキモー

皆さんは船に乗って、遠い外国へ行つて見たいと思ひになりませんか？ 私なども小さい時、どんなに『外国』といふこととにあらがれをもつてゐたことでしょうか。大人になつてから、私ははじめてその望みをかなへる事が出来た。私は明治二十六年に日本の國を出發して以來、丁度三十四年の水の間、世界中を隅から隅まで歩きまわつて來ました。一年中、氷に掩はれたアラスカから、緑の椰子につつまれた南洋を通り、南は遠くマゼラン海峡の

あたりまで行つて参りました。その間に、いろ／＼な珍らしいこともあれば面白いこともあり、悲しいこともあれば嬉しいこともあり。私は今、その内から二ツ三ツを選んで『洋行みやげ』として皆さんにお話ししようと思ひます。又エハガキもたくさん持つてきましたから、面白さうなのを御覽に入れませう。まづ第一がエスキモーです。雪と氷に掩はれたエスキモーです。え？ なんですつて？ この寒いのに雪の話をしはごめんなんです。

ツて？ そんな意氣地のないことでは困りますね。まあエスキモーの子供達の元氣のいいところを見てやつて下さい。さうすればもうとても短氣になんかあつてゐられなくなります。挿畫でごろんの通り、エスキモーといふのは、アメリカの一帯北にあたる地方に住んでゐる人々のことです。



私は明治三十年の冬、權に乗つて、このエスキモーの村を訪ねました。だん／＼村へ近づいてゆくと、むかうの方に、大きなおまんぢうをふせたやうな物が、たくさん並んでゐるのが見えました。これはエスキモー人が、雪と氷で作つたお家です。雪と氷のお家！



ずのぶん妙ではありませんか。左の方に、エスキモー人がお家を作つてゐる繪がありませう。雪が寒さのために、カン／＼になつてゐるので、まるで煉瓦のやうに持ち運びすることが出来ます。私がこのお家へ近づいてゆくと、向ふの方から、二人の子供がきやツきやツと笑ひながら、驅けてききました。大きい方が男の子で、小さい方が女の子です。二人とも



林檎のやうな赤い顔をしてゐます
今まで雪の中をころげ廻つてゐた
と見えて、毛皮の着物が雪だらけ
です。
私は、すぐこの子供達と仲よし
になりました。男の子は、イカワ
と云ひ、女の子はトウキイと云ひ

ました。イカワは、私の手を引つ
ばつて、
「おぢちゃん、僕の家へ来ないか」
と云ひました。
「行つてもいいよ。」と答へると、
子供等は大人へ喜んで、すぐに
轎と犬を引ッぱつてきました。犬
はみんなで七匹、どれもこれも毛
がふさふさとして生えて、たくましい
身體つさをしてゐます。
私達は轎に乗りました。
トウキイが、びゆうと鳴らす鞭
の音につれて、轎はする／＼と走
りだしました。子供等の家は、村
の一番端れにありました。
「さア来たよ。これが、僕の家だ
よ。」
見ると、イカワのお家も、やつ

ばりお饅頭です。私は家の前に立
つたまゝ、扉はどこにあるのかと
思つて探し出したが、どこにも見
當りません。するとイカワが、お
家の根元の雪を掻きわけて、大き
な鎌瓦を掘りだしました。その鎌
瓦をとりのけたあとが、ぽつかり
と穴になつて、お家の中へ這入れ
るやうになつてゐたのです。
私は二人の後について、お家の
中へ匍ひこみました。

これはまあなんと不思議なお家
でせう。ちやうど、卵の殻の中に
ゐる様な感じがします。天井も雪
壁も雪、床も雪です。右の方に、
やはり雪で作つた棚があつて、そ
の上に白熊の皮が掛けてあります
これがエスキモー人の寝る寢臺な

のでした。私が驚ろいてゐると、
上の方からガヤ／＼と人の聲がし
て、二人の男と女が降りてきまし
た。



これは、子供達のお父さんとお
母さんでした。お父さんは、眼の
鋭く光る人で、脊中には大きな
海豹をかついでゐました。海豹の
頭には、まだ生々しい槍の傷痕が

ありました。今とつてきたばかり
なのでせう。
子供達は海豹を見ると、大喜び
で手を叩きました。海豹の肉は、
エスキモー人にとつて、一番上等
の御馳走なのでした。
お母さんは、脊中に赤ちやんを
おんぶしてゐました。丁度、日本
人のやうなので、私は大人へ懐か
しい感じがしました。
「母さん、お腹がすいた……」
と、かあいゝトウキイが甘えま
した。
「いま直ぐ御飯にしてあげるよ。
お客さんがいらつしやるから、お
となしくしてゐないと、笑はれま
すよ。」
お母さんはかう云ひながら、御



飯の支度をはじめました。まづ圖
にあるやうなランプに火を點けま
した。ランプと云つても、石で作
つたお碗のやうなもので、中には
海豹の油が入れ
てあります。火
をつけると、さ
かにに油煙が出
るので、暫くた
つと、私の顔も
イカワの顔もトウキイの顔も、煤
で眞黒になつてしまひました。
お母さんは、海豹の肉を料理し
て、お鍋の中へ入れ、ランプの上
へ掛けました。暫くすると、お鍋
はぐつ／＼と煮たつてきました。
お母さんは、鯨の骨の杓子でか
きまぜながら、そのお鍋の中へ、

海豹の生血を入れました。私は見てゐながら、こりや大變なことになるつた、こんな物が食べられるか



トウキイの大事なお人形

しらんと、ひどく心配になつて来ました。

やがてお料理は出来上りました。家族の者達は仲むつまじく、お鍋をとりまいて坐りました。ランプの灯は赫々と一同の健康さうな顔を照してゐます。それは、なんとといふ美しいありさまでしたらう！

お父さんは私のお皿に、特別上

等の切身をつけて、お汁をたくさんかけてくれました。私はこわごわ食べてみました。それは正直のところ、あんまり脂こくて、馴れない私には旨しいものではありませんでした。エスキモー人は寒さを防ぐために、どうしてもかうした脂こいものを食べる必要があるのです。イカワやトウキイは、おいしい／＼と云つて、澤山たべました。

そのあとで、野いちごの干たものが出ました。これは私にも大へん美味しく食べられました。『この野莓は、夏の間にとつて乾かしておくのです。』と、お母さんが云ひました。このお母さんの話によると、エスキ

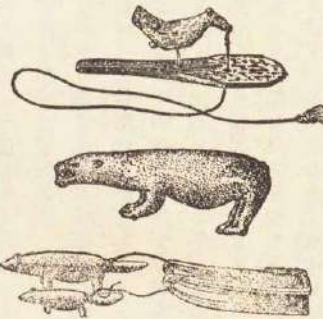
モーの人達は、海豹の肉の他に、白熊だの、狐だの、狼だの、海象の肉だのを食べるのださうです。海象といふのは、挿畫の通り、ちよつと海豹に似た獣です。顎のところに、ちよつとお鬚のやうな長い／＼の牙があります。海象は、この牙を使つて、高い氷山の上でもらく／＼と上る事が出来るさうです。牙は人間の腕くらゐあつて、高い價で賣れると云ふ事です。

御飯のあとで、私はお父さんと一緒に、家の外へ出ました。ところが驚ろいた事には、まだ午後の二時だといふのに、もう日が暮れてゐるのです。お父さんの話によると、エスキモーの冬は大へん日が短かくて、朝は十時頃にならね

トイボのワカイ



ば明るくならず、晩はもう二時頃には暮れてしまふといふことでした。そればかりではなく、冬の最中になると、もう全く日が上らずに数週間のあひだ、夜ばかり續くといふことです。私はなんて嫌な土地だらうと思ひましたところ、その反對に夏になると、だん／＼日が永くなつて、眞夏の頃には、夜がまづたく無くなつてしまふのです。暖かい太陽が、夜も晝もさんさんと輝やいて、いままで眠つてゐた草木は、一せいに



おもちゃのいろ／＼

芽をだします。河の水は音高く割れて、ゆるやかに海へ向つて流れます。その頃になると、河の堤や野原には、野ばらだの、たんぼ／＼の、すみれだの、さんぽうげなどが一度に咲き亂れて、その

暗くし、まづエスキモー人にとつて、この時ほど楽しい時はないでせう。

さて、家へ歸ると、イカワとトウキイが待ちかまへてゐて、

『私の玩具を見て下さい』と云ひます。エスキモーの子供達は字をかく事も讀むことも出来ません。お父さんやお母さんの真似をして、狩をしたり、着物を縫つたりすることがたゞ一つの勉強なのです。また合間々々に、海象の牙や、獸の骨で、いろ／＼な玩具を作ります。圖をぞらんないなど上手に作るではありませんか。右にあるのは、トウキイの大事なお人形です。身體は、海象の骨でつくり、それに毛皮の着物を



着せ、狐の皮の靴をはいて、とても可愛らしいです。トウキイは、夜ねる時も、遊びに行く時も、一度だつてこのお人形を離れたことはありません。

男の子は又、圃にあるやうな小さなボートを作つて、荒海の中へどしどしと漕いで行きます。このボートは、ひっくりかへらうが、逆立ちをしようが、決して水の這入らぬやうに出来てゐます。イカワの得意さうな顔を見てやつて下さい。

イカワは又、冬になると「鹿狩り」といふ遊びをやります。これは、挿畫で御覧の通り、坂のところへ鹿の角を澤山刺しておきます。そして、自分は坂の上から櫓に乗つて滑りながら、弓に矢をつがへてこの角を射つのです。坂の下へゆくまでに、たくさん射つた者が勝ちになるのです。



熊様化 すまうで圓い高たは皮が毛

かうしてエスキモーの子供達は永い冬の間を愉快に暮します。エスキモーに生れて、雪を厭がつてゐては、一日だつて暮せません。子供達は、文字一つ讀む事は出来ません。併し槍を投げて、白熊や海豹を捕ることが出来ます。これさへ出来れば充分なのです。さう



海象（ひげのやうな牙）

して、毎日を喜んで楽しく暮してゐるのです。

あなた方がエスキモーへお出になつて、第一番に驚かれることはエスキモー人が如何にも愉快さうにしてゐる事でありです。何時でもニコニコして、大聲をだして笑ふところなどは、どんな人でも愉快にせずには置かないでせう。

エスキモーの人々は、暑い國の人々と違つて、怠けて暮すことは出来ません。寒さと餓とたゝかつて生きてゆくには、死物狂ひになつて働かねばなりません。さうした暮しをしてゐながら、なほ明るい心をなくさずに、毎日を楽しく喜こんで暮してゐるのです。



面白い鹿狩りあそび

エスキモー人はなんと幸せでは

ありませんか。

次は獅子のすむ
アフリカのお話

お芋ころく

佐藤金太郎

水島 爾保布 監



ある村の村長さんが、新しく家を建てました。そこでお祝ひに、村中の人達を呼んで、御馳走することになりました。それを聞いた村の人達は、みんな困つてしまいました。なぜといつて、これまで一度だつてよその家にお招れしたことがないので、なんといつてあいさつしたらいいのかわからなかつたからです。『あい奈兵衛さん、こまつたことが出来たね。俺はお招れなんて、恥かしくてたまらないや。』

『まつたくだよ。俺は袴のはき方も知らないんだからね。』
『こまつたね。』『こまつたよ。』
みんな困つてしまひました。すると、その中の一人が、

『あーさうだ、いゝ事がある。お醫者の竹庵さんのところへ行つて、どうしたらいいか聞いてこようぢやないか。竹庵さんは村一番の物知りださうだから、なんでも教へてくれるよ。』と云ひました。

『さうだ、。それがいい、。』

そこで多勢打ち揃つて、竹庵さんの所へゆきました。そして、村長さんの家へ行つたら、なんといつてあいさつしたらいいだらうと訊ねました。竹庵さんは、もつたいぶつて顎のあたりをなでながら、

『さようさ、すべて禮儀作法といふものはなか／＼六ヶしいものぢや。お前さん達は、なんでも私のする通り眞似をしたらよからう。さうすれば大して間違ひもなからうからな。』

それを聞いて村の人達は大喜びでした。『どうか何分おねがひいたします……。』といつて、歸つてゆきました。

お祝ひの當日になりました。

村の人達は、古ぼけた羽織を着たり、袴をはいたりして、竹庵さんの後について、ぞろ／＼と村長さんの家へやつて参りました。

竹庵さんは大得意でした。まづ、玄關に立つて、あいさつをしました。

『え、この度はお家落成につきまして、早速一同をお招き下さいまして、有難き幸せにごさります。』すると、村の人達はこゝどとばかり、

『え、この度はお家落成につきまして……。』

『まゝこの度は……。』

と、口々に大きな聲ではじめだしました。その喧ましいこと！ 耳が聾になりさうです。竹庵さんは驚いて、みんなを止めようと思つて、

『エヘン』と咳拂ひしました。すると、みんなも、その眞似をして、

『エヘン』『エヘン』『エッヘン』

と、はじめだしました。

村長さんは驚ろいて、一體どうしたんだらうと、不思議さうに一同の顔を見てゐました。

やがて、奥へ通されて、御馳走が運ばれました。



二六
村の人達は、みんな眼をみはつて、竹庵さんの様子を見てをります。そして、竹庵さんがお箸を取れば自分達もお箸を取り、チュウと音をさせてお汁を吸へば、自分達も、チュウ、チュウ、と音をたて、お汁を吸ひました。

竹庵さんは、これは大へんな事になった、村長さんに叱られなければいゝがと思つてゐると、突然、つまみあげたお芋が箸からすべつて、ころ／＼と轉げだしました。それを見た村の人達は、「おや／＼、竹庵さんがお芋をころがしたぞ。あれも禮儀だと見える……」と思つて、めい／＼、ころ／＼、ころ／＼ととお芋を轉がしました。お蔭で、座敷中芋だらけになつてしまひました。

竹庵さんは眞顔になつて、そつと村長さんの方を見ると、村長さんは怒つたやうな、驚ろいたやうな、へんな顔をして、おい／＼と此方を見つめてゐます。竹庵さんは、こんな所に何時までもゐては、どんな

と云つて、立上りました。するとその時、竹庵さんの帯が解けて、だらりとぶら下りました。併し竹庵さんは、それには氣がつかないで、どん／＼玄關の方へ歩いてゆきました。

村の人達は、まだ御馳走を半分しか食べないのに、歸るのは嫌だなアと思ひましたが、なにしろ、村一番の物知りが歸つてゆくのですから、仕方ありません。いや／＼ながら箸を置いて、

「えい、どうも御馳走様でした。」

「えい、どうも御馳走様でした。」

と云つて立上りました。

見ると、竹庵さんは、帯の端をだらりとぶら下げてゐます。村の人達は、

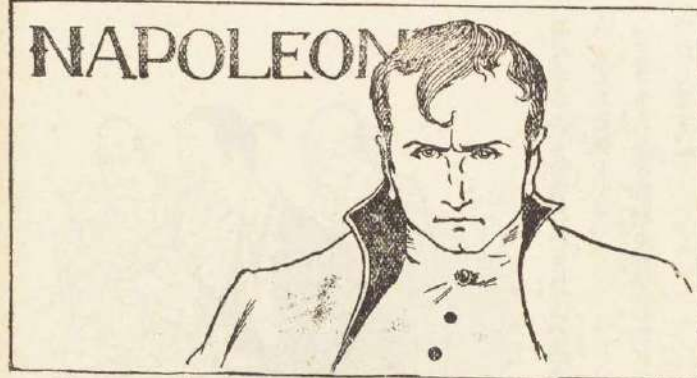
「はい、あ、歸るときは、あゝやらなけりや不可ないんだな。」

と思つて、みんな帯を解いてぶら下げながら、ぞろ／＼と歸つてゆきました。(をばり)

事になるかも知れないと思つたので、いきなりピョコンとお辭儀をして、

「どうも大へん御馳走様でした。けふはこれで失禮さしたしです。」





ナポレオン 奇譚 秘密の路

小島政二郎

岡本歸一 畫

二八

諸君、僕はこれから愉快な冒険談を語らうと思ふのだが、——さう話さうとすると、何から話していいか分らない。

さうだ、まあ、僕の名前から名告らう。僕はフランス生まれで、ルイ・ド・ラヴァルと云ふ者だ。いゝですか諸君、このルイ・ド・ラヴァルの『ド』に氣を付けてくれ給へ。佛蘭西で『ド』と云ふ字の附く名は、貴族出なのだ。僕も今でこそ英吉利へ逃げて來てゐるが、これでも國へ歸れば貴族なのだ。

ぢやア、なぜ貴族の息子が英吉利なんかへ逃げて來てゐるかと云ふのに、それにはかう云ふ理由があるのだ。今、佛蘭西は、ナポレオンが王様だ。ところで、ナポレオンの前は、ブルボン家の方々が代々王様だった。僕の父は、このブルボン家の王様に仕へた貴族だ。そこで、ナ



ポレオンが代つて天下を取つた時、それに反抗して服従しなかつた。そのために、國にゐることが出来なくなつて、命から／＼ドヴァー海峡を越えて、英吉利へ落ち伸びた。その時、僕はまだ小さな子供だった。その後、父も母も異境で死んでしまつて、あとには僕一人残された。

——と云ふ譯で、かうして僕は英吉利にゐるのだ。

ところが、つい最近、佛蘭西にゐる叔父から手紙が來た。叔父と云ふのは、ベルナックと云つて、僕の母の弟なのだ。——いや、叔父の説明をするより、叔父の手紙を見せた方が、話が早く分るだらう。

我が親愛なる甥のルイよ。君の両親が死んでしまつた今、君は世界にたつた一人ぼつちだ。君も知つてゐる通りお父さんと私とは仲が悪かつた。と云ふよりも、敵同志だった。お父さんは王様の味方、僕はナポレオン黨……。ところで、お父さんが英吉利へ行かれてしまつた後、お父さんの領地だったグロボワの城と土地とを、私がナポレオン陛下に戴いたことは既に御承知のことと思ふ。祖先のものを君が貰へなかつたことは、定めし残念のことと思ふが、しかし、それで知らない他人の手に移るよりは、まだ叔父の領地となつた方が幾らかでも心持がいいだらう。君はお父さんのやうに私に敵意を持つてはゐないことと思ふが、私は、君のお母さんの弟として、い



つも君に對して同情を失つたことはない。

ところで、私は今君に向つて一言注意したいことがある。と云ふのは、知つての通り、私はナポレオンに仕へて實によく忠實に働いた。蔭には、非常な信任を受けてゐる。で、私の願ふことは大抵聽許される。陛下は今、このグロボワ城から程近いブーロンヌに駐屯してゐる。今若し君が海をわたつて歸つて來るならば、陛下は私の忠勤に愛で、お父さんのことを忘れてくれることゝ信じる。君の名は依然として追放者名簿に載つてはゐるが、私が口を利きさへすれば、萬事うまく運ぶことゝ思ふ。——だから、私を頼つて來るがいい。來るならすぐ來給へ、迷はずに、私を信じて來るがいい。叔父の手紙はこれで終はつてゐるのだが、こゝに不思議なのは、封筒の隅に、英語で、

『來るな』と書いてあることだ。——さあ、迷はざるを得ない。

若しかすると、この手紙を書いた後、急に何か差支が生じたのかも知れない。——いや、そんな筈はない。若しさうならば、叔父は全然この手紙を投函しない筈だ。——さうとすると、誰か——叔父の外の誰か、叔父の申し出に應じるなど、と知らしてくれたのかも知れない。しかし、この手紙は、中は佛蘭西語で、『來るな』だけが英語で書かれて



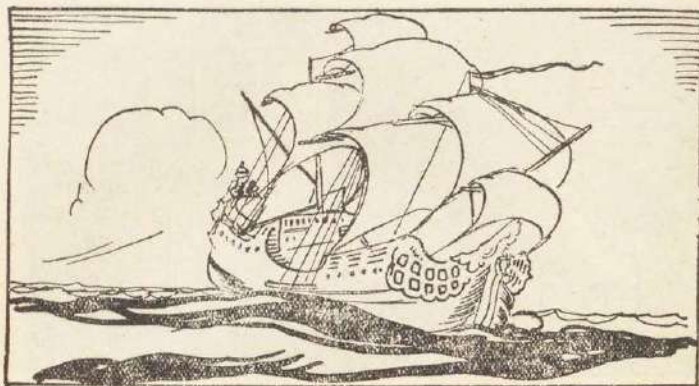
ゐる。して見ると、この手紙が英吉利へ來てから、書かれたものだらうか。いや、そんな筈はない。封じ目には、赤い封蠟が二ヶ所も附けられてゐる。しかも、その封蠟は剝がされた跡もない。だから、手紙の中味は誰にも讀まれてゐない譯だ。中味も知らずに、誰が『來るな』と書けるだらう。

ところで、叔父だ。叔父は、前にもちよつと云つたやうに、僕の父が榮えてゐた時には、奴隷のやうに陥つてゐた。が、一たん父が落ち目になると、今度は蛇のやうな陰險な手段を弄して父を苦しめた。で、父はしじゅう叔父に對して怒つてゐた。實際、我々が佛蘭西の國にゐられなくなつたのも、素はと云へば、叔父のせいなのだ。

かう云つたら、諸君はさつと、なぜお前はそんな人物の招きに應じようとするのかと詰問されるに違ひない。が、まあ察してくれ給へ。僕にすれば、いつまでも知らない他國に放浪してゐるのが厭になつたのだ。何と云つても、自分の國は懐しい。歸れるものなら歸りたい。第一、佛蘭西は、もう既に父を苦しめてそこに住むことが出来ないやうにした血腥い國ではない。英雄ナポレオンが現れてからと云ふものは、四方に敵を受けて四方を平げ、今や全歐羅巴を征服しようとしてゐる最大の強國である。國民としてこんな嬉しいことはない。その母とも云ふべき祖



三二
國が今僕を招いてゐるのだ。僕にすれば、叔父の招きなんかどうでもいいのだ。『小鳥でさへも巢は戀しい。』まして人間、生まれ故郷へ歸れると云ふことは、永い間別れてゐた母の胸へ再び抱かれに歸る思ひである。その上、僕、叔父の勧めに従つて國へ歸りたいと思つたについては、もう一つかう云ふ理由もある。それは、無禮な一英人と決闘をして、ピストルで相手の肩を打ち抜いた事件である。其奴はファレーと云ふ青年だが、或日カッフェで逢つた時、さん／＼佛蘭西の惡口を云ふのだつた。僕はムカ／＼して堪らなかつたが、まあ／＼我慢してゐた。すると『どうだい、ラヴァル君、僕の祝盃を受けないか。』と云つて、葡萄酒の杯をさすではないか。で、『何の祝盃だい。』と聞くと、『やがて佛蘭西を叩き潰すネルソン將軍の腕前に對する祝盃だ。』『よし、飲まう。その代り、僕のための祝盃も飲むか。』『いいとも。』
そこで、僕は杯を上げた。
『さあ、君の祝盃を飲まう。』とファレーが云つた。
『よし、ちや葡萄酒をつけ。』
『つぐぞ、——そら一杯だ。』
『よし、ちや此間の海戦に、佛蘭西の弾に當つて落したネルソンの片腕



二
に對して謹んで祝盃を上げる。』
僕が、かう云ひ終はるか終はらぬうちに、葡萄酒が僕の顔に浴せ掛けられた。——一時間のうちに、決闘の場所が定められた。僕は一發で、ファレーの肩を射抜いてしまつた。
そんなことから、僕は英吉利に住みにく／＼なつて來てゐた。——そんなこんなで、僕は封筒の端に書かれてゐた『來るな』の一句が氣に掛りながらも、歸國して見ようと決心した次第である。若し本當に叔父の盡力次第で、僕の名が追放者名簿から削られるものなら、何を好んで外國に留まつてゐる必要があらう……。
そこで、或暗い晩、僕は密輸入船に乗せて貰つて故國へ向つた。ところが、船長が何を間違へたのか、僕を探偵と思ひ誤つて、目的地まで連れて行つてくれず、途中で——つまり海の真中で、解に移し乗せられて寂しい海岸へ卸された。
『こゝはどこだ?』と聞くと、解を漕いでゐる水夫の一人が、
『さあ、何と云ふところですか。——あの北の方に燈臺が光つてゐるでせう。あれがブロンニユの燈臺だと云ふことだけは知つてゐますが。』
『すると——』と、僕は南の方を指さしながら、



『あれはエタブルの燈臺だね。』

『さうです。』

さう云はれて初めて、僕は今自分自身がどこに立つてゐるかを知つた。この海岸から十哩と離れぬところに、わが祖先の領地グロボワ城が聳えてゐるのだつた。さう思ふと、僕の心は勇み立つた。が、すぐ、『しかし。』と思ひ返した。叔父の云ふ通り、果して自分の入國が許されてゐるかどうかを知らずに、叔父の許へ頼つて行くのは危険だ。二三日様子を探つた上のことにしよう。——さう思つた僕は、どこか漁師か百姓の家へ泊めて貰はうと思つて、あてどもなく眞暗な海岸を歩き出した。が、生憎なことに、どこにも家らしいものも見當らない。そのうちに僕は疲れて來、ひもじくなつて來た。と、幸ひなことに、遠くに一點の黃い燈火を見付けた。近附いて見ると、一軒のあんぼろ小屋であつて、いつも手入れをしたことがないと見えて、至るところ透き間だらけで、あかりがチラ／＼方々から洩れて見えるのだつた。——僕は足を爪立てると、こつそり小窓に近附いて中を覗いて見た。

僕は息を呑んで、猶もぢつと覗いてゐた。すると、彼は手にしてゐた本をテーブルの上に置くと、窓の方へ歩いて來た。さうして闇の中に僕の姿を認めると、何か云つて手眞似で歓迎の意を示した。

と、矢庭に月がさつと開かれた。見ると、入口の上に、瘦せた背の高い姿が現れた。上着の裾が、風にヒラ／＼と翻つてゐる。

『あゝ君達。僕はもう諦めてゐた。君達は來ないものと思つてゐた。僕はもう二時間ぐらゐ待つたよ。』と彼は云つた。潮風と吹きつける砂とを避けるために、目の上へ手を翳しながら闇の中を覗くやうにして。

僕は答へようとして、彼の面前へ一歩踏み出した。すると、室内から流れ出る光線が、僕の顔を照らし出した。

『あ、お人達ぢや……。』

まだ云ひ終はらないうちに、彼はいきなり氣違ひ猫のやうに、兩手で僕を突き飛ばした。と思ふ間もなく、小屋の中へ飛び返つたと思ふと、ビシヤリと扉を叩き附けた。

僕は唯呆氣にとられて、そのあとを見送つた。何と云ふ素早さ、何と云ふわる狡さだらう。詩人のやうな或は畫家のやうな優しい風采と、何と云ふ似ても似つかぬ態度だらう。——僕はそのまゝ、扉の前に立つてゐたが、間もなく一層驚くべき事實を目撃した。

(つづく)





正太の幽霊

樺山千代

平澤文吉畫

正太

「幽霊なんてあつてたまるものか、斷じてないよ、あつたら俺がその正體をあげてみせらア！」
河原の大坊主の正體が、影ん坊師だといふことをたしかめた貞吉は、かう云つて友達の前で威張りました。

すると、正太が云ひました。

『ところがさうも云へないぜ、うちのお母さんも見

たことがあるといふからね。お母さんが夜中に便所へ行つてね、何気なく窓から外を見たんだつて。そしたらね、庭の植込の中に、真白な着物を着て、髪をばら／＼にして叔母さんが立つてたんだつて……叔母さんは、づつと遠方の國に居たんだし、その時病氣で寝てたんだから来る筈はなしさ、お母さんは腰をぬかしてしまつたんだつて。後できいたら、恰度、その時、叔母さんが死んだつて話だよ』

今度は四郎が話し出しました。

『さうだらう。たしかにさういふ事はあるよ。内のお母さんも見たつて云ふよ。それは俺の見さんの幽霊だがね。夜中に「お母さん、お母さん！」つて呼ぶんだつて、ハツとして目をさまして見ると、枕許に、兄さんが薄ぼんやりと立つてゐるんだつて。「健助！」つて、お母さんが呼んだ時には、もうその姿は見えないんだつて。その時、兄さんは旅に出てたんだがね。それつきり歸つて来ないから、何處かで死んだに違ひないよ。それから、またかういふ話も知つてゐるよ。うちのお祖母さんがねてるとね、誰かが、蒲團の上にのつかつて、ギュー／＼ギュー／＼あさへつけるんだつて、苦しくつて、苦しくつて、死にさうになつて目をさしたらね、誰アれもゐやしないんだつて……。だけど、後できいたら、恰度その時刻にお祖母さんの妹が死んだつていふから、やつぱり知らせに來たに違ひないよ』

「そんな話なら俺も知つてゐるよ」

「俺も……」

さう云つて次から次へと、幽霊話が花をさかせました。一通りみんなが話し終へた時でした。

「あい貞吉！ これでも幽霊がないといふのか？」
さう云つて四郎が貞吉の顔を見ました。貞吉は、みんなの話をきくと實のところ幽霊といふものがありさうな氣もしましたが、もと／＼負けず嫌ですから、

「うん、ないとも……斷じてないと思ふね。そんなのは、みんな心の迷ひだと思ふよ」

と云つてしまひました。

「強情な奴だな、俺が死んだら、きつと幽霊になつて、貞吉のところへ化けて出てやるがなア！」さう云つたのは叔母さんの幽霊の話をした正太でありました。

「見せてもらひたいものだね、俺ア、どんなに皆が



云つたつて、本物を見ないうちは、決して信じやしないよ」

「ふん、本物を見たら氣絶してしまふだらう」

「ばか云へ！ そんな腰抜けとはちがふぞ！」

「ふん、大きな口をきいておくがよい。君んこの便所の天井から、ぶらアーンと生首の幽霊がぶら下つてたらどうする。アツと云つて腰を抜かしてしまふだらう！」

藤一が云ひました。云つてしまつて、自分でもゾツとしたやうに首をすくめました。みんなも思はず顔をみあはせました。

「面白いね、そんな幽霊があつたら生きてるうちにいっぺんくらゐ拜みたいものだね」

貞吉は一向平氣です。みんなは口惜しくてなりません。中でも、正太は一番口惜しがりました。どうかして、貞吉をこわがらしてやりたいと思ひました。「ほんとに俺が死んだら、貞吉に化けてやるんだが

なア！ 便所の外の植込みのところには、眞白な着物を着て、からいふ風に手首をだらりと垂らしてさ、ドローンと……」

さう云つて正太は幽霊の身まねをして、

「どうだい、こわくはないか？」

「さつぱりこわくないね、化けるなら一つ化けてみてもらひたいものだね」

と、貞吉が云ひました。

「化けるとも！ だが、死ぬのは一寸いやだな」さう云つて正太はベロリと舌を出してみせました。

「ワッハ、ハ、ハ、」

みんなは思はず笑ひ出しました。お化け話で少々薄氣味が惡くなつてゐた子供達は、この笑ひ聲で少し元氣付きました。

二

こんな話をして間もなくのことでありました。死んだら幽霊になると云つた正太が、本當に死にさう

な病氣になつてしまひました。「こわいぜ、こわいぜ、今にドロ／＼つてな、正太の幽霊が……」三次が手首を曲げて幽霊の眞似をしてみせました。流石の貞吉も水を溶ひせられたやうにゾツとしました。或る日貞吉は、あまり氣になるので、思ひ切つて正太の家に様子を見に行きました。ところが、正太の顔は物凄く青ざめて、頬の肉は落ち、目玉ばかりギョロ／＼とび出して、まるで生きながらの幽霊のやうでありました。

「貞吉、俺は死ぬかも知れないぜ。かうして考へてると、死んで幽霊になつて、チョク／＼娑婆を見に来るのも面白いやうな氣がする」

正太は眞白な齒を出してニツと笑ひました。貞吉は寒氣がするほどおそろしくなつて、飛ぶやうにして逃げ歸りました。

それからといふもの貞吉は、毎晩々々正太の夢を見てうなされました。

「全くじやうだんぢやないぜ貞吉、正太は死んで貴様のところへ化けて出るつもりなんだぜ」

或る日意地悪の敬一が云ひました。「事によると今晚あたり幽霊の正態が拜めるかもしれないぜ！もしたら貴様も本望だらう」

「本望だとも……」

負けず嫌ひな貞吉は、口にはさう答へましたが、心の中はそれどころではありません。

三

「ひよつとしたら正太は今晚死ぬぢやないかしらん、あゝ神様、正太を助けて下さい」

その晩貞吉は、床にはいると思はずさう云つて祈りました。拂つても拂つても、あのおそろしい正太の顔が闇に見えて來ます。ガタ／＼と雨戸がゆれて冷たい風がスーッと鼻の先をかすめます。貞吉は、今にも氷のやうな幽霊の手が、自分の頬をな——さうな心持がして、どうしても、眠る事が出來ませんで

した。

「馬鹿ッ！俺は武士の子ぢやないか？しかも餓鬼大將として尊敬されてゐる身だ。幽霊が怖くてどうする？正太よ、出るなら出て來い、ひつかまへて顔を見てやらう」

貞吉は度胸をきめて目をつぶりました。

それから幾時間たつたか、貞吉は急に胸のあたりが苦しくなつて來ました。と思ふ間もなく、闇の中から青ざめた紐のやうに細い二本の手があらはれて貞吉の首にからまりました。「あッ！」さう思ふ間もなく、手には次第に力がこもつて、ギュ／＼と締めはじめました。貞吉の首は見る／＼くびれて來ました。

「苦ッ、苦ッ苦しい！た、助けて！」

貞吉は心に叫びましたが、聲がでません。たゞ、うん／＼と唸るばかりでありました。

「もう駄目だ！しつ死ぬ、死ぬ……」

さう思つた時でした。貞吉はハッとして目をさました。

「あゝ、夢だったのか」

ました。本物があるなら見たいものだと思ひました。もう、さつきのやうに少しも怖くはありませんでした。貞吉は起き上つて、長い廊下を傳つて便所へ行



貞吉はホッとしました。氣がつくと、貞吉は両方の手をしっかりと胸の上のせて眠つてゐたのでした。

「幽霊つてこんなものに違ひない」貞吉はさう思ひ

きました。

便所の中で、生首の話を思ひ出してゾツとしまたけれど、我慢して天井を見上げました。何一つ怪しげなものもありません。次に窓から外の植込の方

を見ました。と、あゝ！どうでせう？ 正太が、青々とした月下に、手首をだらりと下げて、真白な着物をしてズロロンと立つてゐるではありませんか！
「あゝ……」貞吉は思はず叫びました。全身がワナワナと震えて、齒がガタ／＼となり始めました。

「しよッ！ しよッ！ 正太ぢやないかッ！」

貞吉は叫びました。正太の幽霊はかすかに顔をあげて合點々々をしたやうでした。

「しよッ！ 正太！ あ、あ、お前、死、死んだのか？ ば、化けたな！」さう云ふと、正太の幽霊は、

またかすかに合點をしました。貞吉は正太の幽霊がおとなしいので次第に勇氣が出て來ました。

「よ、よく化けた。や、やつと俺は幽霊のあるといふ事がわかつた。あ、お前の顔の見あさめだ、こ、こへ來てよく顔をみせてくれ！」

けれども、正太の幽霊は動いて來ようとはしませんでした。ふら／＼と體をゆすつて、手をふるはしました。

「歩けないのか？ ようし、それなら俺が行く、消えないで待つてくれ！」

貞吉はさう云ふと、度胸をすゑて便所を出ると、兩戸をこじあげました。と、どうでせう？ 正太の姿はもう何處にもゐないぢやありませんか？

「正、正太！」思はず叫んで見まはした時でした。

正太の幽霊は庭を横切つて裏口の方へスタ／＼と逃げて行くところでした。

「正太待て！」

貞吉ははだしてとび出すと幽霊の後を追かけました。一方が逃げれば逃げるほど貞吉の勇氣は加はつて行きました。貞吉はどうしても追付いて幽霊の正態をみきはめたいと思ひました。

五六丁行つた時でした。貞吉はやつと幽霊に追付きました。

「こら待て幽霊！」

貞吉が幽霊の襟髪をとつて引き据ゑた時でした。

「た、たすけてくれ！ あ、俺だ！」

幽霊が叫びました。

「何ッ！」顔を引きあげてみると、それは、今日貞吉に意地惡を云つた敬一なのでした。

「うぬ！ 敬一だな？ 畜生！」

貞吉は力、杯ボカ／＼と敬一をなぐりつけました。

「た、助けてくれ！ おーい！ 三次、藤一、健助！」

敬一が叫ぶと、木の影や、叢の中から五六人の子供がとび出して來て蜂の集をついたやうに、バラ／＼と逃げて行つてしまひました。それからといふ

もの、貞吉といふと誰一人怖れぬ者がなくなりました。その後問もなく正太も病氣がなほつて寺小屋へ通ふやうになりました。

「あゝ幽霊が見たい、本物の幽霊が見たい！」

それ以來、貞吉は一層幽霊ずきになりました。大にはい／＼貞吉が、臺灣坊主の幽霊を見るお話をいたさせう。



とうとの鳥と (推薦)

東京一の瀬ゆきみつ

ななくさ、なづなと

とうとの鳥は

正月つれて

とうとの鳥。



海山越えた

ななくさ、なづなと

ななつの鳥は

門松しよつて

峯山越えた

ななくさ、なづなの

御飯をたべて

正月ゆくよ

とうとの鳥と

夜の笛 (推薦)

大阪宏

文

とぶとりは

芒の穂のよな

ほそい聲

いちご畑 (推薦)

東京西元

篤

赤い苺の

なくなつた

いちご畑は

淋しいな

いくら分けても

探しても

風に葉つばが

芒のかげに

出た月は

芒のまねした

やせた月

芒の上を



なるばかり
赤い^{あか}苺^{いちご}の
なくなつた
いちご^{いちご}畑^{はたけ}は
さびしいな



みかん切り。

霜^{しも}の寒^{さむ}い
月の晩^{ばん}
塀^{へい}の節^{ふし}穴^{あな}
のぞく奴^{やつ}ア
そこらあたりの
いたちの子^こ
寝^ねぬ子^こはないか
床^{とこ}お借^かせ
泣^なく子^こはないか
乳^ちおくれ

いたちの子^こ (推薦)

東京 鈴木敏夫



みかん切り (推薦)

静岡 小堀義夫

密柑^{みつだん}お山の
密柑^{みつだん}切り

空^{そら}は青^{あお}空^{そら}
チヨツキンな
だんだら畑^{はたけ}は
密柑^{みつだん}畑^{はたけ}
父^{ちち}さん母^{はは}さん
チヨツキンな
秋^{あき}の陽^ひしづかな
密柑^{みつだん}山^{やま}
あつちもこつちも
チヨツキンな



舜天丸王子

三島 霜川

寺内萬治郎 書

一、玻璃鏡の幻術

一國の護りの珠二ツ——それは、琉球代々の王が位に即く毎に、王から王へと譲られる神聖な「珠」でした。つまり、この珠を受けつげば、國王の位に即けることになつてゐました。

國王には、この珠を譲るべき、男のお子さんがありませんでした。で、後の中婦君が、その一ツの珠を

お預りしてゐました。また、もう一ツの珠は、國王の、たゞ一人のお姫様、寧王女がお預りしてゐました。お姫様と云つても、寧王女は、もう三十を二ツ三ツ越した年頃。でゐて、月の御殿からでもお下りになつたかと思はれるやうな、氣高く、美しい方でした。このお姫様は、中婦君には、まゝ子でした。かつて——それは、今から十何年前のことでしたが、お姫様の、預りしてゐる珠が、どこへか、紛失

したことがありました。寧王女は、國王の宮殿から逐出されました。そして、「さう／＼山」の麓に隠れて、珠の在所を探してゐました。

そこへ、爲朝が、やつて來ました。不思議なことに、寧王女のところへ、爲朝の探してゐる「金札の鶴」がゐました。爲朝はまた、「さう／＼山」で、毒蛇を退治して、その頭から獲つた珠を持つてゐました。それが、寧王女の探してゐる珠でした。そこで二人は、それを交換しました。そして、爲朝は、日本に歸り、寧王女は、珠を捧げて、國王の宮殿に歸りました。

その二ツの珠が、今、國王と曠雲との前に、捧げ置かれました。中婦君と寧王女とは、二ツの珠の左右に別れて、坐を取りました。

曠雲は、小さな眼を、ギラ／＼光らせて、まづ、中婦君の方の珠を、じつと、見据えました——氣味の悪い眼……まるで、野獸が、獲物に飛付かうとす

る時のやうに、どんらんでした。その眼が、寧王女の方の珠へ移りました。

曠雲は、「變だナ」と、いふやうな顔をして、しばらく、珠を、見つめてゐました。そして、「これは、偽珠でござる」

とハッキリと云ひました。

「ナニ、偽珠ですと……」

と、國王は、さつと顔色を變えました。寧王女は驚いて、氣絶しさうになりました。

曠雲は、ひや／＼かに笑ひました。「これは、一度紛失した珠です。偽物になつてゐるのに、不思議はありません。これだから、赤潮が流れたり、赤い風が吹いたりするのです。今、この珠が偽物だといふ證據をお目にかけましょう」

と、えらい權まぐで呟鳴りました。そして、珠を引ツ綱むと、いきなり、床を目がけて投げつけました。珠は、紛微塵に碎けて、かけらが、そこらぢふに散

亂しました——國を護る二ツの珠のうちの一ツは、かうして、無難作に碎かれて了ひました。

多勢居列んだ「廷臣」たちは、度膽を抜かれて、眞ッ青になりました。寧王女は、氣絶して、倒れました。そして、國王は、カン／＼に憤って、狂人のやうになりました。

「王女め、偽珠を以て、われを欺き、國を欺く。その罪は、宥されんぞ。縛上げて、斬つて了へ」

と、國王は、自分の子と云ふことを忘れて、無慈悲に嗷鳴りました。中婦君は、「それが、當前だ」と、いふやうな顔をして、傍を向いてゐました。

利勇は、宮殿第一のはゞのさく臣で、しかも、中婦君のお氣に入りでした。その利勇が、列をはなれてツカ／＼と、寧王女の方へ進みました。そして、倒れてゐる寧王女を抱上げ、息を吹返させて、ざん酷に、臣の座の方へ引きずつて來ました。

すると、その時、そこへ、思ひがけなく、毛鼎國が

現はれて來ました。

「お世つぎの王女に對して、無禮をするなッ」

と、毛鼎國は、利勇を突きのけました。まだ、「打撲傷」の痛みが残り、顔も青ざめてゐましたが、毎日、舜天丸が飲ませてくれる粟粒ほどの「丹」の藥で、元氣は、殆ど回復してゐました。

「無禮とは、何が無禮だ。國王殿下の御命令ですぞ」と、云つて、利勇は、「邪魔ッけな奴が來た」と、云ふやうに、毛鼎國を睨みつけて、うんと一ツ、突返しました。が、毛鼎國は「唐手」と、云つて、恰ど日本の「柔道」のやうな武術の達人でした。軽く體をひらいて、利勇の小腕を握まへたかと思ふと、ぐいと引いて、その向脛を蹴りつけました。利勇は、はづみを喰つて、でんぐり返しを打つて、バタリと倒れました。利勇の虎鬚の顔が、クシャ／＼に顰むで、「ウ、ウン……」と、呻きました。で、しばらく起上がることも出來ませんでした。

國王は、憤って、眼を剝き出しました。「毛鼎國、き貴様、何をするッ?……亂暴すると、宥さんぞ」

「いえ、亂暴は致しません。たゞ、お世嗣の王女に對して、無禮を加へた奴を、懲しめたまでです」

と、毛鼎國は、苦い顔をして、憚からず云ひました。「王女は、偽珠を以て、われを欺かうとした。もう世嗣ではないぞ」

と、國王は、眞ッ赤になつて嗷鳴りました。

「偽珠?……それが、どうしてお解りになりましたか」

「こゝにゐる矇雲國師が、さう云はれた」

「ア、その魔法使の坊主……」

と、毛鼎國は、きつと、矇雲を睨みつけました。矇雲も、氣味の悪い、ギラ／＼する眼で、毛鼎國を睨みかへしました。

「こんな坊主の云ふことが、どうして、的になりましょう」と、云ひつゝけて、毛鼎國は、まともに、

矇雲に向ひました。「わしは、お前が、御珠の神聖を冒して、檢べるといふ知らせがあつたから、お前の化の皮を剥いで遣らうと思つて、宙を飛んで駆けつけたのだ。一ツたい、王女がおあづかりになつてゐた御珠が偽だといふことが、どうして解つた? その證據があるか」

矇雲は、冷に、ニヤリと笑ひました。「わしの此の眼が、さう見たのだ。これほど、間違のないことはない」

「黙れ、御珠を、どこへ遣つた。それを云へ」

「わしは、知らん」

「知らん者が、何故、この偽珠を碎いて了つた。御珠は、幻術で、貴様が盗むだに違ひない。國賊め」と、罵りながら、毛鼎國は、躍りかゝつて、矇雲を取つて押へようとした。

「待て／＼。國賊とは、貴様のことだぞ。今、その證據を見せて遣る」



と、云ひながら、囃雲は、手を一ツ振って、その人差指を、毛鼎國の鼻先へ、ス——と突出しました。それが、何んとも云へぬ、無氣味な手つきでした。毛鼎國は、ハツとしながらも、すばやく、その手を拂ひのけようしました。が、その時もう、毛鼎國の手足が、丸太ン棒のやうに感覺を失って、ビクとも動かなくなつて了ひました。『貴様は、日本から渡つて來た、舜天丸といふ若者を、館にかくまつてゐるぞ。あいつは、この國を盗みに來たのだぞ。見ろく、よく眼をあいて、この玻璃鏡のなかを見ろ』さう云つて、囃雲は、枯木のやうな腕を伸ばして、國王の座の後ろの幔を、さつと引きました。そこに人の「全身」が映るほどの、大きな隋圓形の玻璃鏡がありました——國王が自慢の「唐土今の支那」から渡つた、古い、玻璃鏡でしたが……五體が、木偶の坊のやうになつてゐても、毛鼎國の

「氣」はハッキリしてゐました。耳も聞えず、眼も見えます。でゐて、どうすることも出来ないのです。口もきかれません。

「やられた！」

と、思ひながらも、毛鼎國は、一心、こめて、囃雲の幻術を打破つて、その毒々しい、ざん言を云伏せよ、と努力しました。

すると、不思議ではありませんか。玻璃鏡のなかにあるく、と、毛鼎國の館の庭の一部が見えて來ました。そして、そこには、今、舜天丸が、毛鼎國の二人の子供、鶴と龜とを相手に「唐手」の稽古をしてゐました。

「あッ！」

と、毛鼎國は、呆れました。國王も、中婦君も、不思議さうに玻璃鏡のなかを見つめました。利勇も、コノ、起上がつて來ました。居列んだ「廷臣」たちも、皆な、アングリ口をあいて、魂消てゐました。

「唐手」は、空手で戦ふ武術でした。鶴と龜とは、拳と足との早業で、舜天丸を攻撃してゐました。舜天丸は、また、日本流の早業で、ヒラリ、ヒラリと身を躍らせながら、兄弟の攻撃を防いでゐました。兄弟の方は「全力」をそいで、ぶつかって行きましたが、舜天丸は、たゞ、軽く、あしらつてゐるだけでした。

「あれが、舜天丸です。あれを御覧なさい、あの魔術のやうな早業を御覧なさい。だから、恐ろしいのです。だから……いや、あんな奴が来たから、この國に、赤い潮が流れたり、赤い風が吹いたりするのです」

と、囃雲は、國王に向つて、ハッキリ、ハッキリ、云ひました。

「嘘、嘘、嘘。悪神は、貴様だ。海の潮の赤くなつたのは、貴様が現はれたからだ」

と、毛鼎國は、さう叫ばうとしました。しかし、蚊

の啼くほどの聲も出ませんでした。

國王は、舜天丸の見馴れない姿と、その不思議な早業とを見て、「あいつが、國を盗みに来たのか」

と、思つて、ひどく怖れました。そして、顔色まで變えて「國賊め。貴様、あんな奴を、かくまつて置いて、むほんをする積か」

と、いよ／＼、凄い、けん幕になりました。

「さうです、こやつは、むほん人です、むほん人です。わたくしも、近頃、毛鼎國の様子が、どうも變

だと思つて居りました」

と、利勇も、傍から、喚き立てました。

「かやうに、確な證據がある……」

と、囃雲は、劔の刃先で、とゞめを刺すやうに、冷に、さう云ひました。

「むほん人、むほん人……」

と、居列ん廷臣たちの口からも、おのづとさういふ呟が出て來ました。

何か云はうとして、云へない苦しみ——毛鼎國の口

は、引きつるやうに歪みました。そして、額と小鼻から、ギラ／＼と、脂汗が滲むで來ました。

その時でした。正氣を失つたやうに泣伏してゐた寧王女は、いきなり、すくと起上がりました。そして、

「毛鼎國は大忠臣です。その囃雲こそ、怪しい曲者です」

と、叫びました。その聲が、りんとして、いつもの優しい寧王女の聲ではありませんでした。

國王も、中婦君も、ハツとしました。囃雲は、やはり、じつとしてゐました。が、その眼は、そつと、

寧王女の様子を見つめました。

寧王女は、不思議なほど、雄々しい様子になりました。そして、しづ／＼と、國王の方へ進みました。

悪神、來れり

海潮、清からず。

悪神、來れり……

と、清しい聲で、高らかに、うたひ出して、寧王女は、きつと、囃雲の顔を見ました。その眼にも頬にも、もう、涙の痕がありませんでした。美しい顔は

凄いほどに、引かしまつてゐました。囃雲は、その寧王女の眼を避けるやうに、少し伏目になりました。同時に、中婦君の眼が、いら／＼して、あやしく光つて來ました。

「ア、王女は、氣が狂つたのです。囃雲國師のお祟があつてはけません。御國のため、毛鼎國と一絡に、斬つて下さい」

と、中婦君は、紅い唇を國王の耳元によせて、囁きました。

國王は、うなづきました。とたんに、寧王女は、琥珀鏡のなかの舜天丸を見て、「あッ」

と、驚いて「ア、あの子！ 舜天丸だ。わたしの子だ、かッた一人のわたしの子だ」

と、まるで、夢でも、見てゐる人のやうに叫出ししました。そして、大怖に悦んで、躍出しさうな勢になりました。

嚙雲は、さつと、幔を引いて、玻璃鏡を隠して丁ひました。國王を始め、そこにゐる人たちは、皆な、呆れて了ひました。所夫のない寧王女に、子のある譯がないのですから……

「いよ、狂人だ」

と、國王は、顔をクシャ／＼にして、歎息するやうに、つぶやきました。そして、思切つて、「利勇、二人ともに斬つて了へ」と、命令しました。

その言葉の訖らぬうちに、利勇は、スラリと、劍を抜きました。

「待て／＼」と、嚙雲は、慌て、手を振つて、止めました。そして、「毛鼎國を、斬れ。王女は斬つてはならん。イヤ、親として、子を斬つては、天の理

にそむく」

「いや、かまはん、斬つて了へ。王女は、御珠を失くした大罪人だ」

と、國王は、やつきとなつて叫びました。

「いえ、斷じて可けません」と、嚙雲も、一生懸命でした。「この宮殿に、女性の血を流しては可けません。もし、この宮殿に、女性の血が流れたら、その時、あなたは、お滅びになつて了ひます」

國王は、深く、その言葉を怖れました。で、「さうですか……」

と、云つて、ぐづつてゐますと、申婦君は、大そう、凄顔をして、何か利勇に、「眼くばせ」をしました。

利勇は、魔術でも、かけられたやうに、ふいと、劍をふるつて、寧王女の首を刎ようとししました。

「あッ」

と、叫んで、寧王女は、片手で肩ささを押へながら

すばやく、飛びさりました。押へた指の間から、血が、タラ／＼流れて來ました。

利勇は、慌て、寧王女の首を刎そこなひました。

しかし、宮殿は女性の血に穢されました。

「大馬鹿め」

と、嚙雲は、呻くやうに呟鳴りました。そして、よろ／＼と、よろけたかと思ふと、血を見ないやうに顔を隠しながら、幔のなかへ逃込みました。

蠻勇の利勇は、それに、頓着しませんでした。あくまでも、寧王女を斬伏せて了はうと、劍を打ち下し、猛烈に、寧王女に迫りました。

「逆賊ッ」

と、いふ聲が、利勇の腦天に響きました。そして、腕を折られるほどに打たれて、ボロリと、劍を取落しました。さうして、また、一度、でんぐり返しを打って、二間ほど先さへ投飛ばされました。投げたのは、毛鼎國でした。(つづく)



雪の夜はなし

霜田史光
岩岡とも枝畫



今年十一になつたみどりは外から泣きながら歸つて來ました。母さんがそれを見つけた時、しくしく泣いてゐるみどりの肩には少しばかり白い雪が降りかゝつてゐました。『みどりさん、どうしたの。おや、雪が肩にかゝつてゐるではありません

か。』と云つて母さんはみどりの肩から雪を拂つてやりながら、『寒くて泣いてゐるの』と訊ねました。が、みどりは首を横に振りました。『では誰かにいちめられたのでせう。』それでもみどりは泣き聲と一緒にシヤツクリ／＼をしながら首を横に振るのです。『ではどうしたの、何が悲しくて泣いてゐるのです』

母さんはやさしくまた訊ねました。みどりは漸く泣聲の中で、

『母さん、お人形を買つて下さい。』とでも母さんの顔色を窺ひながらおづおづ云ひました。母さんはそれを聞いてふいに暗い顔をなさいました。と云ふのは、みどりの家は貧乏で、お人形をみどりに買つてやる事が出来ないのです。

『今日に限つてそんなことを云ふものぢやありません。いまにお父さまがアメリカから歸つて來ればいくらでも大きなのを買つて上げますからね。それまでは去年買つて上げたので我慢していらつしやい。』

『でも今日君子さんの家で皆さんでお人形ごっこしてゐるのですもの。』さうは云つたものの從順しく精巧なみどりは、母さんの云ふ通りにしてあ

きらめてしまふのでした。

みどりは寂しさうにお部屋の間で自分のたつた一つのお人形を箱から出しました。お人形と云つても、小さな安物のお人形で、その上着物も破れてゐるし顔や手は幾所も禿けてゐました。これが若し金持のお嬢さんなら、こんなお人形はとうに芥溜に捨てしまふ位のものです。

いくら從順しいみどりでも、このお人形では氣に入らないのは當りまへです。暫らくは寂しさうにお人形を見てゐましたが、みどりはふと思ひ付いたらしく、ボール紙の上へ色チヨークでお人形の繪を描き出しました。それは今日君子さんの家で見た可愛いお人形の姿だつたのです。みどりは覺えてゐるお人形の姿を憶ひ出しながら、ザンギリの髪に市松模様の着物を着せ、

心をこめて書いてゐますと、自分ながら恍惚とする程よく出來たのでした。そして今にもこゝと笑ひかけさうな風でした。母さんはそれを見て大層賞めて、

『これを切り抜いて壁に張つて置きなさい。』と云ひました。みどりはもうお人形を買つて貰へない悲しみなどはすっかり忘れてしまつて、心も浮々と嬉しさうにボール紙のお人形を切り抜き壁に張りつけたのでした。

お正月三日の夜は寒い雪が降つてゐました。もう路も屋根も眞白になつてその寒さは戸をしめ切つた家の中まで沁み渡るやうでした。みどりはお母さんと向ひ合つてお火爐の中に入つてゐましたが、いつかうと／＼としてその儘顔を押しつけて寢入つてしまひま

した、お母さんもお裁縫の手が疲れて
うと／＼となさいました。

その時、不思議ではありませんか。
今迄壁に張つてあつて何の様子もなか
つた繪のお人形がにこ／＼と笑つたの
です。そしてひよつこり足を動かした
と思ふとチョイと畳の上に降りまし
た。繪のお人形はそろ／＼と歩いてみど
りに近寄りました。それは誰だつて眼
を覺さない程幽かな足音です。そして
みどりの脇に歩み寄つた時、お人形は
さも嬉しうに顔に笑ひを浮べて、
『みどりさん、私の魂を呼び出して
下さいまして有難うございます。お此
で私は世の中のことが見られてこんな
嬉しいことはありません。』と云つて繪
のお人形は丁寧に頭を下けました。そ
れから繪のお人形はそろ／＼と戸口の
方へ歩いてゆきました。何んでも外へ

出たいらしいのです。併し戸口はしつ
かりと閉つてゐますので、弱々しい繪
のお人形には開けることが出来ません
繪のお人形はさも困つたと云ふ風には
んやりと立つてゐましたが、ふと上の
方に氣が付いて見ると、戸の上に明取
りの細長い硝子が張つてあつて、幸ひ
なことにそれは一枚が破れて其處から
冷たい外の風が家の中に吹き込んでゐ
ました。
『しめた！』と思つたらしい喜びが、
繪のお人形を飛び上らせました。そし
て苦もなくその硝子の破れた窓口から
外に出ることが出来ました。
外はもう眞白になつてゐました。そ
の上まだ止みさうもなく雪は羽毛を散
らしたやうに降つて居ります。
繪のお人形は暫らく軒下に立つて雪
降る様を眺め、風のやうに小さく可愛

い、両手を自分の胸の中へ差し込んで
暖めてゐましたが、

『雪さん、雪さん、一寸来ておくれ。』
と低い聲で申しますと、不思議にも雪
の降つてゐる中から小さな白い妖女が
澤山出て來ました。

『おや、お人形の精さん、今夜はどち
らへお出掛けです。』と白い妖女達は口
を揃へて申しました。

『今夜はね、この家のお嬢さんが私を
呼び出してくれたので久し振りで世間
が見たくなつたのよ。』

『さうですか、それはお楽しみですね。
私達も宵のうちから踊り疲れてもうへ
と／＼になつてしまひました。何しろ
今夜は愉快で堪りませんや。所でお人
形の精さん、あなたはこれから何所へ
行きますか。』

『まづ一寸私は、自分の體の所へ行つ



て來たいと思ひます。』
『へえ、あなたの體は何處にあるん
ですか。』

妖女達は不思議さうにお人形の精を
見上げました。お人形の精は前にある
大きな立派な家を指さして、



『ほら、見えるでせう、この家なのさ、
この家の君子さんと云ふお嬢さんが私
の元の體を持つてゐるのさ、それをね
こちらの貧乏な家のみどりさんが羨ま
しがつて心をこめて私を繪姿にしたの
で、私はすっかりみどりさんが好きに

なつてしまつたのですよ。」

『それで、いつものやうに好きになつたお嬢さんに幸福を授けようと云ふのですかね。』

『まアそんな譯さ、所で雪靴を一足貸して下さい。こんな深い雪ぢや私などは埋つてしまふ。またお前さん達はよくも思ひ切つてこんなに降らしたものですな。』

人形の精は口小言を云ひながら、雪の精から雪靴を借りてそれを穿くと、軟らかい雪の上を足跡もつけずに歩き出しました。

人形の精は君子さんの家の様子はよく知つてゐますので、忽ち裏口へ廻つて勝手口の小さなうまい工合に開けて中に這入りました。君子さんの家はみどりさんの家と比べるとまるで乞食と王様との違ひのやうです。人形の精が

君子さんの寢床を覗いた時、君子さんは美しい花模様のある羽二重の羽蒲團に包まれてすや／＼と眠つてゐるのでした。

『人間の心持にそんなに違ひはないのに、生活向だけがこんなに違ふなんて人間の造つてゐる世の中は訝しなものだ。』と人形の精は思ひました。そしてまた君子が種々な人形を買ひ集めて可愛がるけれども、それも間もなくで、氣變りがしたり新しい人形が手に入つたりすると、舊いものはすぐに捨ててしまつたり、甚だしいのは髪の毛を捲つたり手を挫いたりすることを憶ひ出しました。それに引換へて貧乏人のみどりさんは一つの人形を大切にしてみんなに可愛がることだらうと思ふと人形の精は益々みどりさんが好きになつて今迄自分の仕へてゐた君子さんが

六二

嫌ひになりました。

『みどりさんのやうに優しくあゝも大切にしてく可愛がつて貰へれば私も幸福だし、みどりさんも楽しいだらう。』と人形の精は獨り言を云ひました。

『宜しい、では思ひ切つてみどりさんの家へ引越しをしよう。と決心をした人形の精は、そつと箱の蓋を開けて中から自分の元の體である市松模様の着物を着たザンギリ髪の見るから可愛いお人形を擔ぎ出しました。

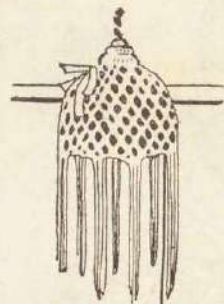
かうしてお人形の精は元の體を無事にみどりさんの家へ引越してしまつたのです。その變りにみどりさんの描いた繪のお人形は君子さんの家へ持つて行つて壁へ張りつけて置きました。

みどりは夜中になつてから火爐の火がなくなり急に體が冷えたので、

て寝みました。

ふと眼が覺めました。眼が覺めるとすぐ思ひ出したのは晝間一心こめて描いたお人形の繪のことです。

なんてことは、どうしたつてみどりに考へられないことだつたのです。みどりは自分の描いたお人形の繪が上出来であつたこと、無事に鼠にも囁られずに壁にかゝつてゐるのを見て一安心いたしました。そして、



くりに活々とした美しい繪姿を見ました。みどりはあまりに自分の描いた繪がよく出来てゐるので惚々と見とれてしまひました。

(本物のお人形がいつの間にかやつて来て、描いたお人形と取り換つてゐる

『母さん、母さん』と母さんを揺り起しました。母さんは驚いて起きて、

『おや、つひ假睡をしてしまひましたね、では床をとつて寝ませう。』と云つて母と子は貧しく、けれども如何にも睦まじく一つの蒲團に包まつ

そして泣くやら喚くやら、家の中はお人形一つ失くなつたことで大騒ぎですけれども何處を探しても見當りませんでした。ふと壁の面に張られてあるその人形の姿を描いたら美しいボール紙の繪姿を見つけた時、君子はこれはきつ

と誰かの悪戯に相違ないと思ひました
『随分ひどいわ、こんなボール紙と取
り換へるなんて、屹度これは書生の山
田だわ。』と獨り言を云ひながら、君子
は早速その事を母さんに告げましたの
で、母さんはすぐ様書生の山田を呼び
出して調べました。けれども書生の山
田が元より知つて居よう筈はなかつた
のであります。その時朝の御飯の前に
お酒を飲んでゐた君子のお父さんはそ



れを聞いて、
『どうしても家にないと云ふのなら、
昨日来たみどりさんが持つて行つたか
も知れないよ、何んでも欲しいさうな顔
をしてゐたよ。』と云ふと君子の母さん
も傍から、
『或ひはさうかも知れませんが、貧乏人
の子はよく盗みをするものですから。』
と云ひました。この金持の人達にとつ
て貧乏人は泥棒と同じに認められてゐ
るのです。

『すぐに山田を見にやるがよい。』
もうすつかりみどりが盗んだものと
思ひ込んでしまつた君子のお父さんは
怒つた聲でかう云ひました。山田は畏
つてみどりの家へ行きました。
みどりの家で朝先に眼覺めた母さん
が、昨日ボール紙に繪を描いて壁へ張
りつけて置いたものが、不思議にも本

物のお人形と變つてゐましたので、驚
いてみどりを起しました。みどりもそ
れを見て吃驚いたしました。

どうしてボール紙のお人形が本物の
お人形と取換つたか、その事は二人が
いくら智慧を絞つて考へて見しても
少しも見當がつきませんでした。

所へ金持の家の書生の山田がやつて
來ました。『お早う。』と云つて家の中へ
入ると、もう廣くもない座敷内がすつ
かり見えて、其處に探してゐたお人形
のあるのがすぐ眼につきました。

『一寸お伺ひしまが、そのお人形は
當家でお買ひになつたのですか。』
山田の聲はもう喰つて掛る様でした。

『いえ、それがまことに不思議なの
でして、昨日家のみどりがボール紙へ
こんなお人形の繪を描いて張つて置き
ますと、今朝起きて見ましたら本物の

がら、その通りだと云へば、

『このボール紙のお人形は家の八疊の
壁に掛つてゐました。屹度こちらのみ
どりさんが悪戯に取換へて行つたので
せう。さア、家のお人形を返して下さ
い。これはお返しますから。』と云つ
て山田はボール紙のお人形を疊の上へ
投げ出して、本物のお人形を抱へてど
ん／＼行つてしまひました。

みどりも母さんも餘りに不思議なこ
とに呆氣にとられてゐました。

『これは屹度神様の仕業でせう。』と考
へ餘つた母さんは云つて『それにして
も前の家から盗んだかのやうに思はれ
るのは残念です。』と云つて口惜しが
りました。みどりは何が何やらさつぱり
解らなくなりました。獨でボール紙の
お人形を抱きながら考へてゐますと、
ふと切れ／＼に昨夜見た夢のことが憶

ひ浮んで來ました。

それは人形の精が繪の中から抜け出
して外へ出て行つた事と、雪の道を本
物のお人形らしいものを抱いて歩いて
來る所だつたのです。そしてまた一生
懸命に戸をこぎ開けて家の中へ這入ら
うとしてゐる所も憶ひ出しました。さ
うした切れ／＼な夢をつなぎ合して見
ると、あの本物のお人形を夢の中で人
形の精が持つて來てくれたやうに憶は
れました。『だが若しかすると――』
とみどりは又考へ出しました。若しか
するとあれはお人形の精ではなくて、
本當は自分だつたのではなからうか。
自分が夢にうなされて出掛けて行つて
夢中であのお人形を持つて來てしまつ
たのではなからうか。

然し、それもみどりにとは判然とは解
らなかつたことでした。(をばり)



お人形に變つてゐたのでございます。
みどりの母さんは恐ろ／＼丁寧に申
しました。山田は懷中からボール紙の
お人形を出して、

『これがさうですか。』と申しましたの
で、みどりも母さんも不思議に思ひな



狼の恩返し

(推薦)

佐藤 平一

神谷 萬吉 畫

今から百年も二百年も昔、越後の國の片田舎に吾作と言ふ一人のお爺さんが住んで居りました。村端の小さな水車小屋に番人をしてそのお爺さんは幾

十年來一人で毎日暮して居ました。お爺さんは一度も怒つた事もなく、その上非常に正直なので村人の誰れもから可愛がられて、特に吾作爺さんと言ふ名は村の子供達には無くてならぬものの一つでした。或る四月の事でございました。村の名主から頼まれて、隣村のお寺まで用達しに出かけた吾作爺さんがお寺から歸り初めた頃は、意外にその用事が手間に取れたので、日もとつぶり暮れて、白い月の光が一

面に野にも山にも流れてをりました。二里の山路をお爺さんは急いでトボ／＼やつて参りました。暗い杉の山を越すと、そこには周囲の一里もある様な一つの大きい沼がありました。この沼は近邊のお百姓さん達には、無くてはならぬ貯水池であり、又美しいこの沼地は近在の小供達の楽しい遊び場でした。ここ迄来ると、一本の大きい樺の木の下に絶えず動いて居る二つの黒い影をお爺さんは見つけました。『おや、何だらう。』さすがのお爺さんも、立ちすくんで了ひました。勿論人なんか一人も通りません。恐ろしければ又何だか近寄つて見たいやうな氣もして、お爺さんはだん／＼、その影に近づいて行きました。十間程の所まで来た時に、お爺さんはそれが獣であり、大變苦しんで居る事を知りました。優しい心を持つたお爺さんは、恐ろしい事も忘れて、とうとうそのそばまで来て了ひました。見ると一匹の狼が手で口をがいては苦しう

にウン／＼うなつて居ました。そしてその傍には、もう一匹のその子供らしい小さい狼が、心配さうにジツとそれを眺めてをりました。『のどに骨でもさしたんだな。どう、俺が一つ取つてやらう。お前は一體何を食つたんだ。』優しい言葉をかけながらお爺さんは、狼の口へ手をかけてよく見ると、それは一本の大きい馬の骨でした。『馬を喰つたのか。』お爺さんは村の太吉の所の馬が昨夜死んで、今朝この沼邊へ捨てた事に氣がつきました。やつとの事で、お爺さんは骨を抜きとる事が出来ました。『太い骨を刺したもんだ。これからは良く氣をつけないといかんよ。』さう言つてお爺さんは、狼の頭をなでてやりました。親子の狼は大變喜んで、耳や尾を動かしながら幾度も幾度も頭を下げました。やがてお爺さんは、

村の入口までやつて参りましたが、ふり返つて見ると、別れ惜しさに未だ狼は首をうなだれたまゝ、従いて参りました。

「さあ、もう村の入口だから歸れよ。又村の惡戯者に會ふとひどい目に會ふぞ。」

お爺さんの方を看守つて居た狼は、お爺さんの言葉が通じたらしく、ウオーと一聲なくと、やがて又もと来た方へ歸つて行きました。

『ほんとに畜生でも、可愛いもんだ。』呟く様にさう言つて、お爺さんも何時までも狼の後姿を見て居りました。

春も暮れて、山や林の木葉がハラ／＼散る頃になつて、今まで一度も病氣になどにかゝつた事の無いお爺さんが、どうしたのか重い病氣にとり附かれて了ひました。村人は大層心配して、交る／＼やつて来ては色々親切に介抱して呉れましたが、お爺さんの病氣は少しも良くなりませんでした。そして

不思議な事には、毎晩兎や狸等が定つて、水車小屋の軒下におかれて有るのでした。

『ほんとにおかしいね。』村人は寄るとさわると、さう言つてこの不思議な出来事を話し合つてをりました。その夜も、白い大きな兎のおかれてあるのを聞いたお爺さんは、

『あゝ、やつと分つた。ほんとに畜生でも感心なものだ。』さう言ひながら、枕下の村人を振りかへりました。きつとそれは春さき助けてやつた狼が恩を返さうと思つてする事に違ひないと思つて、お爺さんはその當時を追憶しながら、瘦せた目に涙をうかべて事の顛末を語りました。

『成程なあ。偉いもんだ。人間でも中々眞似出来ないよ。』みんな口々にさう言つて、立派な狼の心に感心しない人はありませんでした。それから十日程たつて、村人の看護も無益にと／＼吾作爺さんは死んで了ひました。主人を失つた水車小屋は、コ

ト／＼といふ水車の音もきこえず、ひっそりとしてをりました。そしてその頃から、毎晩水車小屋の附近

から淋しさうな狼の吠え聲が聞えて参りました。

『可哀さうになあ。まだ吾作さんが何處かに居ると思つて探して居るんだらう。』村人は皆な狼の心に同情いたしました。間もなく一人の發案によつて、或る夜の事、お爺さんのまだ新しい墓の前に狼を救つてやつた日のお爺さんの着物をそっくり大きい藁人形に着せ、そしてその前に色々の供へ物をして置きました。その夜はことさら冷い月の



光が、佗しい墓場に漂つて居りました。間もなく、何時もの頃になると、何時もの晩と異なつて一層悲

しさうなウオー／＼と言ふ狼の遠吠の聲がしました。翌朝、村人が朝早く行つて見ると、その藁人形には澤山の枯草がかけてあり、なほその前には、一晩中そこに坐つて居たらしい二匹の狼の足跡が深く地に跡づけられてありました。

『一晩中ここに居たんだね。』さう言つて、村人は哀しい狼の事を思ひながら互に目を見合せました。その夜からは、もう村人は狼の吠え聲を聞く事は出来ませんでした。きつとどこかの遠い山奥へ行つたに相違ないと村人は語り合ひました。

(作者住所 富山市小泉町三七〇 實田方)



孤兒物語

大戸喜一郎

岩岡とも枝畫

七〇

皆さんは夜お休みになつてから夢をごらんでせう。けれども皆さんよりもつと食しい人たち、心の切ない人たち、氣の毒な人たちは、起きてゐても、眼を、けてゐても、夢を見るのです。

さういふ人たちにとつては、夢は、皆さんが病氣になつたとき召上がる薬と同じやうに、元氣づけてくれるのであります。

チャーリー少年はふたゝび秋が

來て、野原でも村の石置場でも、寒くて夜をすごすことが出来なくなると、またロンドンの町を目ざして歸つて來ました。今、少年は、町はづれの、道端へ腰を下ろしてゐます。少年の手はしつかり、廻しオルガンを握つてをり、眼はちつと夕闇につゝまれてゐるロンドンの町へ注がれてゐます。そしてそのまゝ、いつまでもく動かうとはしません。

一體、少年は何をしてゐるのです。夢を見てゐるのです。過ぎ去つた日の事を、思ひ出してゐるので、もしこれが活動寫眞でしたら、少年の夢はすぐ映寫幕の上に現はれるに違ひありません。けれども今は、私が代つて少年の夢を申し上げませう。

……見すばらしい薄い服をつけたチャーリー少年は、汚い建物の

少年は思はず立ち止つて、耳を傾けました。

い氣持になつて行きました。

ホーム スキートホーム
ゼアス ノープレース ライク
ホーム
『お母さんが、うたつてくれた歌だ。』

チャーリー少年はさう思つて、聞きほれてゐました。すると、お腹の空いてゐることも、この寒空にとまる家のないことも忘れて、小さい時お母さんの膝にもたれて聞いてゐた時のやうな静かな懐し

オルガンの音はつゞきました。と、少年はその音に吸はれるやうに、オルガンの響いて來る汚らしいアパートへと、歩いて行きました。入口のドアは開いてゐました。廊下に立つて、突きあたりにある階段に足をかけました。

と、ちやうどチャーリー少年が、最もはじめと思はれる町へ來たときでした。こんな場所には似合はない、しづかなオルガンの音が、流れて來たのでした。

オルガンの音は二階から漏れて來るのです。チャーリー少年は足音を忍ばせながら階段を上がつて、小さな部屋の前に立ちました。



七一

そして僅かに開いてゐるドアから中をのぞき込みました。

一人のお爺さんが、暗い蠟燭をともして、その前に坐りながら、廻しオルガンを鳴らしてゐるのでした。

少年は灯に輝き出されたお爺さんの人の好さうな髯の生えた顔を見ると、そのまゝ、そつと顔を引つ込めて、オルガンの音に聞き入りました。そして心の中で亡くなつたお母さんの言つた、

『私達は亡くならなければ、平和な楽しい家——スキートホームへ行かれないのです。』

といふ言葉を思つてゐました。と、とつぜんオルガンの音がビタリと止みました。續いてドタリ

といふ何か床に倒れる重い響がしました。少年はそれを聞くと、はつとして部屋の中に駆け込みました。

お爺さんが、倒れてゐるのでした。眼をつぶつたまゝ、まはしオルガンを放り出してゐます。チャリー少年は、大急ぎでお爺さんを抱き起して、ベッド代りに薄い蓆布圍がしいてある上に横にしてやりました。

間もなく、お爺さんは眼を開けました。そして見られない少年が自分の側に坐つてゐるのを見ると小さな聲で、

『誰だ。何しに來たのだ。』と言ひました。

少年はチャリーといふ名であ

ることから、一人ぼつちであること、宿る家もないことを物語り、お爺さんのオルガンの音に引かれて二階まで上がり込んで聞いてゐる中、お爺さんの倒れる音を聞きつけて、入つて來たことを話しました。

するとお爺さんは細い眼でちつと少年を見つめてゐましたが、

『家もない……一人ぼつち……』と呟いてから少し聲を高くして

『そこに横になるがいい。』

さう言つて眼をつぶりました。かうして一人ぼつちの少年チャリーと、一人ぼつちのお爺さんトレフィーとは、この晩から一緒にをるやうになつたのでした。ところが、お爺さんの病氣は少

しも好くなりませんでした。あまけに秋も過ぎて冬の寒い日となり

まい日水雨が窓を打つやうになり

ますと、火の氣のない部屋は水の中にゐるやうに、冷めたくなりま

した。すると横になつてゐるお爺さんは身體を蝦のやうに縮かめたり、時々不安さうな眼付をして、部屋ぢうを、見まはしたりしました。そんな時少年はどんなにつらく思つたことであらう。瘦せ細つたお爺さんの身體をこすつたり、足や手をさすつたりして、幾らかでも暖かくしてやらうと骨折つたのでした。

ところがある日の事、チャリー少年はお爺さんがホーツと溜息をつくのを聞きました。

ちやうど夕方ので、少年はパン屑を買ひに行くときでした。

その時お爺さんが横になつたまゝ開けた財布には、もう一錢銅貨が一つしか残らない事になつたので

す。幾片れかのパンを買ひ集めて歸つて來た少年は、この最後の晩ご飯をどんなに悲しい思ひで食べつづけたか知れません。

『お爺さん』と少年は言ひました。

『僕にお爺さんの代りをさしてくれませんか。』

お爺さんは黙つて少年の顔を見つめました。

『あの廻しオルガンの鳴らし方を教へて頂きたいのです。さうすれば僕、町へ行つて、どつさりお金

を儲けて來ます。』

少年は熱心にさう言つて、トレフィーお爺さんを見ました。

お爺さんはちつと少年を見つめてゐましたが、やがてその落ちくぼんだ眼尻から、ボトリと涙が落ちました。

『あゝ、教へて上げよう。だが氣をつけて損さないやうにしないと……』

たつた一つ残つた廻しオルガンを少年に渡すのは、お爺さんにはどんなに心配な事だつたか知れません。それでもお爺さんはやさしい少年の心づかひをこはしたくなかつたのです。

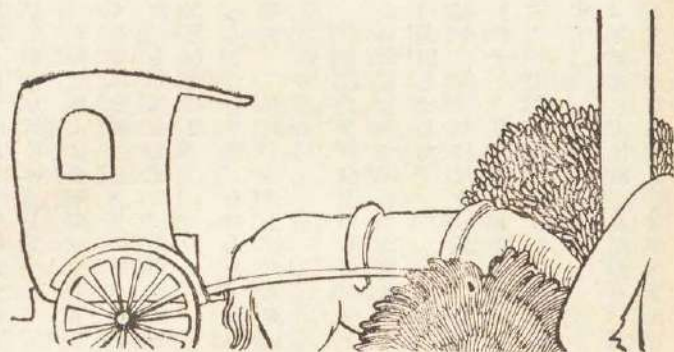
やがてお爺さんはそつと起してもらつて、小さな廻しオルガンの



鳴らし方を、少年に教へました。
あくる日から、少年は廻しオル
ガンを肩にして町に出ました。そ
して夕方になると幾つかの銅貨と
パンを持つて、薄暗い二階へ歸つ
て来るやうになりました。
長い冬の日も一日々と過ぎて
行きました。今では少年は立派に
お爺さんの代りがつとまるやうに
なりました。けれどもお爺さんの
身體は少しも好い方へは向きませ
んでした。いゝえ、痩せ細つた身體
はだん／＼と骨ばかりになり、落
ち窪んだ眼はだん／＼鈍い光りに
なつて行つたのです。おまけに、
ある夕方などは、少年がいつもの
やうに、
「只今。」と言つても返事もしませ

七四
んでした。
チャーリーは少年ながらも、お
爺さんの病氣が大へん悪くなつた
のだと知りました。そしてその晩
は、いくど眼をさましては睡り込
んでゐるお爺さんの顔をのぞき込
んだかきませんでした。

ところが、少年は、翌る日の朝
いゝ事を見つけた。この宿屋
の主人が怪我をして、お医者さん
が来たのでした。それを見ると少
年は、どんなに喜んだか知れませ
ん。さつそく下へおりてお医者さ
んの歸るのを待受けてゐました。
やがてお医者さんは、出て來ま
した。そして待たしてあつた馬車
へ乗らうとしました。そのとき、
少年はつと走り寄つて、



「お願ひでございます。どうぞト
レファイお爺さんを一度見て頂き
たいのです。」と言ひました。
「トレファイお爺さん。」
「えゝ、僕の先生です。僕のご主
人です。あの二階の部屋で病氣し
て寝てゐるのです。どうぞ一度で
結構ですから、見て下さい。」
お医者さんはさう言はれると、
再び家の方へ引き返して來て、キ
シキシ音のする階段を上がつて來
ました。
「お爺さん。お医者さんが來まし
た。」
少年はさう言つてトレファイお
爺さんの顔を見ました。が、お爺
さんは別に怒つたやうな顔もしま
せんでした。それどころか丁寧に

身體を診てくれるお医者さんの言
ふとほりになつてゐました。
やがて診察がすむと、お医者さ
んは出て行きました。少年はお爺
さんを横にしてやると、お医者さ
んの後を追つて、階下へ行きまし
た。
「あのう、お爺さんは癒るでせう
か。」
少年はおど／＼と、たづねまし
た。するとお医者さんは、氣の毒
さうに、
「うむ、一と月位しか持つまい
よ。」と言ひました。
少年はこの言葉を聞いて、吃驚
して口をきく事も出来ませんでした。
「もう年をとつてゐるし、おまけ

に弱り切つてゐる。氣の毒だが、どうも仕方がない。」

お醫者さんは少年がびつくりしてゐるのを氣の毒さうに言ひました。そしてそのまゝ、馬車へ乗らうとしました。

「ちよつと……、それから、どうぞ……、あいくら差上げたら好いんでせう。」

少年はさう言ひながらポケットから銅貨を六つ出してお醫者さんに差ししました。

「今、僕、これだけしか持つてをりません。もし足りませんでしたら、今日町で働いて來て、差上げます。」

お醫者さんは涙ぐみながら、ぶるぶる手をふるはしながら差出し

たお金と少年を見くらべてゐました。やがて、

「お金はいりません。それよりお爺さんに上げる物でもお買ひなさい。後からお藥を届けて上げます。又明日の朝、もう一度診て上げませう。」

さう言つて馬車へ乗ると、走り出してしまひました。

少年は暫くお金を手に握つたまゝ馬車を見送つてゐましたが、ふたゝび歩き出すと、二階へ歸つて來ました。

「お醫者さんは、もう助からないと言つたでせう。」

お爺さんはチャーリー少年に言葉をかけました。

「えい、たつた」と月しか……」

「うむ。さうか。」お爺さんはその言葉を聞いても別に悲しさうな顔もしませんでした。

「二と月経つたら天國へ行かれるのか。」とお爺さんは言ひました。

少年は天國といふ言葉を聞くと涙にぬれた顔を上げて言ひました

「天國つてどこにあるんですか。」

「遠いお空の上。いつも静かな、楽しい所だ。」

少年はたつた一と月しか一緒にゐられないと悲しく思ひながら、自分も早く楽しい天國へ行きたいと願ふのでありました。

間もなくお醫者さんから、お藥と、ほかに小さな包みが届けられました。包みの中には今まで手に取つたこともないやうな、あし

さうなハムだの、燗肉だのが入つてをりました。少年はどんなに喜んで、藥と肉とお爺さんに食べ

ましたかしれません。

かうして親切なお醫者さんのお蔭で、お爺さんは、終日少年にみまもられながら、一日、一日と過した行つたのでありました。

けれどもチャーリー少年は、いつまでもお爺さんの傍にばかりゐるわけには行きませんでした。そこでふたゝび廻しオルガンを持つて町へ出はじめました。

ある日のことでした。少年は温かい陽が輝いてをりますので、思はず遠道をして、郊外へと出ました。四邊は大きなお屋敷やら、別荘風の立派な建物やらが、立ち並

んでをりました。

少年はとある別荘風の家の前に立つて、靜かにオルガンを廻しはじめました。

緩やかな樂の音は起りました。

と、とつぜん二階の窓が開いて二人の可愛い少年と少女とが顔を出しました。二人は暫くちつと音樂に聞き入つてゐましたが、やがて、聲をそろへて、唄ひ出しました。

そして歌がはると、

「もう一どやつておくれ。」と叫びました。

チャーリー少年は言はれるまゝ、に、幾度もくり返しました。

やがて二人は後ろに顔だけ向けながら、何やら言つてゐました。きつとお母さまとお話してゐるに

違ひありません。ごらんささい。

お姉さまの方が、窓から手を出して「ホラ、上げるわ。」と叫んだではありませんか。

少年は二つの白銅が陽に輝きながら落ちて來るのを見ました。が一つは門の中の花園へ落ち込んでしまひました。そこで靜かに門の中へ入つて探しました。けれども白銅は草花の中へ落ちたので、なかなか見つかりませんでした。

すると二階にゐた姉弟は駈け下りて來て、いつしよに探してくれました。それでやつと見つかりました。

チャーリー少年は帽子をとつて丁寧に辭儀をしました。が、その時、少年の眼にはきれいなまっ

ゆきさうの花が目につきました。
それを見ると少年は、小さいと
さお母さんがたつた一どまつゆき
さうを買つて来てくれた事を思ひ
出して、懐かしさうに見入つてゐ
ました。

『お花がお好き？』と姉さんの方
がたづねました。

『えい、大好きです。』と少年は目
を輝かしながら言ひました。

『ぢやあ上げませうか。』少女は
さう言つて四輪摘でくれました。

チャーリー少年はその花を持つ
て、どんなに嬉しく思ひながら歸
つたかしれません。

『お爺さんは、さつと喜んでくれ
る。』
少年はさう思つてトレフイーお

爺さんの笑顔を胸に描き乍ら、暗
くなつてから歸つて来たのでした
ところが、二階へ上がつて、部
屋へ入ると、中はまつ暗ではあり
ませんか。

『只今。』と言葉をかけても、何の
返事もありません。

『お爺さん、只今！』
少年は何か恐ろしい事でも起つ
たやうな氣がして、大急ぎでお爺
さんの側へ行きました。が、その
時にはもう、お爺さんの身體は冷
めなくなつてをりました。

それからいく日かすぎて、少年
はお爺さんの残して行つた廻しオ
ルガンを持つて、宿を出て、さす
らひの旅に出たのでありました。

これが少年の起きてゐながら見
た夢でありました。

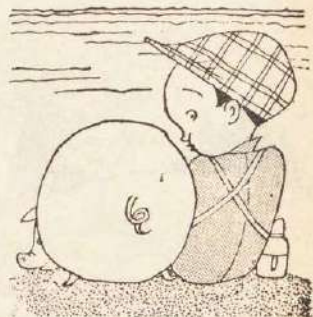
少年はそのときからまる一年た
つて、毎日々々行きたいと思つて
ゐる楽しい天國へ行くことも出来
ないで、ふたゝび寒さに追はれて
ロンドンの町へ歸つて来たのであ
りました。

こんどは少年の身の上どんな
事が起るでせうか。果して仕合せ
が待つてくれるでせうか。

チャーリー少年はそんな事を思
ひながら、しづかに立ち上がる、
お母さまやトレフイーお爺さんが、
ゐる天國の方に眼をやりました。

もうすつかり暗くなつてゐて、
夜空にはきら／＼星が輝いてをり
ました。

(をはり)



豚と山猫との戦

新ほら博士

三井信衛

井上猛夫 畫

私の家と云ひますのは、あの米國一の大金持であ
るカーネギイさんより、ほんの一寸貧乏でした。さ
あ、どれほど貧乏でしたか、カーネギイさんの財産
から十五億九千九百九十九萬九千九百九十圓退いた
くらゐが、多分私の家の財産でしたらうか。とにかく
くにも私が東京へ出る時に、その財産の半分を私に
くれたのが、誰よりも私の大好きなお父さんでした。

それから私にはもう一つ、小さなところから極く大
切にして育てた一匹きの……それが牛でもなければ
驢馬でもない、實は豚だつたのですが、それも私の
何よりももの財産でした。

いやに笑ふぢやありませんか？
私の顔が豚に似てゐますつて？ めつさうなこと
を仰言るな。豚の方が私に似てゐるんですよ。

さて私はその豚をひきつれて、船に乗つて故郷を
あとにししました。云ひ忘れましたが、豚の名はコッ

コックリさんはほんとに私によくなつてゐまし
たよ。何しろ東京に行くにも、旅費がなかつたもの
ですから、私は汽車に乗る譯にも行きませんでした。
そこで新潟に着くと、コックリさんの背中に股つて、



山を歩く
ことにし
たわけで
す。何し
ろ、馬と
か驢馬で
すと、乗
つてゐる
恰好も、
又格別と
素晴らし
いでせう

し、歩く速力も早いのでせうが、何しろ相手は豚です、さあその遅いことゝ云つたら、降りて歩く方が餘程氣が利いてゐましたね。それにその乗つてゐる恰好の無細工さ……實際山の中からよかつたものの、私はそれでも誰か見てゐはしないかと、何べんそつと後を振返つて見たか知れませんでしたよ。

とき／＼その上にコツクリさんが、道ばたにおちてゐる何んな汚い物でも、平氣に立ち止つて喰べるのにも往生しました。その代りに、餌の要らなかつたのは、貧乏なこの私に恰度もつて來いでした。

さうして私は、ぼつつり、ぼつつりと歩いて行つたものですが、一日一里づゝ歩いて、やつと、半年の後に、信州の山奥まで着いたのでした。

ところがです。その山の奥で、たいへんな目に合ひましたね。それは、ふゐに何處からか、一疋の恐つかない狼のやうな姿をした、針鼠のやうな毛を持つた山猫が飛出して來て、

八〇



「ニャー
ゴー」ど
うしてど
うして。
そんな生
やさしい
聲ではあ
りません
でした。
こつちを
鋭い眼で
ぢいつと

眠^ねんで、グワツグワツ、こんな聲^{こゑ}で啼^ないたものです。
そこで私は豚^{わたしは}の背中^{また}から降りて、
『しつかり行け！ コツクリさん』
と言^いつたのです。ところがまあ、何^{なん}と弱^{よわ}いコツク
リさんでせう。大きな巨^{おほ}きな太^ふつちよの圖體^{ぶたい}をして

ゐるくせに、何とかして下さいよ——と云ふやうに私の顔を見い／＼、そろり／＼と足を揃へて、後に退つて行くではありませんか。

『しつかりしろ。おい！ コツクリさん！』

私は情なくなつて、平手でびしりとコツクリの尻を叩いてやりました。すると益々コツクリは逃腰をししました。

山猫は今にも、齒をむき出して、私の大切のコツクリさんに飛びつきさうにしてゐるではありませんか。

『さあ。どうしよう。よし。大切のコツクリさんのためだ、私がコツクリの代りになつてやらう』と、私はとつさに考へて、上衣を脱ぎました。と言つて、別にどうすると云ふ、いゝ思案もなかつたので、さうしたら景氣のいゝ知慧でも出て来るだらう……と千に一つのかねあひです。

が、けふは私の常々信心してゐる知慧の神様のお

國が日曜日だと見えて、なか／＼お誂へ向きのいい知恵も浮んで来ません。私は山猫を睨んだまゝ、ものゝ二分か三分そこに突つ立つてゐました。ふとその目を、杉の木立の方にやると、思はず私は『しめた！』と一哩四方に響くほどの聲を出しました。

私はふゐに山猫をひつつかまへて、足でいやと云ふほど尻尾を抑へました。それから、傍に出てゐた枝を一本折ると、それで山猫の毛を一生懸命力を出して擦りました。

私の横にあつた杉の木の間には、こんな山奥ではありましたが、電信棒が立つてゐて、針金が幾筋も通つてをりました。

山猫の毛を擦つてゐますと、しまひにバツ／＼と青い火花が散りました。案の定電氣が起つたのです。と、見る／＼針金の方にもバツ／＼と電氣をよび起して、山猫はうんとも何とも云はずに、感電して、

たうとう死んでしまひました。

『ばんざい。ばんざい。』

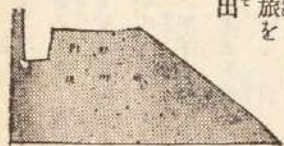
私は思はず手をあげました。見ると何うです。豚つてほんとに、のんきなものですな。いつかぐうぐう居眠りをしてゐるのですよ。

豚が鹿になる話

やうやく東京へ着いたのは、寒い冬のことでしたよ。いゝえ、その年の冬ではないのです。冬は冬でも翌年の冬です。

コツクリと一緒に旅をしたお蔭で、故郷を出てから、滿一年と

三ヶ月もかゝつたのには、ほと／＼弱らせられてしまひました。こんな



ことならいつそ、私がコツクリさんをおんぶして行つた方が、倍も倍も早かつたか知れませんが。

東京へはいつて行くと、さあ、皆笑ひましたね。

私は胸に、例の勳八等功七級の金鷄勳章を始めとして、その外色んな勳章を、づらりと下げてゐましたがね。なにしろ、豚なんかに乗つてゐるので、皆が笑つたの笑はないのつて、

『あれが本當のトン馬だよ。』と言つてゐるのを一寸耳にすると、さすがの私もムツとするやら、感心するやらです。

いや。實際のところ、コツクリさんが餘りいげんがないので私も何とか飾りをしたと思つてゐました。私がふと町の一角を見とす。そこは丁度古道具屋だと思えて、屏風だの、花瓶だの、桐の箆箱だの、火鉢だの、まあさま／＼の物が積んでありました。

その中に、鹿の角でこさへた、刀かけが一つ



出てゐるのです。

「これは恰度願つたり叶つたりだ。」

と、私は思ひました。その鹿の角は二圓もしたので、一寸まど／＼はしたものの、やつぱり思ひ切つて買ひとりましたね。

私はその鹿の角を、角だけ折つて、コツクリさんの頭に、紐で結へつけてやりました。どうです。とても素晴らしい角が出来ました。

「おい。鹿が歩いてくるよ。」

「鹿ぢやない。どうやら豚らし。」

「だつて、角は鹿ぢやないか。」

「だが、胴體は豚だよ。」

私はコツクリさんの上で、その度に「エヘン。エヘン。」と咳拂ひをしてゐました。

ところがね、人の噂といふものは偉いものだと、つく／＼感心してしまひましたね。誰が云ひ出したともなしに、私が、日本海、海戦や南山の戦に、わ

だが、さて、さうして東京へ来たものの、別段暢氣に見物にやつて来た譯ではありません。大いに一つ働いて、勉強して、偉い人になりたい——と思つて来たわけです。

だが、こゝに困つたことには、何處へ行つても、私がコツクリさんと一緒にゐると、私を雇つてくれないのでした。全く豚の可愛さを、誰も知らないのかと思ふと、つく／＼情なくなつてしまひましたね。が、仕方がないので、コツクリさんを或る豚小屋に預けて、私はやうやくと働口を一つ見つけましたね。いや、一つと云ふより、二つ見つけたんです。一つは子守の口で、もう一つは、店番でしたよ。

二つも一べんに口があつたので、私はそのどちらにも雇つて貰ひました。いや、店番をしながら、子守をする——さう云ふわけではないので、子守をしてくれと云つた家と、店番をする方の家とは、さうです、ざつと二里は離れてゐたかと思つてゐますが

八四
づか十五歳の子供でありながら、大變な功勞を立てたほら少年であることを知つたものです。

「ああ。もう大變です。」

私を見ようと思つて、彼處からも此方からも、前からも後からも、まあ、よくもこれだけ出て來られたものだと思ふ程、私の周りに集つて來ました。

しかし、そのために電車も停まる、馬車も向方へ行けるなる、學校生の生徒も遠廻りをするのでおくれてしまふ。いや全く、氣の毒なことをしてしまひましたよ。

「やあ。ほら君！」

「やあ。ほら少年！」

「さあ、敬禮をする敬禮をする。私はもう手をあげたり下したり、餘り手がだるくて仕方なかつたので、たうとう手套を脱いで帽子に釣つておきましたよ。」

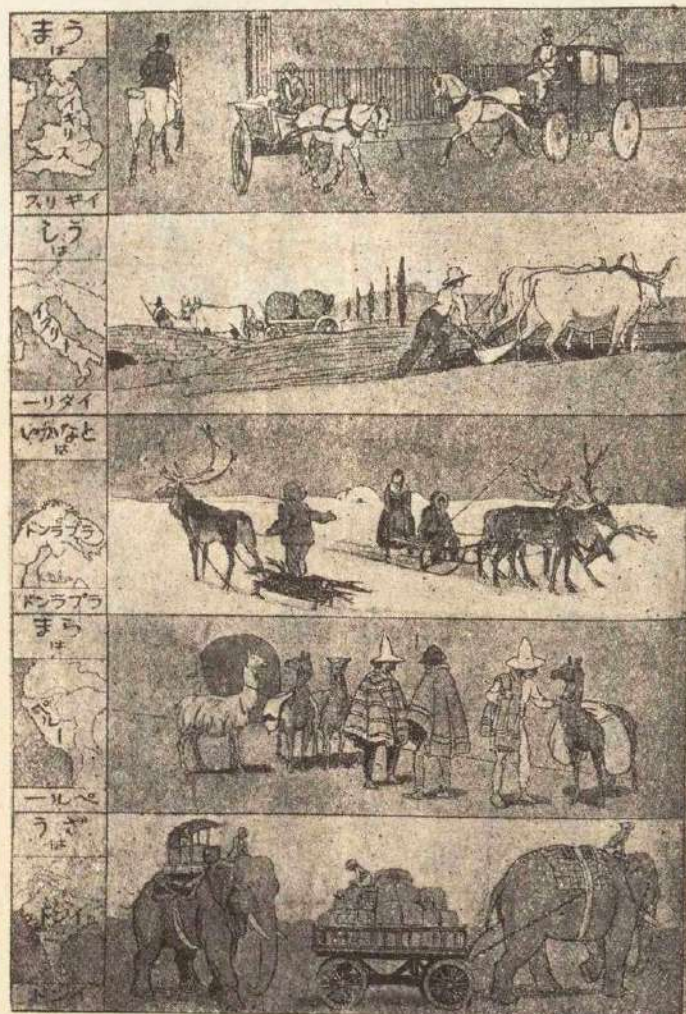
一人で二役の話

ね。なあに、うまく兩方やりましたとも。

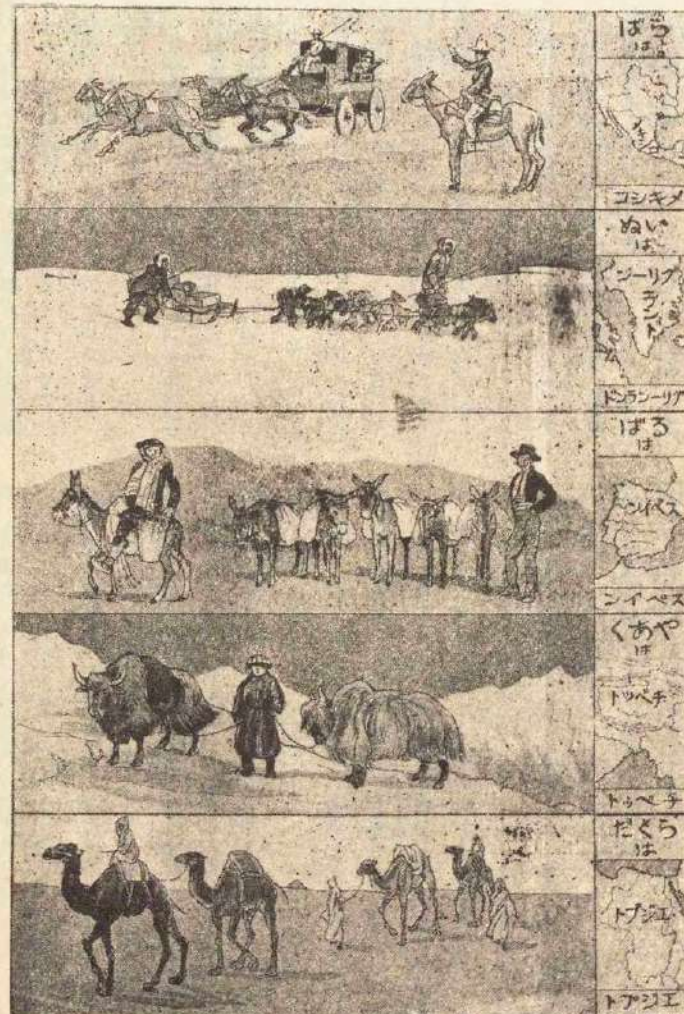
幸ひ、何方の家にも、お眺め向きに、電話が掛つてゐたのですよ。それで、赤ん坊を寝かせておくと、すぐ店番をする家へ電話をかけて、卓上電話の受話器を赤ん坊の耳にあて、送話器を赤ん坊の口にあてておくのです。それから、店番に行きます。その家の電話を耳にあてながら店の番をします。赤ん坊が泣くとすぐその電話から「オギア。」と聞えて来る。そこで私が電話で子もり歌を唄つてやる……それやあどもし、聲で歌つてやりましたよ。

いや、大して長い間、その兩方に雇はれてゐた譯でもありません。ざつと一日だけゐましたかな。いや、私がやめたんではなしに、向方からおやめ下さいと丁寧な言ひました。私とその二軒をやめると、何と深切なものではありませんか！ 一つの間にか豚小屋を脱け出して、鹿の角をつけたコツクリさんがもう私を迎へて來てゐました。

物が動くくらたはに



めたの人と國と各と界と世と





お日様に

ならうとした林檎

藤浦 洸

初山 滋 畫

北の國の或る丘の上に、一本の大きな林檎の木がありました。その丘は東向きで、前は何一つ妨げるもののない廣々とした大海でした。いつも藍色の大空と大海が、からつと展けてゐました。

煙草を吹かしながら林檎の木を見上げてこんな會話を初めました。

「何と立派ではないか。」

「殊に一番上のは美事だなア。第一珍らしく大きいではないか。」

「林檎もあんなに大きく赤くなると、食べるには勿體ないやうだ。」

「まるでお日様のやうだなア。」

「だが、あのまゝにして置いたら、實の持腐れだ。今に腐つてしまふだらう。」

「さうだ、勿體ないが、今日漁から歸りがけには取つて食はうではないか。」

「さうしよう。あの頂天の大きな奴を、がぶつとかぶりつく時の事を思ふと、堪らないなア。」

「さうだ。そのつもりで、さあ今から一漁かせいで來よう。」

「さうしよう。」

太陽は毎朝水平線から出て、林檎の木一ばいにすがすがしい光を投げかけながら、丘の眞上を通つて、後の山へ入つて行きました。

ですからその林檎の木には、眞赤な大きな林檎が鈴なりになつてゐました。それが朝日を受けてゐる時の美事さと云つたら、實に素晴らしいものでした。

「何と立派ではないか。まるで火の珠のやうだ。」

丘の下を通る人々は、林檎の木を見上げてきつとさう云ひ、暫くはじつと見惚れてゐる位でした。

わけてもその木の一番頂天になつてゐる林檎は、一番太陽の熱を澤山受けるので一番大きく、それを燃えさかる火のやうに眞赤でした。ですからその木の林檎は、その一番でつべんの林檎を「私達の兄さん」と呼んでゐました。實際兄さんなんぞでせう。何しろ一等早く太陽を見る事も出来、一番おそくまで太陽の光を受けることも出来るのですから。

ある朝の事、二人の漁師がその丘の麓で休んで、

二人の漁師は網を肩にかけ、勇んで出かけました。

驚いたのは林檎です。

「あ、聞いたか。」

「聞いたよ。」

「あの僕達が尊敬してゐる兄さんを、今日の夕方あの漁師達が食べるんだつて。」

「大變な事になった。」

「一番立派になるのも善悪だね。」

林檎の實はがや／＼と騒ぎ合ひました。

さて、一番上の兄さん林檎です。勿論兄さん林檎も漁師達の會話を聞いてゐました。

「さあ大變だ！」彼は眞青、——にはならなかつたでせうが、ぶる／＼震へました。

が、流石多くの林檎の實の尊敬を一身に受けてゐる兄さんです。ふと、彼が兼ねて考へてゐた事を思ひ付きました。「さうだ、今日こそ、その時だ。兄さ

ん林檎は何か決心したやうに見えました。

彼は一番高い所にゐるので、かう云ふ時には極く好都合です。いきなり両手を挙げました。

「諸君！」その聲は落着いてゐます。林檎の實達は

「やつぱり偉い人は違ふなア。今日一日に命が迫つてゐるのに、あんなに落ついてゐる……。」と驚きました。

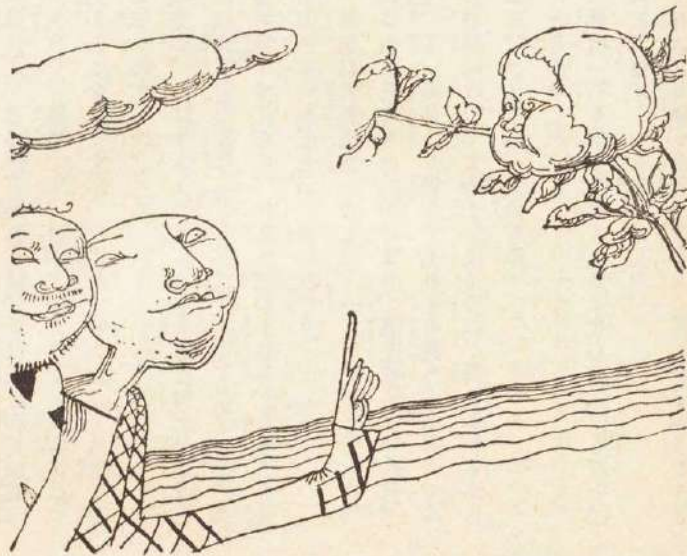
「諸君、諸君は僕のために色々心配してゐられるらしい。兄としてこんな嬉しい事はありません。僕だつて、あんな漁師に食はれて果てるのは残念です。

そこで僕はもう可なり前から決心してゐた事を、いよいよ今日決行する事にきめました。それは外でもありません。僕はお日様になりたいと思ふんです。」

彼はかう叫んで、咳を一つしました。

林檎達はあまり突飛な話なので、思はず顔を見合せました。

「僕がお日様になる！ 君達は一寸不思議に思ふか



も知れない。けれど諸君、僕は毎朝あの向ふの海からお日様が登つて、あの山の中に落ちて行く度に、またお日様が一つだけ無くなつた、明日のはまだ海の中へ残つてゐるだらうか。と、さう心配せずにゐられなかつたんです。實際、僕がお日様を見てから、もう數へ切れない位、後の山の中に無くなつてゐます。きつと今に後がなくて困つてしまふのではないかと思ひます。だから、僕は早く海の向ふへ行つて、お日様になりたい、と思ふんです。」

さう云つて聲をおとしました。

すると林檎達は、

「それはいゝお考へです。」と叫びました。

「お兄様なら、きつと立派なお日様になれるぞ！」

と云ふのもあれば、氣の早いのは、

「兄さん。ばんざい！」と叫ぶのもありました。

すると、一つの利口な林檎が心配さうに云ひました。

「兄さん。なるほど兄さんは、お日様と同じ位真赤で大きく、美事です。けれど何となくお日様には、光があるやうですが、大丈夫でせうか。」と、恐る恐る云ふのでした。

「光か。はは、い、い、い」兄さんは大きな聲で笑ひました。「光は、あの海に這入れば自と出るものと思ふよ。まア考へてごらん。魚さへ跳ね上ると、さうつと光るぢやないか。」と云ひました。

林檎は成程と思ひました。

「さあ、僕はもう出かけよう、遅くならない内に。皆、永い間仲よく遊んでくれて有難う。明日にでもお日様になつてこの上を通る時は、聲をかけるからねえ。さよなら。元氣でね」

と叫びました。

林檎一同も聲を合せて「さよなら。」「ばんざい。」「ご元氣で！」と叫びました。

兄さん林檎が身體一杯力をこめて身を振りますと

見ると、そこに一つの胡瓜が、真蒼な顔をして、ぽかんと浮いてゐます。

「やあ、これは胡瓜さん。僕はね、今お日様にならうと思つて、ずつと海に向ふへ行くところですよ」

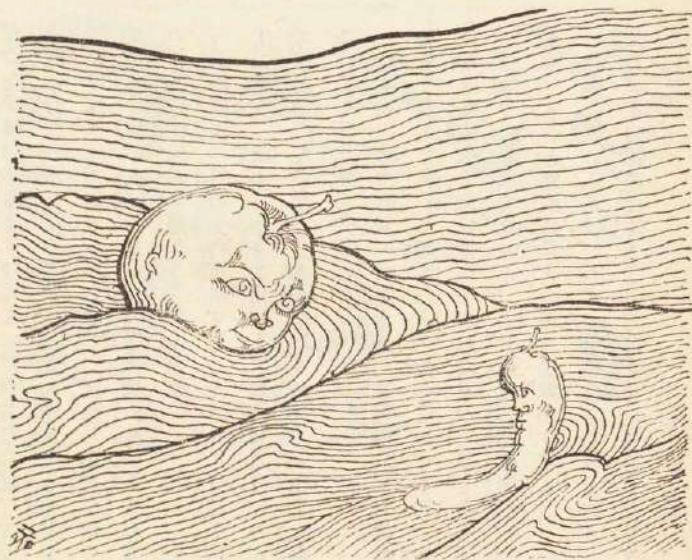
「ほう。さうですか。實は私一人で寂しくて困つてゐるんですが、一緒にお伴させてくれませんか。」

「ふッ、君が、君がお日様になりに一緒に行くんだつて。そりや君、可笑しいよ。お日様は僕みたいに真赤で、まんまるでなきやア。」林檎はぶつさら棒にさう云ひました。すると胡瓜が、

「そりや、さうです。私なんぞとてもお日様になるなんて望みはありませんよ。けどねえ、どうでせう、私は私でお月様にはなれさうな氣がするんですが。」

すると林檎は、しげ／＼と胡瓜を眺めてゐましたが、急に手を叩いて、

「そりやい、考へだ。お月様は青くて、君みたいな形のもある。ひよつとしたら、なれるかも知れない。」



九二
ざわ／＼と葉鳴りがして、ぽとん！と丘の芝生へ落ちました。

「さよなら！」さう叫びながら兄さん林檎は坂道へ海の方へ矢のやうにころがつて行きました。

「お大事に！」「さよなら。」「あ、とう／＼見えなくなつた。」「けれど、きつと明朝は兄さんのお日様が出るんだ。」「うれしいなア。」

木に残つた林檎はさ／＼やき合ひました。

さて無事に海へころげ込んだ林檎は、お日様の出る東へ東へと流れて行きました。

「なか／＼遠さうだなア。だがあそこに行けば仲間のお日様がたんとゐるぞ。楽しみだなア、僕の順番は一體いつ頃になるだらう。」林檎はそんな事を考へながら、東へ！東へ！と一生懸命です。

「おや、林檎さん。どちらへ。」

寂しさうな、元氣のない聲です。林檎が振り返つて

世界各國のあいさつ仕方



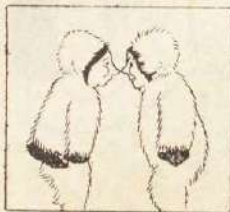
英国人あくしゆする



フランス人だつこする



パイプをやりとり
アメリカインディアン



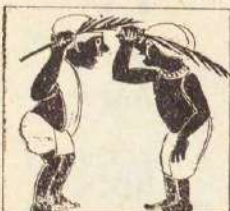
鼻をコツツリ、ラブラドル



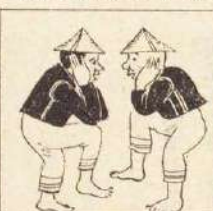
胸に手を置くアラビヤ人



唇にキスするムール人



セイロン人しゆろをふりあげ



フィリピン片足あげて



支那の人握手を合せる



南洋土人鼻をつつ



アフリカ土人握手を合せる



ドイツ人顔むく

「ちや一緒に出かけようか。」
胡瓜は大變よろこびました。そして二人は希望を持つて、東へ東へと行きました。

木に残つてゐる林檎は、毎朝々々、
『あーい。弟達！』と聲をかけて呉れる兄さんのお日様を楽しみにして待つてゐます。けれど、幾ら経つても、そんな事はありませんでした。

ところがある日、真白な海鳥が手紙を口にくわへて、この丘の上の林檎の木を訪れました。

『兄さんから手紙が来た！誰か！叫びました。』
『読んで呉れ。大聲で読んで呉れ！』
そこで、一つの林檎が手紙の封を切りました。

『僕は君達と別れてから、一生懸命に海の向ふの方へ泳いで行つたが、いくら行つてもいくら行つてもお日様のゐる所には出られなかつた。途中でお月様志願の胡瓜と一緒に、いろんな苦勞をしたけど駄目

だつた。諦めるより外はない。何故ならば、もう僕達の身體は冷えて切つて、このまゝ一日でも旅をつづければ死んでしまふから。で、残念だが思ひ切つて、ある島に上陸した。この島には人は一人もゐない。僕は此處で暮すことにした。

胡瓜は僕の傍の土の中にもぐつた。今に又墓を出すだらう。僕からも芽が出、大きな木になり、やがては君達のやうな大きな可愛い、林檎の子供を大勢もつことが出来るだらう。

終りに一筆つけ加へて置くが、金輪際、お日様にならうなんて考へを起すひとの起らないやうに、君達初め友達にも云ひ傳へて呉れたまへ。さよなら。

二伸、此處から見ると、お日様は君達の所からよりも、もつと立派に見えるやうな氣がするよ。』
林檎は樂しみがはづれて、がっかりしました。が、又兄さんの無事な事もよろこばずにはゐられませんでした。

(を は り)



白鳥姫物語

高橋里江

岩岡とも枝畫

九六

一、魔の空地

むかしある所に、一人の百姓が住んでゐました。百姓の家には、三人の男の子がりました。ピーターといふのが一番年上の兄さんで、次がボール、一番弟の名をエスピンと云ひました。兄さんのピーターとボールは、大變よく似た利巧者の兄弟で、よろこんで、いろ／＼な事を見たり聞

いたりしました。また、さも面白さうに笑つたり、遊んだりもしました。そして、お父さんを手傳つて畑もたがやせば、種も播くし、刈り入れも、稲こきもするといふ風でしたから、お父さんの御氣に入りであつた事は云ふまでもありません。併し、三番目のエスピンは、仕方のない、のん氣屋さんで、何にも氣に留めた事もないし、第一少しも働かうともしませんでした。そればかりか、一言も

口をきいた事がありません。ねぼけた人のやうな顔をして、フラ／＼フラ／＼歩いて居るか、ごろりと爐の邊へねそべつて、灰でも掻き廻すのが關の山でした。で、お父さんも兄さん達も、あきれて終つて『灰掻きエスピン』といふ名をつけて、誰も對手になりませんでした。

この百姓の持つて居た農場は、穀物のよく實る廣い畑や、緑の牧場に取圍まれた、立派なものでありました。併し、不思議な事には、この農場の真中に、大きな石塊や、瓦かけ等のころがつた空地があつていろ／＼な無駄草が一面に生え茂つて居ました。

エスピンは、此處が一番好きで、毎日のやうにやつて來ては、ごろりと横になつて、大空や、雲の行來を眺めたり、うたゝ寝をして夢を見たりして居ました。けれども、賢い、働きの兄さん達は、この廣い地所を、何も造らずに空けて置くのを、つくづくもつたない事だと思つて、お父さんに、畑にし

たいから、やらして下さいと頼みました。

『お父さん、さつと此處は、一番いい畑になりますよ！』

『さうか、やつて見ろ。此處はな、昔から魔の空地だといふので、誰も手をつけずに放つて置いた所だ併し、今時、そんな馬鹿げた事を、氣にする者はないからな』

お父さんは、早速ゆるして呉れました。

其處で、ピーターとボールの兄弟は、心を合せて一生懸命に仕事にかゝりました。ごろた石を、みんな一所に集めて積み上げました。そして、土を掘り返して、やわらかいうねを造りました。

新らしくたがやした畑に、兄弟は麥を播いて見ました。麥の芽は、ニョキ／＼と、勢よく出て來て、冬中、雪にもめげずに、青々として居ましたが、春になると、忽ち、驚く程丈ものび、たくさんの穂が出て來て、誰も彼も、こんなによく出來た麥は見た

九七

事がないといふ位になりました。

全く！ 六月二十四日の夏至の日までに、こんなによく實つた畑も、麥も、あらうとは思はれませんでした。だが、かわいさうな事には、兄弟の喜びがその日の夜中に、たつた一晚の中にかき消されてしまひました。夏至の日の夜中に、何事が起つたのでせう。夜が明けて見ると、黄金色に實つてゐた麥の穂も、莖も葉も、めちやく／＼に倒れて、丁度、なにか、丁寧に踏みつけて歩いた様に、べちやんこになつて、土にまみれて居ます。これでは、一粒の麥だつてとれる筈がありませんでした。誰がしたのか、何んな事をしたのか、誰も見當さへつきませんでした。二人でまた、たがやし直して、踏みつけられた麥は、牛にでも喰べさせるよりほか仕方ありませんでした。

翌る年も、春になると、麥はめき／＼育つて、この畑よりも、よく實りました。が、また去年と同じ

じ結果になつてしまひました。六月二十四日、夏至の日には、九分通り實が入つて、兄弟は、近い中に刈り入れをやらうと思つてゐました。それなのに、その日の晩、一晚の中に、麥畑は、べちやんこに踏み荒らされて、結局一文の収入をも手にする事が出来ませんでした。

そこで、二人の兄弟は、また仕方なしに、土を掘返して畑にしました。さすがに、冬中は、そのまゝにして置きましたが、春になつて、二人は、麻の實を播いて見ました。麻も、また、麥の様に、前例のない程見事に成長して、夏至近くには、花も咲くし實も結んだので、兄弟は、顔を見合せて、うれしうにほ／＼あみあみしましたが、こんども、前の年の事を、忘れる筈はありませんでした。夏至の日になると、二人は相談して、誰か一人、夜通し、寝ずの番をして去年や一昨年の様な、ばか／＼しい目に會はない様にしようといふ事になりました。

「ちや、僕がやらう！」
兄さんのピーターが、寝ずの番の役を引き受けました。

二、寝ずの番

ピーターは、すばしい、強い子でした。

「さあ、どんな奴が来て、畑を踏みつけやがるか、今年こそ、ふんづかまへて、やらなくつちや！」

さう云ひ乍ら、大きな棍棒をさげて、魔の空地へやつて来ました。夜になると、兄弟が、最初の年に掘起して、高く積み上げて置いた、あの石塚の側へ坐り込んで、真夜中の来るのを待つて居ました。美しい晩でした。静かに晴れ渡つた空は、すき透る様に澄んで、風一つない月夜でした。

ピーターは、眠まい／＼として眼を見張つて居ましたが、いつの間にか、うと／＼と、氣が遠くなつて、ぐつすり寝込んでしまひました。

夜中近くなつて、ピーターは驚いて目を覺しました。遙かな空をゆすつて、何かと轉がるやうな轟きが聞え、恐ろしい呻き聲が、近づいて來たのです。見ると、いつの間にか、空一面墨を流した様に眞黒になつて居ました。ピカッ！と、稲光りがしたかと思ふと、黒い雲が破れて、その隙間から、赤い光がさして、龍の様なものが見えるではありませんか！驚いて、ピーターは、ガタ／＼震え乍ら、家の方へ一目散に逃げ込んで終ひました。

夜が明けてから、見ますと、それはいい天氣で、夜中に嵐なんかあつた容子は少しもないに係らず麻の木は、一本残らず倒され、切角實つた麻の實はめちやく／＼に踏みにじられて、畑は、跡方もない程荒されて居ました。

みんな、この、わけの分らない出來事に惱まされて、恐ろしがつたり、腹を立てたりしました。なかでも、次の弟のポールは、腹を立て、兄さんの不

甲斐なさを詰りました。

『ばかげてらあ！ どんな奴だか、正體も見届けな
いで逃げ出すなんて。毎年々々、三年も續けて、畑
を荒されてるんぢやないか』

『口だけなら、誰だつて云へるよ、そんな事。それ
程威張るんなら、來年は、自分がやればいいや』

『いゝとも、きつと僕が、その化物をつかまへて見
せら！』

で、翌る年には、兄弟は、畑に蕎麥を造つて、夏
至の日の來るのを待つて居ました。

夜になると、ボールは、畑へ行つて、兄さんと同
じ石の塚のそばへ坐つて、一生けんめいに見張つて
居ましたが、間もなく、ぐつすり寝込んでしまひま
した。そして、夜中に驚いて眼を覺した時、ビータ
アが聞いたのと同じ恐ろしい轟きが聞え、眞黒な空
が破れて、龍が、次第に近づいて來ました。それで
もボールは、頑張つて居ましたが、龍がいよいよ近



く進んで來た時、耳が破裂する程、烈しい響が起つ
て、地面が地震の時の様に揺れ初め、見る／＼中に
魔の空地の蕎麥畑は、まるで、風に弄ばれる一枚
の木の葉の様に、波打ち出しました。ボールは、今
少しで氣絶して終ふ所でした。夢中で、ガタ／＼震
えながら、走り出して、家の中へ飛び込むで、初め
て、ほつと、うれしさうな溜呼吸をもらしました。
朝になつて見ると、蕎麥は、一本残らず倒れて、
畑は、まるで、テニスコート見たいに、平べつたく

踏みつけられて居るのでした。

ピーターも、ボールも、今度こそ、閉口して終ひました。そして、これ以上、無駄骨を折つても仕方がないと思つたので、二度と、畑へ来させませんでした。今では、なまけ者のエスビンの外、この畑の事を、氣にとめる者もなくなつて終ひました。エスビンは前よりも、此處がすきになつて、毎日の様にやつて来ては寝ころがつて、また、雲を眺めたり、夢を見たりして居ました。

春になると、捨てられた畑には、いろ／＼な雑草や、灌木が生ひ茂つて、咲いたり實つたりしました。眞白なアネモネの花、紫色の三色スミレ、眞紅な虞美人草——中でも石南が、昔の魔の空地の時と同じに、一面にはびこり出しました。エスビンに取つて、此處程楽しい、好きな所はありませんでした。その中、忽ち、一年の月日が流れて、また六月二十四日の夏至になりました。夜になると、エスビンは

轟を聞きました。その音は、だん／＼大きくなつて、次第に近づいて来ました。見ると、空一面に大きな黒幕を張つた様に、眞暗になつて、突然、その黒い幕が引き裂く様に、破れたかと思ふと、その破れ目から、眞赤な光が流れ出し、紫色の火の粉が飛んで、大きな龍が、飛び出して来ました。龍の頭は三つ、尾も、長いのが三本つゝいて居ました。龍が近づくと、嵐はますますはげしくなつて、つむじ風が、えらい勢で、畑を襲ひ、畑をつゝんでしまひました。畑の草や木は、音を立てゝなぎ倒され木の葉は雨の様に散らばつて、見る／＼中に、畑は何かに踏みつけられたやうに、べちやんこになつてしまひました。樫の木、太い大きな幹も、難破船の帆柱のやうに、左右に揺れ初め、葉は散り、枝ははたみいて、エスビンを、今にもふり落さうとしました。エスビンは、夢中で、太い枝にしがみついて居ました。が、忘れた様に風は止んで、空は元の

誰にも見つかからないやうに、そうつと家を抜け出して、畑へやつて来ました。

毎年々々、薄氣味の悪い事をやりに来る、不思議な奴は、一體、何んだらう。獸か？ 幽霊か？ それとも、仙人かしら？ なんとかしてその正體を見届けたいと思つたので、エスビンは、朝から寝通しに寝て、日が暮れてから起き出して来たのでした。積みあげた石塊のそばに、一本の樫の樹がありました。何百年も経つた古木で、丁度地境にあるので標的に、兄さん達も、切り倒さずに置いたのです。すぐ根元には、大きな石が、地面から頭を出して居ました。そして、他の石ころは、兄のピーターとボールが、樫の木の根元へ、きれいに積みあげたので、樫の木は、まるで、石の塚の真中から生へて居るやうに見えました。エスビンは、樫の木へよじ登つて、靜かに夜の更るのを待つて居ました。間もなく、エスビンは、遠くの方で、雷の様な

やうに晴れて、明るくなり、三つ頭の龍の代りに、三匹の大きな白鳥が、自分の方へ飛んで来るのが見えました。近づいたのを、よく見ると、それは、鳥ではなくて、三人の、美しい人間の姿をした娘達でした。三人とも、羽で造らへた、眞白な着物を着て大きな大きな羽根を擴げ、三本の、美しい尾を長く後ろへたらしめて居るのでした。娘達は、エスビンの居る、樫の根本へ舞ひ下りました。大きな羽根を縮め、羽の着物を脱ぎ、根本の石の上へ、丁度、蜘蛛の巢のやうなボールを脱ぎすてると、三人そろつて畑の真中へはしり出て行つて、其處で、仲よく手をつなぎ、足拍子を揃へて、踊り初めました。いつまでも、いつまでも、三人は輪になつて踊つてゐました。歌ふ時は、三人一緒に聲をそろへて、不思議な歌を唱ふのでした。三人とも、眞白な、そろひの着物を着て、頭には、黄金色の冠が、輝いて居ました。

(つづく)



やるぞ、やらぬぞ

西川 喜平
寺内萬治郎畫

鎌倉を旅立つて、東國の田舎へ行く二人の武士が
ありました。

強い者勝の時代ですから、二人共往來を威張りち
らして、やつて來たのは、武藏の國入間の里であり
ました。

この里を流れる、入間川の岸へ來て見ますと、橋
もなければ、渡し船もありませんでした。

そして水の流れは速いし、底の深い、浅いもわか
らないので、さすが二人の武士も川岸に立ちすく

でしまひました。

「これは困つたな、元へ戻るも残念、と云つて先へ
行くことも出來ぬわい。」

「川上か、川下へ行くにも、もう日暮れになつた。
はやくこの里の者でも來ればよいな。」と、二人の武
士は話し合つてゐる所へ、向ふから一人の男が、ブ
ラ／＼やつて來るのを見つけた。

「オ、丁度よい所へ、この里の者らしい奴が來た。
案内をさせようではないか、ヤイ／＼、男侍て／＼

この川を渡る案内をせよ。」

「案内を云ひつけるのぢや、はやく來い／＼。」と、
自分の家でも呼ぶやうに、横柄に云ひました。

その男は、ニコ／＼笑ひながら、

「私は案内をいたしません。」と云ひました。二人の
武士は眞赤になつて、一人は刀の柄に手をかけ、
「あのれ武士に向つて案内をせぬとは、憎い奴だ、
そこ動くな。」と怒鳴りました。

男は驚くやうすもなく、

「案内はいたしません、私の後についてゐいでなさ
るな。」と云つて、岸から川へ下りて、水の中へザブ
／＼と入りました。この體を見て、今迄刀をヒネク
リ威張つてゐた武士はあわて、

「コレ／＼、後について來るななど、意地の悪い
ことを云はずに、つれて行け。」と云ひますと、もう
一人の武士も、

「さういはずと案内をしてくれ、頼む／＼。」と、泣

き聲を出して云ひました。

川へ入つた男は、振り返つて、

「あなた方は他國の方で、知らぬのも無理はない、
この里の者は、入間言葉と云つて、よい事をわるい

と云ひ、行く事を行かぬと云ひます。案内をして上
げるのを、案内をせぬと云つたのも、入間言葉です
……サア／＼私についてゐいでになるな。」と云つて

ズン／＼歩き出しました。二人の武士は、喜んで、
「アハ、ハ、ハ、イヤ入間言葉とは始めて聞いた、
面白い／＼、それでヤット安心した、有がたい／＼

……イヤ有がたくないぞ。」と云ひながら、男の後に
ついて川へ入りました。

水の流れは速いが、底は浅いので、二人の武士は
無駄口をさへながら渡りました。

「エーこの川は、思つたより、浅くないので、渡り
にくいぞ。」

「こんな川なら、案内の者など、どうでもよくはな

「ぞ。」

「ヤイ男、おのれはよく案内をしたによつて、我等が大名になつたらば、召し抱へてはやらぬぞ。」と威張り出しました。

「召し抱へて下さるな。」と男が云ひますと、二人の武士は圖に乗つて、

「面白い、おのれは土百姓の、うぢ虫のやうな奴じやな。」とからかひますと、男は平氣な顔で、

「うぢ虫のやうな者でございます。」

「うぢ虫と云はれて、喜んでゐるぞ。」

「アハ、、、、なんでも此方の云ふとほりじや、おのれは牛馬、イヤ犬同然な奴ぢやな。」

「犬同然な者でございます。」

「面白い奴ぢや、よい慰みぢや、モットからかつてやれ。」

「おのれは大馬鹿の畜生。」と云ひかけた時、一人の武士は、足を踏みすべらして、水の中へ轉びました。

「けく。」と聞いて顔を和らげ、



「さうだ入間言葉か、やるぞく。」
男はお辭儀をしながら、

「アツ大變く。」と起き上りましたが、衣服もビツシヨリと濡れました。

「ヤイ男、待つてくれく、イヤ待つてくれるな、冷たくてたまらぬ、この濡れた袴を持つてくれるな」と云つて、袴を脱いで男に渡しました。

「ついでにこの荷物も持つてくれるな。」と荷物を渡し、もう一人の武士も、

「だんく流れが急になつて、身共も足をすくわれさうだ、ヤイこの荷物を持たせてやらぬぞ、これは大切な物が入つてゐぬぞ、おのれにシツカリと預けぬぞ。」と云ひながら荷物を渡しますと、男は受け取つて、

「二つのお荷物はたしかにあづかりませぬ、いたゞきます。」

「ナニいたゞきますとは、」と一人の武士が、顔の色を變へますと、一人は、

「アハ、、、、入間言葉だぞ、心配するな、いたゞ

「いたゞきます、いたゞきます。」

二人の武士は聲を揃へて、

「やるぞく。」

「いたゞきます、有がたくいたゞきます。」と男は云ふなり、深い所へザブく入り、グンく歩行いて岸へ駆け上り、

「この荷物と袴は案内賃に貰つてやるぞ。」と怒鳴りました。

二人の武士は、これを聞いて「アツ」と驚きましたが、續いて深みへ入つたので、急に渡れません。二人で流されまいと手を引き合ひながら

「ヤイく男、無法のことを云ふな、やると云つたは入間言葉だぞ、やらぬぞく。」と、眞赤になつて云ひますと、男は、

「ワツハ、、、、入間の里はもう向ふ岸だぞ、大馬鹿の間抜け武士奴。」と云ひすて、ドンく逃げて行つてしまひました。(をはり)

頼光の四天王

——大江山酒頭童子退治の巻——

川崎 春二

羽鳥 古山 畫



一

丹波の大江山に、酒頭童子といふ悪者どもがこもつてゐる——と言出されたのは、何時のころからでしたらうか、ともかく、その噂は一年々々と高くなつて來ました。「身の丈は、どれもこれも七八尺

もあるさうぢや。」
「頭は金色の髪でもぢや、／＼とうぶまり、眼は毒を満たした壺をのぞくやうに青く光つてゐると言ふではないか。」
「その上、酒をたらふく飲んでゐるせい、顔は紅葉に陽がてるやうに眞赤で、天狗のやうに鼻が高

いさうぢや」
「天狗の仲間だらうか」
「いや、天狗といふものは不淨なものは飲みも食ひもせぬさうぢやが、酒頭童子は人間の血潮を酒に交せて飲み、鳥や獸の肉を舌鼓打つて食ひ、狼のやうに骨をしやぶると言ふではないか」

「さうぢや、耳のあたりまで裂けた口のはたが、何時も不氣味な血で染つてをり、なまぐさい臭ひがしてゐると聞いた——」

「では、鬼の類かも知れない。」
「頭に角はないさうぢや。それに鬼な、裸體だらうに、そやつは獸の生皮をはいで着物にしてゐるさうぢや。」

「でも鬼のやうに強いさうぢやが——」
「いや、天狗のやうに早いといふではないか。」

「いや、越後の國の海べで生れた化物の一族ぢやといふ——」
「何にしても、其奴らの一族に殖えられてはたまらない。早く退治して貰はなくちや——」

「しかし、一目行き逢つたら最後大抵の者は氣絶してしまふといふのだから、始末が悪い——」
「それでは頼光さまでも駄目だらうか——」
「何の、頼光さまなら保昌殿や四天王達がついてゐるから大丈夫だらう。」

今では都の人々でさへかうした噂で持ち切りといつた有様でした。間もなく、酒頭童子の怖ろしい姿が京の街にまで、あらはれると言はれるやうになりました。
「上加茂の酒造りの家で極上等の酒を七樽も酒頭童子に奪られた」
「西陣の金持の娘が、一晩に二人までもさらはれた。」
「昨夜はまた伴少將殿の姫君が酒

頭童子に盗まれたさうぢや——」
酒頭童子の噂の高いのをいゝことに、悪者たちがそのやうな悪事を働くのか、本當に酒頭童子が出て來るやうになつたのか、人々は先年波邊綱が退治した鬼の出た時よりも怖ろしがりました。

二

それほどに騒がしくならない前朝廷では丹波の國の目代藤原安友に「さう／＼使者をやつて、はやく、大江山の怪物どもを退治するやうにと命令したのでした。」
けれども安友の手では、何うしても征伐することが出来ませんでした。

「——幾ら軍兵を繰り出して山を

驅り立てゝも、酒頭童子の行動が風のやうにすばやくて、今だにその人数さへはつきりせず、榎家も突きとめることが出来ません。怪物どもに出會つた者もありますが、皆この魔物の毒氣にあたつて氣絶してしまひました。さうしてゐる中にも、方々の村里にあらはれて美しい娘をさらつたり、造つて置く酒を奪つたりするので、國中の人民が可哀想なほど怖ろしがつてをります。丹波丹後の兩國で、酒頭童子の毒氣にあたつたもの、數は四百人ほどにも及び、その中の半數は生命をおとしてしまひました。この上は何卒速に、然るべき將軍を討手としておつかはし下さるやうお願い申しあげます」

とうとう安友は、早馬でかういふ訴へを寄來すやうになりました。その時にはもう、京都の朝廷の役人達の考は、『頼光を差し向ける外はない』と決つてをりました。朝廷ではさつそく頼光を呼んで行つて、大江山の酒頭童子を退治して、人民の難儀をのぞいて貰ひたい——と命を下しました。頼光は、『私が一度大命をお受けいたしました以上は、たとへば鬼神の群にもせよ、必ず討ち亡してまゐりますから、御安心下さるやう……』と、凛々しく引きうけて退りました。頼光は風から、大江山の酒頭童子退治は、つまりは自分が言付

二一〇
かるであらうと覺悟してゐたので、もはや、それに對する手段はすつかり考へてゐたのでした。頼光は保昌と四天王と、長男の頼國とを自分の居間に呼寄せて、ひそかに討手としての計畧を聞かせました。

それは『酒頭童子は魔物のやうな化物のやうな者であるさうだから、大勢の軍兵で押寄せては姿をくらましてしまふであらう。それよりは却つて、自分と保昌と四天王と六人だけでそつと大江山に紛れ込んで、怪物の油斷につけ入つて討ち取ることにいたす。吾々なれば酒頭童子の毒氣になど、あたるやうなことはよもやあるまいと思ふ。それから、頼國は俺の名代

となつて軍勢をあつめ、ゆつくり丹波の國府まで來て貰ひたい。それまでには多分、吾々は怪物どもを討ち平げてゐるであらうが、たとひ未だ退治が出来ないにせよ、吾々が生きてゐる間は、國府より先に軍兵を進めることは相成らぬ——』と言ふことでした。

これを聞いた保昌や四天王達は大喜びに勇み立ちました。頼國は不平でたまりません。一旦、言ひ出してから事をあげるやうな父頼光でないことは十分に承知してゐましたが、それでも黙つてゐることが出来ませんでした。『それでは、この頼國は案山子の大將のやうに、戦ふあてもない軍勢をたゞ率ゐて行くだけでござい

ますか——』
『左様ぢや、表向、頼光と名乗つて源氏の軍勢を率ゐる者は其方の外にはない筈ぢや。その上、若い其方はこれから色々な難儀にも合戦にも出會はねばならぬ。心得て置くことである——』
頼光は、やさしく頼國を訓へるとしたのでした。

三
その頃では度々の功勢によつて藤原保昌は右京權大夫、渡邊綱は瀧口内舍人、卜部季武は勘解由判官、碓井頼光は鞍負尉、坂田金時は主馬佑といふ官位を與へられてゐました。
このやうな官位をもつた武士た

ちが、たつた一人の郎黨もつれずに頼光に従つて、その夜の中にそつと都から脱け出したのでした。『頼光さまに、いよいよ酒頭童子退治の勅命が下つたさうぢや』かう言ふ噂が京の街にひろがつた頃、それ／＼策を奪ひ、金剛杖をついた六人の山伏が丹波路を急いでをりました。
『今日は攝津の源氏がくり込んで來た——』
『明日は大和の軍勢が来るさうだ』
『今度は餘程、頼光さまも用心深く準備をすると思えて、なか／＼繰り出して行かない様子ぢや』
『久しぶりで頼光さまの軍勢を見られる——』

「頼光さまの武者ぶりを早く見た
もののぢや——」
都の人々がかう噂をし合つてゐ
る頃、彼の六人の山伏たちは丹波
と丹後との國境、大江山の山つ
きを峯から谷へ、谷から峯へと、
さまよひ歩いてをりました。

六人の山伏姿、それは言ふまで
もなく頼光と、その五人の家來達
とでありました。

「何といふ険しい道ぢや——」

「これでも道か——」

「これはあやふい谷ぢや——」

「全く、はての知れない山ぢや——」

一行の中から、よくかうした驚
嘆の言葉を取りかはされました。

しかし、碓井貞光と坂田金時と

は、山の深いことにも、山道のひ
どいのにも、谷の危ないのにも驚
かず、何時もにこりと、恰度平
地を行くやうに軽々と渡り歩きま
した。

「卜部殿は、山道よりも平地を歩
く方が樂のやうに見える。すこし
歩をゆるめて進じ申さうか。」

「いや、なに、拙者も碓井殿のや
うに信濃の山中で育つてをれば、
決してこれしきの山道に難儀な顔

は見せませぬ。——しかし、その、
歩の速さは貴殿の心まかせて一寸
も不満はござらぬ。」

「さすがの渡邊殿も、山路の足は
主君や保昌殿と大差ないやうにお
見受け申す。拙者の育つた箱根足
柄には、御承知の様に、これより

樂な山道といふはござりませぬ」

「何の、この源五は幾度となく箱
根足柄を越え申した。なあ坂田殿
度々お聞かせしたことぢやが、拙
者は何時も、あそこの險阻を半日
で樂々と通つたものでござる。」

「この保昌は年齢の故か、正直の
ところ、平地の方が樂ぢや。しか
し、碓井殿や坂田殿が山で弱つた
とあつては、山の鳥や獸が笑ひま
せうぞ。」

「金時や貞光のその自慢顔を、碓
井峠や箱根足柄の熊や猪が見たな
らざぞ笑ふであらう。猿も、狼も
狐も狸もをかしがらう——」

先頭は碓井貞光、二番卜部季武、
頼光、保昌、渡邊綱、後衛坂田金
時の順序の一行六人の間に、時々

かうした戲談が取りかはされまし
た。

四

頼光等主従六人は、ある夜は岩
と岩との間にねむり、ある夜は峰
の松の下に雨をさけたりして、苦



勞をかさねながら、山奥を幾日と
なく探しまはりました。

ある朝、岩石におぼはれた險しい
山の腰を廻つて行つた時、先頭の
貞光が、

「し、しばらく！」

と一行を制しながら、びたりと
身を伏せてしまひました。

「何うしたのぢや！」

「何を見たのぢや！」

一行は、貞光にな
らつて身を伏せなが
ら、小聲でたづねま
した。

「あれを御覽下され
！」

貞光が指す方をのぞ
くと、それは、まさ
に不思議な光景でし
た。——清い谷川の
流が岩の根を洗つて
ゐるところに、雪の
やうに白い美しい若

い女が二人、ちやぶく水玉を飛ばしながら衣裳をすいいでました。——時々すゝぎの手を止めて、じつと考込んでゐるその様は、何處から見ても幸福の身の上とは思はれませんでした。

一行はしばらく様子をうかがつた上、静かに女どもに近づいて参りました。

女達は驚いて逃げ出すかと思ひの外、却つてすがり付かんばかりに駆け寄つて來ました。

「おゝ、修験者さま達——」

「お助け下さりませ——」

四天王達は、かつて一條堀川で渡邊綱が出會つた鬼の例もあるので、太刀の柄に手をかけながら、「控へろ！」と叱りつけました。

「酒頼童子にさらはれて参つた者でござります——」

「どうぞお助けをねがひます」

女どもは、かう言つてそこに泣き伏してしまひました。

頼光は、たしかに不仕合せな女達であると信じました。それと察した保昌は、

「静にいたせ！ これなるは源氏の大將頼光公でゐらせられる！ 今度、朝廷の詔をうけて酒頼童子退治に参られたのぢや。」

これを聞くと女どもは頼光の前に跪いて、

「頼光さま——」

「有難い頼光さま——」

と、嬉し泣きに泣きました。

「必とお助けてあげる！ もう哀し

くさせました。」

「お頼み申す——……」

その山伏は一番年長の保昌でした。

と、岩屋の中の騒々しさがひたと静まり、三四人の怪物童子が大

きな鐵の棒や、長い劔を持つたりして現立れました。

「なにやつ？ 名のれ！ 名のれ！ 打ちころす！」

人間とも化物ともつかない言葉、酒や生肉に酔ひたぐれたその顔か

たち、毛皮を着た圖體、それは聞いたより以上に怖ろしげでした。

「身共、越前から伯耆に越える山伏修業の者でござる。道を踏み迷つて難澁いたす。しばらく休ま

むことはない。——就いては、酒頼童子の様子をくはしく話して貰ひたい。」

頼光はかう言つて女達を慰め、

「いゝ」と酒頼童子らの様子を尋ね、その棲家に討入る時機を相談したりしました。

女達の中、一人は近江の坂本の長者の娘で、一人は丹後の宮津のある金持の商人の娘、どちらも賢い女でしたから、頼光等の計畧をぬかりなく手傳ふことになりました。

手筈がきまると、頼光等は向ふの峯の木立の中にかくれ、女どもは、何氣ない風をよそつて斷崖道を上つて歸りました。

五

頼光らの隠れた峯からは酒頼童子の岩屋がちら／＼見えしました。

やがて、その松の木に白い布が一筋見え出しました。——酒頼童子たちが酒宴をはじめたといふ知らせです。

しばらくすると、白い布がもう一筋かけられました。——酒頼童子等が生命とたのむ弩弓の弦を無事に切つたといふ知らせです。

間もなく六人の山伏が、その岩屋の前にあらはれました。——そのあたりに、いろ／＼の獸の骨が山のやうに積み捨てられてありました。或は、人間の骨も交つてをつたか知れません。——岩屋の入口からは、腥い風がさつと吹

出して、頼光等の氣持をひどく悪くさせました。

「お頼み申す——……」

その山伏は一番年長の保昌でした。

と、岩屋の中の騒々しさがひたと静まり、三四人の怪物童子が大

きな鐵の棒や、長い劔を持つたりして現立れました。

「なにやつ？ 名のれ！ 名のれ！ 打ちころす！」

人間とも化物ともつかない言葉、酒や生肉に酔ひたぐれたその顔か

たち、毛皮を着た圖體、それは聞いたより以上に怖ろしげでした。

「身共、越前から伯耆に越える山伏修業の者でござる。道を踏み迷つて難澁いたす。しばらく休ま

むことはない。——就いては、酒頼童子の様子をくはしく話して貰ひたい。」

頼光はかう言つて女達を慰め、

「いゝ」と酒頼童子らの様子を尋ね、その棲家に討入る時機を相談したりしました。

女達の中、一人は近江の坂本の長者の娘で、一人は丹後の宮津のある金持の商人の娘、どちらも賢い女でしたから、頼光等の計畧をぬかりなく手傳ふことになりました。

手筈がきまると、頼光等は向ふの峯の木立の中にかくれ、女どもは、何氣ない風をよそつて斷崖道を上つて歸りました。

せていたくたく存ずる。——せめて、伯耆へ罷り越す道なりとお教へが願ひたい……」

けれども酒頼童子等は、保昌の言葉には耳もかかず、今にも討つてかゝりさうでした。それにもう怪物ども全部が劔や鐵の棒を握つて、じり／＼詰寄つて來ました。

而し頼光等は、びくともしませんでした。彼等の金剛杖は、一振りふれば尖端が鞘走つて、黑鐵をも突貫す手槍となるのでした。

この時、前に谷川で洗濯してゐた女の一人が、怪童の頭目らしい者のところに駆け寄つて、何か小聲でさゝやきました。と、その怪童は、他の怪童らに命令して、自分の後に退らせました。

「山伏達 よろしい！ やすめ！」
次いで、彼は他の怪童子らに何
事かをさしやき傳へました。それ
から、
「杖を外におけ！ そして、這入
れ」と頼光等を導きました。



「これは辱けない——」と言ひな
がら、保昌は金剛杖を手放しかね
てゐました。

すると、頼光が真先にそれを放
したので、皆それに習ひました。
岩屋の中は随分廣く、可也立派

でした。大
廣間には、
酒や肴や生
肉などが山
のやうに積
まれてあり
お酌をして
ゐたものと
見えて、二
三十人ばか
りの女達が
その隅に

ふるへてをりました。

六

「山伏達、その笈の中には、よい
酒、よい着物があるさうだ。やす
ませる代りに、その酒と着物を出
すがよい——」

酒頭童子の頭目はせいら笑ひな
がら、山伏達を計畧に陥めたつも
りで言ひました。

それは、前に一人の女が——あ
の山伏等は強さうだから普通に討
ち合つては損ですよ。岩屋の中に
入れてから、騙して討ち、笈の中
のよい酒や、美しい衣裳を取つて
下さい、と囁き教へたのでした。

「なる程、休ませていたごくお禮
として、この笈の中の酒や衣裳は



笈に頼光
の手がかゝ
つた時、五
人の手も同
時に、名々
の笈にかゝ
りました。
「ヤッ！」
と一聲、頼
光の氣合と
共に六人の
長刀が抜き

捨てた劔や鐵の棒を取らうとする
前に、頼光等は躍りかゝつて、忽
ち怪童子等をばたり／＼と斬り倒
しました。

酒頭童子の一族は恰度十人とし
た。頼光は五人の來に、怪童子の
首を二つ宛笈の中に入れて持歸ら
せることにしました。

今まで怖れおのゝいてゐた女達
は、「源氏の太將頼光——」と聞い
て、手を合せて頼光達を伏し拜み
ました。

やがて、酒頭童子の首が京の六
條河原にかけてさらされた時、都
の人々は勿論、遠國の人々まで見
物に押しかけて、そのあたりは
毎日お祭りが續いてゐるやうであ
つたと言ひます。(をばり)

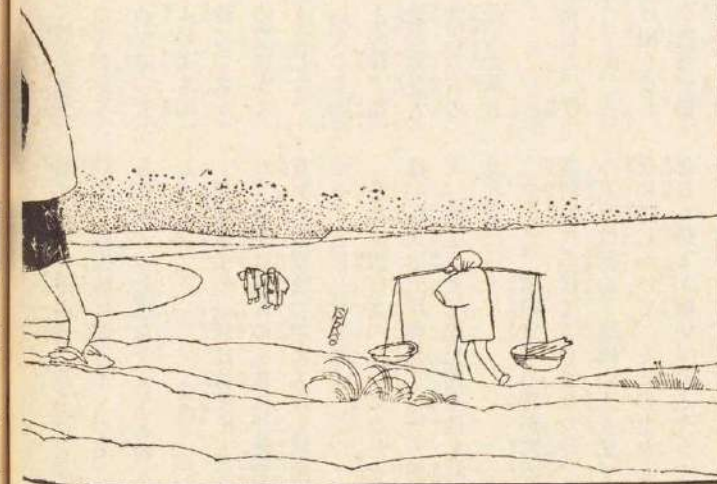
皆、差上げるでござらう——」
保昌はかう言ひながら頼光の顔
を見ました。四天王達も頼光に眼
をそゝぎました。頼光の眼は、五
人の家來たちに電光のやうに教へ
ました。

放たれました。
酒頭童子らは白刃を見ると、打
物業ではかなはぬと思つてか、一
様に笈のところへ駆け出しまし
た。而し、笈の弦は一つ残らず切
られてありました。彼等が、再び

沖の白帆

三木露風

海の上から風が吹く、
雪か霰か降りさうな
けふはさびしい空の色
沖に白帆が見えました。
こどもを負ふた娘兒は、
うたを謡ふて村に行く。
もうちき舟が、かへるだろ
濱へ出て、あの父を待つ。

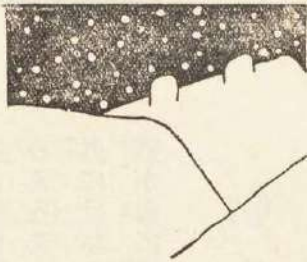


かへつた舟は大漁で
いくら風でも霰でも
濱はにぎやか人が出て
さかなを小舎に持つてゆく。
晩は、あかりをつけた下
みんなあつまり話する。
外にはひゆう／＼風の音
霰か雪に變つたぞ。



川上四郎畫

世界童話欄



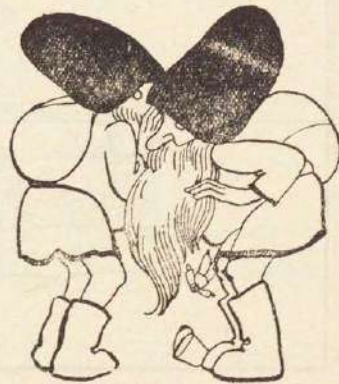
まてく小僧 (日本)

飛弾の國の山奥に、和尚さんが小僧と二人きりで住んでゐました。ある日の事、和尚さんは小僧を呼んで、

「お前、落着けだ、ちよツと隣り村まで使ひに行つて来ておくれ。」

と云ひました。『だつて和尚さん。あの隣村へゆく峠には、熊だの狼だのが出ると云ひますよ。ぼく厭だア！』

小僧さんはだいをこねました。『だからさ、要心にこのお守りをあげるよ。お前が途中で何か危ない目に出あつた時は、このお守りを掲げるがよい。』



中から髪をふりみだしたお婆さんがねつと顔をだして、

『いゝともね、さア上つてゆつくりお休み。』と云つて、小僧の草鞋を解いてやつたり、いろ／＼親切に世話をしました。

小僧は恐ろしさの餘り、身軀中が石のやうになつてしまひました。『さてはこれが噂に聞いた山姥だ。』

すると突然うしろの方から、



で、汗をかく／＼ながしながら山を昇りはじめました。その間に小僧は、ずいぶん遠くまで逃げる事が出来た。

もう此處で大丈夫と思つて振りかへて見ると、驚ろいた事には、山姥はいつの間にか山を乗り越えて、前にも増した恐ろしい顔をして追かけてきます。

『待て／＼小僧！』
その聲をきくと、小僧は慄えあがつて、動けなくなつてしまひました。一心に佛さんを念じながら残つたもう一枚のお守りを取りだし、ばつと山姥めがけて投げつけました。

すると見る／＼内に山姥と小僧の間には、大きな／＼河が出来上りました。茶色に濁つた水が、渦をまいて流れてゐます。

『ちえッ、またやられたか！』
山姥は地團圓をふんで、くやしがりながら、いきなり河の水に口



をつけて、ぐわ／＼と呑みはじめました。河の水は恐ろしい勢で山姥の腹の中へ流れこみました。一時は、河の底の石が見えるほど平あがつてしまひましたが、さすがの

山姥も、あとから／＼と流れてくる水にはどうしようもありませんでした。とう／＼しまひに、お腹の皮が大鼓のやうにふくらんで、パンチンと裂けてしまひました。山姥は、くやしさに小僧の方を睨みながら息が絶えました。

黄金の魚（ロシア）

事でお寺まで着くことが出来ました。『もう／＼お使に決して参りませう。』
小僧は、ドキ／＼する胸を押へながら云ひました。和尚さんはそれを聞いて、かんから／＼と笑ひました。

和尚さんはかう云つて、又、かんから／＼と笑ひました。

『家のお婆さんは、食物が無いと言つて、喧嘩り散らしてゐます。』
『お婆さん、安心して、お歸りなさい。おいしいパンを上げませう。』
そこで和尚さんは、家へ歸つて『どうだね、ばあさん、パンが出来たかね？』

自分、で、網を編んで、海へ行つて魚を取つて来る。『そして、唯それだけが、此の人達の収入だつたのです。』
或る日のこと、お婆さんは、いつものやうに海へ行つて、網を打ちました。引き上げようとするといま／＼に、覺えのない、程重くてなかく／＼年寄り／＼人の力では、上りさうにもない位でした。

『家のお婆さんは、食物が無いと言つて、喧嘩り散らしてゐます。』
『お婆さん、安心して、お歸りなさい。おいしいパンを上げませう。』
そこで和尚さんは、家へ歸つて『どうだね、ばあさん、パンが出来たかね？』

『家のお婆さんは、食物が無いと言つて、喧嘩り散らしてゐます。』
『お婆さん、安心して、お歸りなさい。おいしいパンを上げませう。』
そこで和尚さんは、家へ歸つて『どうだね、ばあさん、パンが出来たかね？』



もつと不思議なことには、その魚が、人間の様に口をきいて、
『お婆さん、私を助けて下さい。』
もとの海へ送して下さい。さうしたら、お婆さんの望は、どんなことでもかなへて上げます。』
と、いふのでした。

『私には、何んの望もない。にがしてやるから、早くお出で！』
さういつて、お婆さんが、金の魚を海へ送がしました。

お婆さんが歸つて来ると、待ち兼ねてゐたお婆あさんが、
『お婆さん、魚は取れたかい？』
家には、喰べる物が、もう、何んにもないんだよ！』
と、怒鳴りました。

『駄目だつたよ、金色の魚が、一匹かゝつただけさ、不思議な魚でね、なんでも望はかなへてやるから、逃がして呉れると頼むのさ、可哀想になつて、逃がして来たよ』
『へえ！』そして、何を望んで来たのさ、望まないよ。』

『家のお婆さんは、食物が無いと言つて、喧嘩り散らしてゐます。』
『お婆さん、安心して、お歸りなさい。おいしいパンを上げませう。』
そこで和尚さんは、家へ歸つて『どうだね、ばあさん、パンが出来たかね？』

『家のお婆さんは、食物が無いと言つて、喧嘩り散らしてゐます。』
『お婆さん、安心して、お歸りなさい。おいしいパンを上げませう。』
そこで和尚さんは、家へ歸つて『どうだね、ばあさん、パンが出来たかね？』





うぢやないか、一時たつて、こんな家に、住んで居られるものかね！」
と、喧嘩りました。
お爺さんは、また、海へ歸つて来て、いつものやうに、魚を呼び出しました。
魚は、姿を現すと、
「お爺さん、まだ何か、望みのものがありませんか？」
と、聞きました。
「新しい家を、一軒欲しいと思つて来ました。内のばあさんは、

怒鳴り通しに、怒鳴つてゐて、わしに、御飯も喰べさせて呉れません。こんな娘れかゝつた家に、住んでゐるのは嫌だといつて、怒鳴つて居ます。」
「心配することはない、安心してお歸りなさい。」
魚が言ひました。
家へ歸つて見ると、驚いたことには、娘れかゝつてゐたかすばらしい小屋のかはりに、立派な家が建つてゐて、丸窓の外には、廣いお庭もついてゐます。部室の隅には、立派な神棚もついてゐる。銀の燭台に、お燈明も上つてゐるし、ストーブが、赤々と燃えて湯沸しがたぎつてゐます。
お爺さんは、どんなによろこんだか知れません。そして、今度こそは、おばあさんも満足して、二度と自分を、困らせるやうなことは無いだらうと思ひました。
ところが、すぐそのしりから、



鋭い、お婆さんの叫び聲が起つたのです。
「聞けお爺さん！ お前さんは、自分で、自分の運の好いのを知らないのかい？ こんな家へ、住むやうになつたら、それ相當の、身分にならなければ仕様がなやないか？ わたしや、もう、貧乏漁師の女房なんかに、こりこいだよ、も一度行つて、頼んでお出で！ わたしを、將軍様の夫人にして下さい。そして、みんなに、尊はせて下さい！」
「お婆さん、望は何んだ？」
魚が言ひました。
「うちのばあさんは、日茶苦茶なことを言ひ出した。貧乏漁師の女房は嫌だから、將軍様の夫人になるのが望だと言つてをります。」
「よろしい、よろしい！ 安心してお歸りなさい、何も彼も承知しました。」
お爺さんが歸つて来た時、今迄の家のかはりに、何が出来てゐたと思ひになりました。
美しい、石をつみ上げた、三階建ての大きな家、廣い芝生がついてゐて、大勢の兵隊が、行きよして居ます。
台所の方からは、御飯の仕度を、急がしうな音が聞え、糊の着物を着た、立派な帽子をか

ぶつたおばあさんが、安樂椅子へ凭れかゝつて、大勢の召使ひを、額で使つてゐるのです。
「ばあさんや、お目出度う！」
お爺さんは、うれしそうに、言ひました。
「ばあさんやですつて？ 失禮千萬な！ 私は將軍夫人ですぞ！ ああ、これ、このおやぢを、馬小屋へ連れて行つて、別當の仕事をお教へてやり！」
「かあいさうに、お爺さんは、家來共に引きづられて、馬小屋へ行く、別當にされて終ひました。」
お爺さんは、別當の仕事が、つらくて、つらくて、たまりませんでした。
「何んといふ奴だ！ わしは、彼奴の望は、何も彼も、かなへさせてやつたのに、今では、わしを、亭主だと思はない！」
お爺さんは、ひとり言をいつてゐました。

暫く月日がたつと、おばあさんは、また、將軍様の、奥様ごつとに倦ましてつて、お爺さんを呼び出して言ひました。
「金の魚の所へいつて、頼んでお出で！ わたしは、もう、將軍夫人は嫌になつた。女王様がわたしの望だ！」
お爺さんはまた、海へ行つて、魚を呼び出しました。魚が、また姿を現して、今度の望は、何んだと言つて、聞きました。
「金魚や、きいてお呉れ。家のばあさんは、愈々目茶苦茶になつた。奥様遊びも倦きたから、女王様になると言つて、誤いでゐます。」
「お爺さん、心配することはない、何も彼もきくとけました。安心して、お歸りなさい。」
お爺さんが歸つて見ると、大きな將軍の船の替りに、何んと驚いたことには、大理石の御殿が聳えてゐて、金の瓦が、空高く



類いて居ます。
鐘をつけた兵隊が、鐵砲をかついで進軍して来て、御殿の前、の廣い芝生へ、集合します。露台へ現れたお婆さんは、すつかり、女王様になりすまして居ました。
「眞珠の首飾り！ダイヤの腕輪！金の冠！金の銀の籠ひとりをした赤い絹の着、錦襦の上衣が、長く裾を引いて居ます。」
三人の小姓が、白い毛の付いた三角帽をかぶつて、錦襦の裾を捧げて居ります。

「ウラア！ 萬歳！」
と、叫びました。
「かうして、お婆さんは、暫くの間、女王様で暮して居ましたが、間もなく、それにも倦きてしまつて、また、お爺さんを呼び出さうとしました。
しかし、もうその時には、お爺さんが、どんな人か、誰なのかも知つてゐる人がありません。御殿中、大騒ぎになりました。將軍も、侍従も、女王様の御機嫌を損じまいと思つて、漁師のお爺さんを探し廻りました。とうとう、最後に、一人の侍女が、馬小屋で働いてゐるお爺さんを見つけ出して、女王様の前へ連れて来ました。」

「出て来い！ 出て来い！」 金魚。
私達の望をまいて呉れ！
然し、魚は出て来ません。お爺さんは、もう一度繰りかへして言ひました。矢張り魚は出て来ません。お爺さんは、三度叫びました。と、忽ち海には嵐が起つて、小山の様な波が、逆立つて走つて来ては、恐しい響をたて、砕けました。
忽ち、海の水が眞黒になつてしまつたのではないかと思ふ程きれい澄んで、氣味が悪い程靜になりました。その時です。金の魚はすつくと、波の上に立つて言ひました。
『望は何んだ？』
「聞いて下さい！ ばあさんは、愈ゝ氣が狂つて終ひました。女王様様に倦きて、今度は、海の神様になりたいた、言つて居ます。世界中の海を統べて、魚といふ魚を召使ひにするのだといつて、喧鳴



つて居ます！
金の魚は、何んとも答へません



でした。黙つて、びよんと飛び上ると、一つ宙返りを打つて、そのまゝ、黒い波の底へ、消えていつてしまひました。

お爺さんは、歸つて來ました。併し、これが本當でせうか？

お爺さんは、どうしても自分の眼を信ずることが出来ませんでした。何ども、何ども、行つたり來たりして、探しました。併し本當でせう！本當に、そこには、美しい

宮殿の、痕跡もなくなつてゐて、跡には唯、ずつと、ずつと前の、壊れかゝつた、あの漁師小屋が、雨風にさらされて、建つてゐる許りでした。

「何んといふ、みすばらしい小屋でせう！ 窓も、戸も、壊れて外へ出てしまつて居ます。はがれた壁、氣が、ひら／＼と、ぶら下つてゐます。屋根を聳いた麥藁は、風に吹かれて、今にも、散らばつてしまひさうに、折いて居ます。入り口に、終へて居た大はお爺さんの瓢を見ると、懐しさうに飛びかゝつて来て、うれしさうに吠えました。」

家の中には、ぼろ／＼の着物を着たお婆あさんが、しよんぽりと壊れかゝつた椅子へ坐つて居ました。

お爺さん達は、またものと、貧乏な漁師になりました。お爺さんは、また網をかついで、毎日々々

魔法のステツキ

(エジプト)



海へ行きました。けれども、何も
變つたことがありませんでした。
不思議な金の魚は、二度と姿を
現しませんでした。

魔法のステッキ
(エジプト)

昔、エジプトの砂漠にスフィン
クスが立つてゐて、道行く旅人に
謎をかけたといふお話のある以
前のことです。



ギルタはお父さんが砂漠の中の
お寺に籠こもつて居りますので、一週
間いっしゅうかんに一度は種々しんしんな神様への捧げ物
を持つてゆきました。或日のこと
矢張捧げ物をする日が来ましたの
で、ギルタはお母さんの揃そろてく
れた海の昆布いんぷや、陸の野菜やさいや、山
の木の實みなどを袋に入れて、馬に
乗のつて出でかけました。

ギルタが恰度スフィンクスの前
を通り過ぎようとした時に、
スフィンクスは言葉をかけまし
た。

『もし、もし、ギルタさん、どち
らへお出になります。』

『私はこれから五里ごりば先のお
寺に行くのです。』

『その袋にはいつてゐるのは何なんな
ですか。』

『これは神様への、お供へもので
す。私のお父さんが作物がよく採
れるやうにと、神様にお願ひする
ため、お寺に籠こもつてゐますので、



わたしは、一週間ほど、
ものを持つて行くのです。』
『さうですが、それは御苦勞さま』
この時、ギルダは急にスフィンクスに、
からかつて見たくなりまし
たので、
『スフィンクスさん、あなたはか
うして毎日此處に立つてゐて種々
な人の語るの見てゐるやうですが
随分面白い話も知つてゐるで
せうねえ』
するとスフィンクスは待つてゐ
ましたとばかりに、

「何知つてゐますともさ。世界中でわたくしは、私位、物識りはありませんよ。人間なぞの思ひも寄らぬ事まで、やんと知つてゐますよ。」
「面白のお話しを一つ僕に聞かせて下さいな。」
今度はギルタの方が釣込まれ、横に本氣になつてしまひました。
「宜しい。お話しいたしませう。」
昔、この砂漠に一羽の駝鳥がいてね、不思議なことに金の卵を生むのですよ。駝鳥は人間や獸達に見つけられてはいけないと思つて、それを砂の中に埋めて置いたものです。所が、
こんな工合にスワイシクスが、やべり出すと、ギルタはもう夢中になつて話しの先を先と急がします。
ギルタが夢中になつてスワイシクスの話を聞いてゐる時、二人の泥棒が通りかかりました。そしてギルタの馬の腰に着てあつた

袋をそつとはづして持つて行つてしまひました。



話の途中で、ふふんと笑ひました。

ギルダは話が終わりましたので、ぼつと一息ついて出掛けようとして、気がついて見ると、さう大變、馬の腰に下げてゐた袋がありませんでした。あたりを探してもそこには落ちてゐるもので、

「スフィンクスさん、私の袋を知りませんか。」と問ねて見ました。するとスフィンクスはまたふふんと笑ひながら、

「知りませんよ。」と答へました。ギルダは仕方なく家の方へ馬を引返しました。若しや、道にでも落ちてありはしないかと探しながら行きましたが、どうして道に落ちて居よう道理はないのです。家へ歸つて来てお母さんにその事を話したら、

「心配せずには明日持つてお出で。」と云つて、その翌日また昨日と同じやうな捧げ物を揃へて下さいました。

ギルダはまたそれを馬の腰につけて出掛けました。スフィンクスの前まで来ると、

「もし、もし、ギルダさん。こゝまで話しかけました。ギルダは今日は昨日のやうに話に夢中になつてゐて大切な荷物を失くしてはならないと思つたのですから、わ

ざと知らない顔をして行き過ぎようとししました。

「もし、ギルダさん、蛙が蛇を呑んだ話を知つてゐますか。」

スフィンクスはギルダを追ひかけるやうに云ひました。ギルダは振り返つて、

「何、蛙が蛇を呑んだ話ですつて、妙な話ですね、そんな話は知りませんよ。」

「それぢやお話しさせようか。」

「え、是非聞かして下さい。」

かうしてまたギルダが話に釣ひ込まれて夢中になつてゐますと空から大きな鷲がすつと降りてきて、ひよいとギルダの馬から袋を渡つて行つてしまひました。ギルダは気がつきませんでした。スフィンクスはそれを見て話の途中でふふんと笑ひました。

話が終わつてから、ギルダはまたしてやられたことに気がついていまい／＼しくなりませんでした。

そのまた翌の日、お母さんはまた前のやうに捧げ物を揃へてから「今日こそはお前、スフィンクスなど話をしなはれませんか。」と固く云ひ付けました。

それで、ギルダはスフィンクスの前を通りました時、矢張り昨日の様に話しかけられましたが、今日は心をひきめてゐましたので、その手には乗りませんでした。

暫らく行くと大風が起つて、砂を捲き上げて空も暗くなる程になりました。ギルダはこれは大變と思つて一生懸命向ふに見える沢地（さか）の砂漠の中にある草の生へた所に向つて走りましたが、やつと其處に着いて命拾ひをして見ると、いつの間にか馬の腰に掛けてゐた袋がなくなつてゐました。

「おや、さてはあの太風が持つて行かれたのか知ら。」と思つて、今日で三日も無駄骨折をしてゐるのがつく／＼情なくなつて來ました。

間もなく天氣が穏やかになり、したので、ギルダはお父さんの行つてゐるお寺に着くことが出来ました。そして三日の間にあつたことを隠さず話して明日こそは必ず持つて参りますから、おくれたことはお赦し下さいとお願ひしました。お父さんはそれをまた長老様に話しました。長老様はギルダのところへ来て、



「ギルダさん、お前さんが三日とも捧げ物をとられてしまつたのはよく／＼のことぢや。今週はお前さんの心だけを神様に申上げて置くとしませう。」と云はれましたので、ギルダは歸つて來ました。スフィンクスの前へ掛ると、スフィンクスは「ふふん」と笑ひました。その様子を見てギルダは、

「は、ア、これはスフィンクスの奴が悪戯をしたのだな。」と思ひました。

「スフィンクスさん、あなたは臆

分ひひいすね。」

「何のことですか。」

「あなたは私の馬から三度とも袋を盗んだでせう。さあ、たつた今返して下さい。」

スフィンクスは大層困つた様子で、

「そんなことは知りませんよ。ギルダさん。」

「だつてあなたは先刻も、昨日もまた一昨日もふふんとお笑ひになつたではありませんか。あれは一體どういふ話ですか。」

「あれですか、あれはね、一昨日笑つたのは向の道を妙な荷を背負つてゆく二人の人間の格好が莫迦にお可笑かつたから笑つたのですよ。昨日は悪い奴が變てこな踊りをやりながら降りて來たからですよ。そして今しがた笑つたのは、お前さんの體も頭も砂漠のこり一杯だからなのですよ。」と云つてまたふふんと笑ひました。ギルダはいよいよ馬鹿にされたと思つて口惜しくなりませんでした。然し長老様はお赦し下さつても、この事を家へ歸つてお母さんに話したらどんなに叱られるだらうと思ふと、急に悲しくなりました。そして思はずぼろりと涙を流しました。

それを見たスフィンクスは可哀さうに思つたと見えて、

「ギルダさん、そんなにお困りなら、いゝお土産を上げませう。」と云つてスフィンクスは一層高く、



で呉れます。」

これを聞いてギルダは大層喜びました。そしてスフィンクスに厚



はいった袋を返して下さい。」と云つて袋を投げ出しました。

「ギルダさん、それは何かの間違ひでせうよ。そんな筈はないんだから。然しお前さんの袋を返してくれと云はれたつて返さないし、ちや今度は少し變つたものを上げませう。」と云つてスフィンクスが「鶏よ、お出で！」と云ふと、何處からともなく一羽の鶏がひよこひよこやつて来て、ギルダのそばに降りました。

「水を一杯飲んで下さい。」と申しました。百姓はすぐ承知して呉れ、そのので、ギルダは自分も飲み、馬にも飲ませることが出来た。百姓の親切で馬を木の蔭につなぎ自分も暫らく休んでおますと、百姓はギルダのそばへ来て、「いゝ羊皮の袋を持つてゐますね。」とお世辭を云ひました。ギルダは至つて正直な少年でしたから、この羊皮の袋を買つたわけや、その不思議な力のことまで話してしまひました。



でしたから、ギルダは云はれるままにその家の涼み台で晝寝をいたしました。

ところがこの百姓はギルダとはあべこべに心の善くない奴でしたから、忽ちその袋が欲しくなり、そこでなほ親切らしく、「大分暑も殺れてゐるやうですから、あなたも此處の涼み台で晝寝をしていらつしやい。」と申しました。成程暑は砂漠の中でひどい大風に遭つてから大分殺れてゐる様子

ギルダはまたスフィンクスに購されたと思つて、その翌日怒つてスフィンクスの所へ行つて、その事を申しました。『それはきつとお前さんは途中で誰かにすり換へられてしまつたに違ひありませんよ。それは今度はいゝものを上げませう。』と云つてスフィンクスが、『杖！』と呼ぶと、いつの間にか一本の杖がギルダの手に握られて



「この杖は「働け、働け」と云ふ

と何かしますから面白い杖です。そして「お休み、お休み」と云はないうちは決して止めません。」とスフィンクスは云ひました。ギルダはその杖を買つて家路に向ひましたが、スフィンクスの云つたことを考へて、若しかするとあの百姓がすり換へるのかも知れぬと思ひました。

百姓の家の前まで来ると、百姓はギルダの来るのを待つてゐて、向ふから水を飲んだり晝寝をしたりすることを勧めました。そしてギルダに杖のことを語りました。たがギルダは「アアに、この杖はぢき向ふで拾つてきたつまらない杖です。」と云つて本當のことは明しませんでした。ギルダは杖を自分のそばに置いて眠つたふりをして横になつてゐますと、やがて百姓はこっそり忍んで来ました。

「うむ、この杖も何れ度何かの役にたつ杖に違ひない。」と獨り言を云つて、杖に手をかけましたから、ギルダはすぐに跳ね起きて、「働け、働け。」と申しました。すると杖は滅多矢鱈に百姓の體を打ちました。百姓は苦しさうに呻き聲を上げて、けて「いゝ！」と申します。『それなら羊皮の袋と鶏とを返すか。』とギルダは云ひました。『お返しします。お返ししますからどうぞ助けて下さい。でないと私は死んでしまひます。』と百姓はやつと云ひました。

う。その鶏は毎日、七つづゝ金の卵を産みます。」と云ひました。ギルダは喜んでそれを貰ひ受け家路に向ひました。そして百姓の家のあるところまで来ると咽喉が渇いて来ましたが、立ち寄つて昨日のお禮を云つて、また水を運んで下さいと申しました。百姓は快よく承知してくれましたので、ギルダは自分も飲み、馬にも水をやりました。

百姓はギルダの持つてゐた鶏のことを語りましたので、ギルダはまた晝寝に話しました。すると百姓は昨日のやうな親切を見せてギルダに晝寝をしてゆくことを勧めました。ギルダは晝寝をしました。そして、百姓がそつと自分の家の鶏と取り換へたのも知らずに夕方になつて家に歸りました。だが、その鶏はもう老ぼれてゐましたから金の卵どころか、普通の卵だつて産みませんでした。

鷄は毎日七つづゝ金の卵を産み出したから、ギルタの家は忽ち大金持になりました。

謎を解く王子

(長篇)

王子アルマスは、六ヶい謎を解くために、コーカサスへ向つて出發しました。するとその途中で、悪い魔法使にかまつて、鹿の姿にかへられてしまひました。

アルマスは困つてしまつて、ボロ／＼涙をこぼしてゐると、そこへ、ヤミール姫といふ親切なお姫様が来て、『私がその魔法を解いてあげます。』と云ひました。

それに何か呪文を唱へながら、はげしく鹿の背中を打ちました。と、不思議、鹿がそこで一つづつと廻つたと思ふと、今までの鹿の姿はなくなつて、そこには勇ましいアルマス王子が立つてゐました。今までつけてゐた金や寶石は、その邊に落ちて散ばつてゐるのでした。



『お前の言葉もございません。有難うございました。』
姫はにつこり笑つて、すぐ腰元に衣装箱を持つて来しました。そしてその中から王子の着る服を出せました。

腰元達は大勢がゝりて、アルマスにその着物を着せて、それから改めて姫の前に案内しました。姫は優しくアルマスの手をとつて自分の脇に坐せました。そして、『あなたは何かおつしやる御方ですか。どこからいらつしやいますか。』と、どうしてあの魔法の魔法にかかれたのをご存じですか。』と、静かに尋ねました。

『ではアルマス王子様。あなたはまだ今でも、カフのワグへ行つておつもりなんですね。道中がずいぶん恐ろしいでございますわ。もう此處からは近うございますけど、あんな危いところへ行くのは、かしい人のすることではございませんわ。おもしろくないし、あのやうな方々、鬼や魔の餌食にじつしまふのは残念でございます。あのところへお降り下さいまし。さうすれば、あなたのお好きなことは、どんなことでもいたしますわ。』

『御親切はよくわかりました。今はもう、私の一生はあなたのお心次第に、どんなにでも出来てございませう、ですが、そこをどうか、ききとじていたいたいのでございます。あなたが私を愛して下さるやうに、私も亦あなたを愛してゐます。あなたが、本當に私を愛して下さるなら、どうぞ



鹿に用ゐるのをとめないで、出来るだけ御力をかけて下さいませ。さうして、私が首尾よく目的をとげました時は、あなたと結婚して、私の本國へおつれ申しませう。さうして一生を楽しく仲よく暮さうではありませんか。お願ひです。どうぞ私の願ひをきいて下さいませ。』

アルマスは丁寧な、そして熱心に頷きました。

『王子様、あなたのお心はよく解りました。それでは、妾、あなた

に差上げたものがございます。これは、どんな王様でも持つてゐない程の寶物で、きつとあなたの御役に立つものでございませう。第一にあの尊い弓と矢、それからあの劍。あの劍は鐵と石で作つたもので、石を打つても少しもきづつきはいたしません。切らうと思ふものは何でも切れる劍でございます。それから第三にアルマス聖人といい方が御自身でお作りになつたこの短刀。これはきつと一番あなたのお役に立つてございませう。これを持つておいでになると、駱駝七匹分の荷物を負はされても體の曲ることはございせんわ。で、これから一番にあなたがなさなければならぬことは、シムール鳥さんのうちへ行くつてあの人と仲よしにすることでございます。あの人と仲よしにさへなば、カフのワグへ行つてはわけないんでございます。なぜといつて、そ



の途中には七つも海があつて、今までいの方々の王様や貴い人が行かうとしても行けなかつたほどでございませうから、シムール鳥さんの力さへ借ることができればもう大丈夫なんでございます。『ありがたう。で、シムール鳥さんのうちはどこにあるのでせう。どう行けばいいのでせうね。』

『さうしますよ。さうしたらどんな目におおひになるか解りませんわ。』

そこでアルマスは、弓と矢を入れた矢筒と、劍と短刀とを身につけた矢筒。そこへヤミールは、紅絹の鞍袋を二つ出してきてアルマスにくれました。一つには燐き肉と菓子とが入れてあり、一つには寶石が詰めてありました。それから風のやうに早く走る馬を一匹用意してくれました。

『これから少しいらつしやると、いふ所へ参ります。贈り物の袋、といふ所で、獅子や虎や豹や狼や、いろんな獣が深山に住んで居ります。あなたはそこで、一晩お泊りになるのです。それより前にどこかで狩をなすつて、獲物を持つていらつしやらないといけませんわ。それは、その丘にある獅子王に差上げるんです。獅子王といふのは、そりやあんな王様

で、馬鹿にする態でもあらうものなら、それこそひどい目にあはせてそこを通しはしないんです。ですからあなたも、獅子王がいらないら、立つてうやうやしく敬禮をなさいます。そして布をもつてお額の土や塵をきれいに落してあげて、それから持った行つた獲物をちゃんと掃除してお出しなさいませ。そして、胸の上に両手をのせて畏まつてゐるつしやるのです。もし獅子王がそれを食べ度い様子がみえましたら、ナイフで細かくお切りになつて、おじぎをしてお出しなさいませ。さうすれば、きつと獅子王はあなたに打ちとけてずいぶんお力になつてくれますわ。黒ん坊に邪魔されても、それならもう大丈夫です。かうして獅子王へ贈り物をおすませになりまして、今度は「贈りの箱」を出て、道が二つになつたところへ来ますから、そこを必らず右の方へ



いらつしやるんです。もし左へいらつしやる、有名な「銀の城」といふ黒ん坊のお城へ行つてしまつて、それこそ大變な騒動がもちあつてゐるのです。」

を返つて出ました。そして、ある道の辻で名残のいいお別れをしました。ヤミール姫は、ときどきアルマスの方をふり返りながら、悲しうな足どりでもう股へ歸つてゆきました。

アルマ王子は、運命の神の手に懸つて「贈りの箱」へとやつて参りました。

来て見ると、何もかもヤミールが前に話してくれた通りでした。アルマスの眼の前にはずつと向うの方まで、今まで見たこともない美しい立派な城が澤山ありました。その門は「贈りの箱」の王様である大獅子の來るのを待つてゐました。

大獅子といふのは、鼻から尻尾までの長さが八千尺もあらうといふ、すばらしく大きな獅子でありました。アルマスは獅子の前に進み出て挨拶をしました。獅子は一

すうなづいたまゝずつと高坐の上へ上つて坐りました。ついて來た七八十匹の獸は、少しの間を置いて、獅子の周りにぐるりと集まつて坐りました。大獅子は右の手に左手の上にのせて、アルマスの方を見ました。アルマスはかねてヤミールから貰つておいたハンカチを出して、獅子の額の土や塵を拂ひのけました。そして獲物を前に出して、両手を胸の上に組み合せて、うやうやしく待つてゐました。

獅子王は、食べたいといふ風に合図をしました。アルマスはすぐ獲物を小さく切つて獅子王の口の中へ入れました。そのうち、お腹への獅子達が來ましたので、アルマスは、その獅子達に仕事をゆづらうと思つて手を休めかけましたが、獅子王はアルマスが氣に入つたとみえて、やはりアルマスに食べさせると合図をしました。で

アルマスはその通りにしてゐました。やがて獅子王は、アルマスを傍近く呼びよせて言ひました。

「ゆつくりと休むがよい。番民達が見張りをしてゐるから大丈夫だ。」



そこでアルマスは、見張りの獅子達にかこまれて、夜の明けまで眠りました。

あくる日別れるときに獅子王は自分の毛を三本アルマスにくれて「もし君に困つたことが出来たら

この毛を一本燃やし給へ。そしたらわしは立ちどころに其の場へ現はれるから。」さう言ひ残して獅子王は数の中へはいつて行きました。アルマスはすぐ出發いたしました。やがて、ヤミールが言つてゐたやうに、道が二つに分れてゐるところへ來ました。アルマスは、ヤミール姫から、決して左の道へ行つてはいけないと止められてきましたが、併し、行つてはいけないといはれると、よけいなんだか行つて見たくなりました。

「危険なことがあるといつたところが大事なことあるまい。」

アルマスは、かう思つて、左の道をとつて進んでゆきました。

やがて目の前に一つの城が見え出しました。これがヤミール姫の教へてくれた「銀の城」にちがひない。アルマスはすぐさう思ひ當りました。そして、ヤミールが折角とめてゐたのだから、もとの道



い人間の内を食べないので、大變秋しがつてゐたわけ。よし、こいつを持つて行つてあげよう。」

に引つ返さうかとも思ひましたが無理に勇氣を出して、なになに大丈夫だ。どうなつたつて大したことあるまいと覺悟をきめて、城の門の前で、馬を木につなぐとしてゐると、一人の黒ん坊が出て來てアルマスの見付けました。黒ん坊は心の中であつたのは、長ものが來たぞ。うちの大將は、

と思ひました。そこで、いきなり飛び出して來て、アルマスの馬の手綱をつかへました。

「下りろ、小僧め、大將のところへ來い。大將は前からとても人間の内を欲しがつてゐたんだ。」

「何を莫迦なことを言つてゐるんだわけのもの！」

アルマスはどなりつけました。

「まあいゝから早く來い。今にひどい目にあはしてやるぞ。そしてら烏がお経をあげてくれるだらうさ。」

黒ん坊はアルマスを引つ立てようとした。堪りかねたアルマスは、いきなりヤミールから貰つた魔法の鎖をぬいて「エイッ」と胸を横に拂ひました。黒ん坊は一寸の間、眞直に突つ立つて、何か口走りながら、飛びかゝらうとしましたが、その時、二つになつてぱつたり倒れました。

童心句

野口雨情選

滋賀 白井 岩 枝

○月に光る水田の中の水たまり (賞)

評、最近にない傑作です。なか／＼
ころは出ないものです。

秋田 梅田 雄太郎

お城には蟻の兵隊ザツクリコ
ドンブリコお月がする芒原

東京 齊藤 勝之進

活動のもどり淋しき夜の街

東京 小川 達三

ちよろ／＼とどこまでゆくんだ冬の川

秋田 近藤 泰太郎

○虹の橋 地球を空に吊してる

評、大きなリボンで吊してる。

栃木 奈良 美彌子

天の川あふれてついに雨となり

滋賀 白井 咲義

菊一輪咲いて寂しき空家かな

群馬 橋本 暮村

北風があとおしをする日暮れ道

長野 小林 清美

秋のあめしよんぼりと立つポストかな

東京 松本 秀穂

○カルタ 會猫さん炬燵で淋しさう

評、誰れか遊んでやらないの。

東京 鈴木 呼星

親牛がよだれたらしておかしいな

新潟 阿部 悦子

ひら／＼と赤い袂や春の風

大阪 菊地 和夫

「香星お空でひとりあくびする

大阪 中村 正義

○木枯しに星は散つたよ消えちやつた

評、枝にひつか／＼つてる星もある。

東京 小林 一路

縁側でゾリ／＼頭刺りました

群馬 青柳 花明

裸の木 裸のお月寒いこと

東京 津田 恒

しかられてちやぶだいのしみがなつかしい

福岡 梅林 新一

貫ろた柿見見い猿の一躍 (賞)

神奈川 茶木 七郎

○かくれんぼ犬も一所について来た

評、ボチも一所にかくれてナ

兵庫 大島 知恵子

山茶花の花が野風呂に浮いてます

東京 板谷 令子

朝もやの中は影舞の様でした

山形 花野 白蝶

親牛も子牛もすつばね上げてつた

長野 戸部 貞夫

霜柱たれが夜中にたてるやら

神奈川 幹 葉津子

大空へ豆つぶ程にやつと風

愛知 小林 直次

かくれんぼ寒いから日なたにかくれよう

神奈川 石川 雪花

夕焼だ ほうらやけるぞ赤とんぼ

東京 紫野 吐詩雄

○庭に居る雀 お家の中のぞき

評、雀おうち中は暖かさうだな。」

和歌山 榎本 清一

糞虫はぶらんこに來て揺れてゐる



童謡

野口雨情選

(大人篇)

ふもとの道

東京 川島 秀雄

馬がゆきます

ふもとの道を

馬子にひかれて

落葉をふんで

馬がゆきます

ひのくれどきを
背に落葉を
一枚のせて

明るい晩

埼玉 中島 正三

ちよつと寒そな晩でした

十五夜さんが

出てました

大へん明るい月夜です

ハモニカ吹き〜

歸りです

お水が平に澄んでいます

黄色くお月が

うつります

枯れたすきが寒そうに
お水にたれて
をりました

赤土山

岐阜 鳥本 夫二

赤土山の

赤松は

土の色より

まだ赤い まだ赤い

赤土山で

日が暮れて

雀と歸る

村の子は 村の子は

赤土山の

赤土を
拾つて歸る
どこ歸る どこ歸る

たんぼ道

岐阜 土屋 静文

たんぼ道

ぼそ道

さむい道

たんぼの中の

水たまり

半かけお月さん

ふるへてた

たんぼ道

ぼそ道

さむい道

げんごろう

岐阜 伊藤 益平

げんごろう

はねろ

山みて はねろ

いたどり葉の

あかい

池

早咲梅

埼玉 持田ミサオ

徒鳴 小敏

夕日影

早咲梅が

咲いてるナ

竹垣 まがき

冬日影
雀もチユン〜
啼いてるナ

縞笹 小笹

ゆれてゐる

早咲梅も

ゆれてるナ

とんぼ

東京 篠崎 保正

赤いとんぼは

あしやれとんぼ

赤いとんぼは

よめさんとんぼ

むきわらとんぼも

あしやれとんぼ

むきわらとんぼは
むこさんとんぼ

赤土山



牧場

東京 上田 弘一

秋のまきばは

お日和ついき

もうもに青空

みせてやろ

青空青いに

親牛やみない

ねんねしちや

干草たべてゐる

あの子二人で

もうもみにきてる

小牛や赤い靴

もうみてた

稲つけ

青森 佐々木 孝

稲つけお馬
ゆつさゆさ
夕日のまろい
土手の上
お馬も人も
ゆつさゆさ
はんの木道も
ゆつさゆさ
水田にうつつて
ゆつさゆさ
土橋わたつて
なやのなか
暮れたお空に
一つ星

おるす番

東京 和氣伊勢雄

工場の汽笛が
鳴つたけど
時計が六つ
打つたけど
だけど母ちゃん
まだ来ない
泣き泣き
お背戸に出て見たら
げつこく蛙も
鳴いてゐた
たんぼの 月夜
たんぼの たんぼの

お月夜は ホレお月夜は
お月さん キラ／＼
水の中 ホレ水の中
たんぼの たんぼの
お月夜は ホレお月夜は
コロ／＼蛙の
子守唄 ホレ子守唄

細道歸ろや

東京 矢崎 三郎

歸ろや歸ろや
山の細道歸ろや
右の細道豆狸がゐるぞ
左の細道コンコン小狐
歸ろや歸ろや
眞中細道歸ろや
歸ろや歸ろや

雀の巢

岩手 織田 秀雄

寒い笹簀雨降りて
子供寝かした親雀
キヨロリツとこち見て
買物に出かけた
風邪ひいた妹と
えんがわで
静かな笹簀
見てゐたら

あゝ冷たい風も
吹いて来て
あの簀かけのほそ道を
犬がたつたつかけてくる

きり

長野 島村 伊彦

今朝の
きりの深いこと
高いボブラも
見えないし

小雪女郎

大阪 兼松 竹夫

みんなのかほも
見えないし
とんぱし
東京 柿沼 喜一

とんとん
戸にきて戸をたたく
小雪女郎や
お母さん
とんとん



たんぼ

戸にきて戸をたたく
小雪女郎や
さみしかる

日が暮れる

埼玉 馬橋 昌作

この葉サラ／＼
お日様沈む
米つき見さん
まだ来ない
この葉サラ／＼
お日様沈む
じん／＼自轉車
霞の中
この葉サラ／＼
お日様沈む
野火はとろろと
燃えてゐる



童謡

野口雨情選

(子供篇)

お月さん (賞)

東京 板谷 令子 (十五才)

トンロリトロロお月さん

今夜のお月さん

おぼろ月

何んでぼんやり

夢みてる

トンロリトロロお月さん

今夜はクリスマス

おぼろ月

一人でみやげの

夢ばかり

トンロリトロロお月さん

今夜のみやげは

何でしよう

あてたら二人で

わけをする

秋

(賞)

群馬 小山 治喜 (五)

あさがきた

木のはがあらた
どこまでいくか
あつかける

あの家 (賞)

埼玉 黒川 秀子 (三)

向ふのく

あの家は

白かべ造りの

くらの家

一本二本の

はんの木で

ちらり見えてる

あの家は

かへり馬

埼玉 関口 竹子 (三)

一四二

お山のく
向ふから

あれく聞える

鈴の音は

かへりの馬か

りんくと

だんく

遠くなつて行く

日ぐれ

千葉 小名木由三 (六)

畑から歸りに

西の空見たら

木の間木の間が

光つて見えた

とうがらし

千葉 五十嵐嘉久子 (六)

ほそいとうがらし

真赤だ

赤とんぼの

しつぽのようだ

ペンく草

千葉 小川 駒郎 (十三才)

ヒヨッココリ生れた

ペンく草は

風吹きやあ屋根で

ゆらくゆれる

ヒヨッココリ生れた

ペンく草は

風吹きや小雀あ屋根で

じやれます

笹藪

大分 森本 (高) 晋

ササがブルく

ふるへてる

今夜の風が

さむいのか

それとも風を

ひいたのか

温泉祭

大分 櫻井八重子 (五)

どんどこく

温泉祭りだ

にはかじや

通りもんだ

どんどこく
温泉祭りだ



雨がふる

かかしにからかさ

かしてやれ

雨上り

福岡 王寺 千鳥 (十五才)

みかんのはつばが

揺れてゐる

西風が吹いて

揺れてゐる

みかんの下で

ひよこが鳴いた

雨

東京 水野 幸雄 (十二才)

こんこんこん

一四三

金の星誌友大募集

金の星の誌友になりたい方は、ハガキで御申込み下さい。
早速『誌友規則』をお送りいたします。誌友になると種々な利益がありますから、どうかふるつてお申込み下さい。

童心句掲載外佳作

村木 良三(東京) 高岡 千尋(東京)
後藤 英二(岐阜) 鹽井 茂利(栃木)
山下 康明(福井) 石川 和彦(茨城)
野川 長治(千葉) 柴野 忠信(東京)
川口 常男(福岡) 中村 武男(東京)
新田 勝(福岡) 前田 修(兵庫)
内田 みわ(茨城) 八十島 楓(北海道)
茅野 學(山梨) 醍醐 正明(東京)
福島 正夫(東京) 後藤 賢三(東京)
磯貝 金之助(東京) 松井 俊郎(東京)
田中 喜一(東京) 齋藤 正治(東京)

小島 一夫(愛知) 赤羽宗四郎(東京)
越村 和賀(東京) 島田 保正(埼玉)
友田 明子(京都) 高野 房一(埼玉)
大辻 繁松(大連) 小川 朝郎(千葉)
持田 ミサオ(埼玉) 小野 モル(千葉)
杉山 一男(山口) 山本 力(朝鮮)
藤村 つとむ(大阪) 原田 みさ(神奈川)
縁 光恵(愛知) 島本 夫二(愛知)
田中秋夜(神奈川) 駒井 キミ(京都)
新倉 しげる(神奈川) 山中 一男(熊本)
岡田 落太(埼玉) 駒井 芳三(京都)
島田 保正(埼玉) 利根 深雪(石川)
兒玉 新一(秋田) 山田 三津夫(東京)
内田 かつ(茨城) みどり星(京都)

中島 正三(埼玉) 大石 武男(山形)
河野 真吉(朝鮮) ゆきみつ(東京)

童話掲載外佳作

土屋 静文(岐阜) 朝比奈 豊兵衛
堀田 信孝(朝鮮) 大島 知恵子(兵庫)
西浦 孝一(京都) 石川 雪花(神奈川)
垣内 まさる(不明) 八十島 楓(北海道)
中里 素行(神奈川) 井手 経子(大連)
早田 稔夫(和歌山) 小牧 昌徳(東京)
土屋 輝子(東京) 榎本 清一(和歌山)
佐藤 カツ(栃木) 山本 保雄(長野)
牧野 刀秋(東京) 河野 牧草(朝鮮)
中村 隆春(不明) 川口 常夫(福岡)
大島 清正(東京) 杉山 並蔵(東京)

童話掲載外佳作

中村 里郎(兵庫) 松本 秀穂(東京)
北野 朝子(京都) 渡邊 直新(福岡)
大島 清正(東京) 宮田 晴則(茨城)
利根 元春(石川) 小林 直次(愛知)
瀧田 望月(千葉) 朝比奈 豊兵衛
小川 雪花(神奈川) 金木 忠徳(長野)
石川 達三(東京) 前田 信治(新潟)
八十島 楓(北海道) 風間 修兵(兵庫)
太田 貞夫(愛知) 後藤 英二(岐阜)
澤渡 吉彦(山形) 吉川 行雄(山梨)
稲垣 たけを(東京) 森 夢村(岡山)
平野 薫(静岡) 小林 貞雄(群馬)

新らしく出た本

○日本童話選集(第二輯)

(童話作家協会編)

立派な本である。堂々たるものである。現代の童話作家、四十名氏の代表的傑作を集めたものであるから、粒々みな寶玉の如き輝きをもつてゐる。無責任なる童話集の濫發時代に、かかる絶頂の點に於て優秀なる本の出現したことは眞に賀すべきである。装幀、紙質ともに申し分なし(菊判箱入五五〇頁、挿畫色刷四十枚、定價參圓七拾五錢日本橋區通三丁目、丸善株式會社發行)

○ナポレオンを捕へろ

(金蘭社發行)

本誌でおなじみの小島政二郎先生の名作がいよいよ發行になりました。有名なゼラーン將軍の冒險談を、先生の流麗なる筆で譯されたものですから、面白いこと限りありません。先生はその序文の内に、この本を翻譯するのに年少の友人に理解しやすいやうにと、かなり自由な態度をとりました」と云つてをられます(四六判箱入、一八〇頁、挿畫三色版他多数入、定價九拾錢、東京市外巢鴨上駒込二十八、金蘭社發行)

(子供篇)

岩井 きく(千葉) 岩井 俊(千葉)
石井 喜太郎(神奈川) 吉崎 泰吉(神奈川)
武井 義雄(神奈川) 五十嵐 嘉久(千葉)
榮建 猛男(鹿児島) 新井 千鶴子(埼玉)
市川 ふく(埼玉) 阿瀬 見ハナ(埼玉)
小林 直次(愛知) 渡邊 正雄(愛知)
川原 芳男(北海道) 渡邊 正雄(愛知)
米山 義人(神奈川) 安藤 武蔵(東京)
今村 夏樹(東京) 榮本 重之助(長野)

新誌友名簿

川島 秀雄(東京) 出澤 良男(富山)
福原 章子(神奈川) 圓山 夢路(大阪)
井内 昇一(大阪) 林原 義雄(大阪)
中村 利雄(大阪) 大連 繁松(大連)
佐藤 静子(東京) 榮建 元治(鹿児島)
中原 初太郎(朝鮮) 富田 昇(岡山)
榮野 民三(東京) 内藤 昇(岡山)
加藤 純次郎(東京) 飯田 彦馬(東京)
椎名 正雄(東京) 小町 ゆみ(東京)
佐藤 大二(大阪) 小橋 運夫(東京)
佐藤 正雄(大阪) 本島 三三(青森)
加藤 正雄(大阪) 大谷 民雄(大阪)
早川 貞明(廣島) 榎本 かや(廣島)
香川 重兵衛(福岡) 佐藤 哲三(東京)
白杉 政治(福岡) 平岡 銀藏(大阪)
今村 誠(富山) (以下次號)



金の星社 二月號

出版だより

出版部より

○十二月中に「輸入世界童話（ロシアの巻）」と「沙漠の魔女」と「金の星家庭文庫」の第五巻とを發行いたしました。立石美和先生の「少年天才物語」は念入りにやつてをりますために、また一ヶ月後れしましたが、いよいよ全部まとまりましたから一月中旬に發行になります。○「少年天才物語」はたび／＼申上げましたやうに、内容が非常にすぐれた本であつて、おそろく近頃での名著として評判される本であります。挿畫も装幀も特に名家ばかりにお願いいたし、十九枚の挿畫は全部川上四郎先生。カッポは羽島古山先生。表紙挿畫は富田千秋先生。いづれも名家の手になりましたから、内容と共に理想的の本が出来たわけでありまして、一月はじめに發行になりますから是非御一讀下さい。

○一月中には、なほこの外に久米邦武先生の「少年發明家物語」と三島雅川先生の「南朝哀史・新田義貞」が發行になります。

○「少年發明家物語」はさきに發行になつた久米先生の「少年探險家物語」と姉妹篇となる本であります。この發明家物語の方は、發明王エジソンをはじめ、古今の大發明家の血と涙の奮闘と苦心のあとを、皆さんによくわかるやうに面白く書いたものでありますから是非一度はお読みになつて置くべき本であります。

○また「南朝哀史・新田義貞」は、楠正成と共に南朝のために奮戦した新田義貞の悲壯な一生を物語にしたものでありますから、あら、どなたがお読みになつても、面白くてたまらない物語りです。新田義貞は有名な武人ですが、これまで、あまり本になつてをりませんでした。

近刊書おしらせ

○親孝行な少年少女の話
(大月喜一郎先生著)

親孝行をした人達のお話で皆さんに知られてゐるのは、たいにだに、苦心をなされたかわかりません。漸くにして出来上つたこの「新田義貞」は、その當時の日本歴史を知る上にも、又南朝のために命をなげうつた英雄新田義貞の悲壯な一生を知るために、どれだけ参考になるか知れません。

○皆さん、どうぞこの「南朝哀史・新田義貞」を御一讀下さい。皆さんは此の本によつて、昔の武人達がどんな「かなんしんく」をしてその一生を終つたかといふこともおわかりになりますし、ことに尊い御身分の宮様までが命をお捨てになつて奮戦なすつたこともわかつて、深い教訓になります。

○金の星社からは、ぞく／＼良本が出ますが、二月には三井信衛先生の「少年大飛行家物語」や大戸喜一郎先生の「親孝行な少年少女の話」といふやうな面白い爲めになる本が發行になります。

○この本にあらはれて来るお話の中の少年少女は、貧乏な家に生れた人や、今までは立派な暮をしてゐたのに急に不幸に出遇つた人や、じやけんなまゝ母に苦しむ人や、その他の外／＼の困難な境遇にあつた者ばかりです。

しかし、この物語の少年少女は、どんな困難にも負けずに立派な行をしました。さうして、その地方での模範の少年少女として誰知らぬ者にも評判になつた人ばかりです。

○お話の数は十九。日本のお話が多く、支那や西洋のお話も入つてゐます。どのお話も、みな深い感激をもつたものばかりですから、皆さんがお読みになつたら、なるほど良い本であると思ひになります。

讀後感

讀後集 青い眼の人物 (賞)
京都府師範学校寄宿舎 西浦孝一

先づ第一に装幀の美しさに目をうばれます。落つた表紙の目に細い線の模様。何度眺めても見あきません。口絵の「青い眼の人物」さんが又可愛らしい。寺内、武井、露屋三先生の挿繪はみんな美しいものばかりです。『名所めぐり』はみんなゆかしい作品ばかりです。

『田浦の狐』は面白い。五兵衛さんに化けたり、又お醫者さんやお嫁さんに化けます。そしておきよといふ姉さんや犬にみやぶられてしまふ面白い狐です。僕はこの本を何度も何度も讀みました。そして食後なんかに勝手な節をつけて歌つてゐます。大變美しい面白い本です。

太閤秀吉を讀む (賞)
朝鮮京城春草町 河野砥吉

太閤秀吉のことを書いた本はいくらもありませんが、金の星社の太

閤秀吉ほど面白くわかり易く書いた本はないでせう。金の星社の太閤秀吉は面白いと同時に歴史的觀念をおこさせます。笑はれる所もあれば、眞面目にさせられる所もあつて、實にこれこそ眞の太閤秀吉傳といつていい本です。装幀口繪挿繪も立派なものです。金の星社の本だけと思ひました。

「ローマ英雄物語」 (賞)
鳥取縣東伯郡三徳村門前 諸友武部政一

「ローマ英雄物語」おゝなんと面白く美しい本でせう。松政徳次郎畫伯の麗筆になる美しい三色版をもつて飾られた茶色のクロロス装幀は一目見ただけで心をふるわせる「ブリュターク英雄傳」とかいふんな本で、ローマの英雄物語も多少讀んでゐたが、今度金の星社の名著大系で發行になつた「ローマ英雄物語」を讀んで全く驚いてしまひました。ローマを最初に開いたロムラスとレマスの不思議な物語からはじまつて、シーザーやハンニバルなどの大英雄が現れて活躍する有様、實に面白くて胸をおどらせます。

少年偉人英雄叢書 (四)

○少年大飛行家物語
(三井信衛先生著)

全國の少年少女の方々に、是非この本をお読みになるやうおすゝめいたします。全國の各小學校にも、一冊をそなへつけていたゞく事を望みます。

少年偉人英雄叢書 (四)

アメリカのリンドバーク大尉が飛行機に乗つて、一気に大西洋を横斷した事は、皆さん御存知でせう。併しリンドバーク大尉の生立ちや、あゝとした大成功を見るまでの苦心談は、あまり世に知られてをりません。本書にはリンドバーク大尉の苦心談をはじめ、世界に名高い大飛行家達の事業が、三井先生のなだらかな文章で、誰れにも面白いやうに書かれてあります。歐洲大戰の時、ドイツ軍は四方を敵に囲まれましたが、少しも屈しませんでした。勇敢なドイツの軍人は、ツェツペリン式飛行船に乗つて、夜の間に乗じてドーバー海峡を越え、はるかにロンドン街を襲ひました。やすらかな夢をおそらしい爆弾に破られたロンドンの人達は、どんなに驚いたこと

でせう。このツェツペリン式飛行船を發明したツェツペリン伯の一生などは、どんなに皆さんに興味深々讀まれるものでせう。新時代の少年諸君が見逃がすことの出来ぬ名著であります。

○繪アラビヤン・ナイト
(金の星社編)

本社では先に「少年少女名著大系」から「アラビヤン・ナイト」を發行して、大評判をとりましたが今度はこの本に数倍する「大アラビヤン・ナイト」を作る事になりました。舊版三百頁の堂々たるもので、三色版、二色版、黑白版など總數百餘枚の挿畫を入れましたので、實に眼もさめるばかりの、あてやかさです。アラビヤン・ナイトは皆さんも御承知の通り、不思議な魔法のお話や身の毛のよだつやうな怪談や美しい王女と王子の話などを集めたもので、その面白さと云つたら實になんともかんと云ひやうがありせん。皆さんから大喝采を受けること、うけあひです。二月上旬に發行になります。楽しみにしてお待ち下さい。

大懸賞『事實美談募集』

金の星新年號に於て詳しく發表しました通り、今度「金の星社」では、日本全國から大々的に「少年少女美談」を募集する事になりました。日本全國には、未だ知られざる多くの少年少女美談がかくされてゐるに相違ありません。親に孝行な少年の話もありませう、友に親切な少女の物語もありませう、或ひは又貧乏な暮らしにも耐へないで、勇ましく自分の務めを果たしてゐる眞の勇者もありませう。どうか、さうした話を御存知でしたら、僞はらず餘らず、ありのままに書いて送つて下さい。書き方がどんなにまづくとも、誠意さへあれば結構です。本社では、選者の先生がそれに筆を加へて誌上に發表します。(加筆の必要なく、そのまゝ發表できる物でしたら尙更結構です。)幸ひにしてこの企てが成功して、「かくれたる美談」を續々と世に紹介することが出来ましたら、その喜びは恐らく私共ばかりではないでせう。本社は將來それを一冊の本にまとめて、全國の小學校へ一冊づつ頒布して、兒童圖書館に備へたい希望であります。

〆切期日も近づきました。どうか振つて御座下さい。

選者 沖野岩三郎、野口雨情、立石美和、齋藤佐次郎の諸先生
賞金 一等(一篇)參拾圓 二等(一篇)拾五圓 三等(三篇)七圓
枚數 二十字詰二十行原稿用紙十二枚まで (詳細は新年號を)

二月號懸賞考へ物



この畫は二月號の「金の星」をお讀みになつた方にはあ
わかりになります。木の上にある男の子の名前は、なん
と云ひますか、をしへて下さい。

とびらゐの説明

一五〇

ルミと云ふ少年がりました。ルミは、もと伯爵家の若君だつたのですが、ふとしたことから捨兒にされて、ある貧乏人の家で育てられました。ルミは間もなく、ある旅藝人の手に渡され、犬や猿などと一緒にいるんな藝當をしながら、旅から旅へとさすらひあるく身となりました。ある時は雪のつもつた森の中で、狼の群に襲はれたこともありましたが、又ある時は巴里の郊外で、寒さのためにもう少しで、凍え死なうとした事もありました。ルミは、こんな辛い悲しい目にあひましたけれど、どんな場合にも明るい心を失なひませんでした。常もある「希望」をもつて、すべての困難に打勝つて行きました。

これは有名なマローの傑作「家なき兒」の梗概です。挿畫の場面は、いま主人公のルミが、駱駝を弾いてゐる所です。前に帽子をくわへて、お客様からお金をいたゞかうとしてゐるのは、愛犬のカビ君です。

二月號考へ物おこたへ用紙

おこたへ	
ところ	
なまへ	

〆必ず右の答案用紙をつかつて下さい。ハガキに書いては
けません。
〆書いたら封筒に入れ、開封して下さば二錢で届きます。
〆宛名は 東京市外田端三五「金の星社」ゆき
〆しめきり 二月一日。

- ご 一等(二名).....金參圓(圖書切符)
- ほ 二等(三名).....金貳圓(圖書切符)
- う 三等(十名).....金五十錢(圖書切符)
- び 四等(一千名).....金の星特選エハガキ

懸賞創作募集

【意 注】

童 童 童

【意 注】

童 童 童

心
句・話・謠
野・立・野
口・石・口
雨・美・雨
情・和・情
先・先・先
生・生・生
選・選・選

課題は何でもかまひません。諸君の日々見た感じなり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに句なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢とともに）おとさないやうにして下さい。

用紙は章心くじはハガキ、童謡や童話はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は一月廿九日その以後は次號へ廻し發表は四月號、宛名は東京市外田端三百五十二番地金の星社。

(一般讀者の創作)

心
句 話 謠
野 立 野
口 石 口
雨 美 雨
情 和 情
先生 先生 先生
選 選 選

童謡には十五以内、童謡は二十字詰二百行以内、童心句はハガキ一枚に三句以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として発表いたします。推薦の場合は童謡には五回、童謡には一回づつ、特選の場合は童謡には拾回、童謡には五回づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童謡として「入賞」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、発表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所氏名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

廣告料は御照會次第お答へ致します

【意注の金送】

- ▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
- ▽送金は振替が一番便利 御座います
- ▽切手代用は(壹錢切手)一割増です
- ▽第何巻第何號よりと書いてください
- ▽住所姓名はつきり書いてください

振替口座東京五九五九六番

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
 三ヶ月分三冊(送料共)壹圓貳拾錢
 半年分六冊(送料共)貳圓四拾錢
 一々年分十二冊(送料共)四圓八拾錢
 但し新年號は特別號で五十錢ですから、
 御注文の節はこの分だけ必ず加へてお
 拂込み下さい

昭和三年二月一日發行
行一日發行

東松府瀨野川町中野百二十七丁目
岡村素子人 著 素子 呆

東京市芝區富町三丁目十五番地

印刷人 蘆谷房三

三賞印刷委員會
東京市芝區愛宕町二丁目十五番地

日 月 三 寶 曰 月 合 掌 會 前

東京市外郎路三百三十一番地
發行所 金の星社

電話小石川五三三八七番

著者が数年間の苦心の結晶であるこの一大名著が遂に出版されます。東西の天才を網羅すること十八人。しかも、これだけ深い感動を與へる本も少いでせう。

立石美和先生著・川上四郎先生畫

少年天才物語

四六判箱入美本・定價壹圓八十錢
內容三五〇頁・送料十錢

本書こそ不朽の名著であると思ひます。日本全國の各小學校は本書一冊を備へて教材として使用される必要が有ります。装幀挿畫は『金の星』でおなじみの川上四郎先生です。

磨齒ンオイル

すずしい あま
ライオンねりはみがきで
齒をみがけば
きつと むし齒になりません。



夜寝る前に
齒をみがけば、
きつと きつと
むし齒になりません。

